

あり

第六 外陰部の清潔法

外陰部は初め朝夕二回第八日の頃に至れば一回宛ガ
 一ゼ又は脱脂綿を一布仙のソール溶液に浸して拭ふべ
 し創傷ならば沃度仿謨又は硼酸末を散布するを要す然る
 後ち外陰部には消毒せるガーゼを置き其上に二枚若しくは
 三枚の壓抵布を重ね丁字帯を施すべし此際壓抵布と丁
 字帯との間に油紙を挿入する時は悪露多量に分泌するも
 褥婦の衣服其他を汚染することなし壓抵布とは幅三寸縦
 七寸の大きさに切りたる長方形の脱脂綿をガーゼにて被
 たるものなり

腔内の洗滌は正規の経過を取れるものは敢て其必要
 を見ず却て不完全の洗滌により損傷又は傳染病を誘發す

るの害あり故に助産婦は醫士の命によらざれば之を行ふ
 べからず

第七 褥婦全身の清潔法

褥婦は悪露の排泄あると發汗の多量なると沐浴せざ
 ることにより身體甚だ不潔となり易きを以て殊に其清潔法
 に注意すべし即ち褌衣は發汗の爲め濕潤し易き故に屢々
 乾燥せるものと交換すべし又一日一回夏季なれば二回微
 温湯にて手拭を搾り褥婦の身體を足部に至るまで悉く拭
 ふべし殊に頸部腋窩大腿の内面を丁寧に拭ふを要す其他
 褥婦の手指は總て一日數回温湯及び石鹼を用ひて洗滌す
 るを良とす

第八 強劇なる後陣痛の處置

後陣痛 強くして頻回発作する時は下腹部に氷巻法を施すべし第三日以後には冷巻法となすべし久しく氷巻法を貼すれば其部凍傷を來すを以て注意せざるべからず此の法によりても尙緩解せざれば速に醫治を求むるを要す但し假令後陣痛強きも發熱を伴はざる時は疾病にあるものにあらず

第九 大小便の排泄

大便 は分娩後第四日より毎日一回づつ通利あるを良とす若し之れなきときは微温の石鹼溶液をイルリガートルにて灌腸すべし又石鹼溶液中に一食匙の食鹽を加ふる時は通利し易し此の如くにして尙通せざれば其處置を醫士に依頼するを要す決して助産婦自ら下劑を投すべからず若し瀉りに之を用ふる時は劇しき痲痛又は強き下痢を來し其他腸胃下腹内臓器の炎症を誘發するを以て正規の産婦経過を妨ぐるごとあり

尿の排泄にも亦注意するを要す若し尿閉する時は屢く危険を來すことあり故に分娩後は一日數回便器を以て排尿を試ましむれば自然に排泄するを得べし分娩後二十四時間を經るも尙ほ尿を排泄せざる時は温暖なる手拭を以て膀胱部を巻法し尙尿の排泄せざる時は助産婦は嚴重に消毒せるカテーテルを以て之を排泄せしむべし若しカテーテルの挿入甚だ困難なる時は醫士に依頼すべきものとす又尿閉を來せし際に於て尿道をよくする飲料を與ふる時は尿の分泌盛なるが爲め益々膀胱に蓄積するを以て此の如きものは與ふべからず而して分娩後第七日間に於ける大小便排泄の際は便器を用ひ決して固に行かむべからず

第十 褥婦の衣服及び臥床の交換

交換すべき衣服 は新調せるもの或は洗濯したるものを
 常用ひ豫め温め且つよく乾燥せしむべし産褥室の温度
 は常に平等にして始終列氏の十五六度を保たしめ産褥床
 は直接に風に觸れざる場所に設置するを要す凡て褥婦の
 衣服又は臥床の交換は大に注意すべきものなるが故に分
 娩後九日間は助産婦自ら之を交換し其交換はなるべく午
 前中に於てするを良とす之れ午前中には通常早朝或は夕
 方に比し褥汗の分泌少量なるを以てなり而して臥床の交
 換時には室内の温度を尙ほ二度程高くすべし此交換時に
 當り若し褥汗の分泌多量なれば温めたる綿布を以て身體
 を拭ひ暫く過ぎ褥汗の止むを待ちて後ち交換すべし又豫
 め二個の産褥床を列べて準備し置き是まで用ひし臥床よ

り他の温め置きたる新床へ移すは最も適當なるものとす
 若し別に二個の褥床を設くる能はざる場合に於ては臥床
 を改むるの間適宜の假床を造りて之を温め褥婦を此處に
 置くべし但し衣服及び臥床の交換に際して助産婦はなる
 べく褥婦の身體を動揺せしむることなく静かに且つ迅速
 に行ふを要す其他褥婦をして此際自ら起立し又は歩行す
 るが如きことなき様最も注意すべし

第十一 産褥室に於ける空氣の交換

産褥室 は亦産室と同じく相當の廣さを有し室内の空
 氣は常に交換して清潔ならしむべし又濕氣を避くるが爲
 めに濕りたる衣服を室内に掛くべからず且つ煙草其他の
 煙りを室内に止めぬ様注意し殊に不快の臭氣を發する便
 器等は直ちに他へ移すを要す而して晴天の日なれば毎日

敷回窓戸を開き少時間開放して室内の空気を交換すべし
 此際戶外より入り来る風を直接に褥婦に當てしめざる様
 注意すべし時候不順なれば先づ隣室を開放して其室内の
 空気を交換し置き次に其室を閉ぢたる後産褥室と隣室と
 の間を開きて此内の空気を交換すべし又薫香を焼き香水
 を撒くが如きは唯悪臭を消すのみにして空気を清潔なら
 しむるの作用なきものとす其他室内の掃除は濕りたる布
 片を用ひて拭ひ取り塵埃の飛散せぬ様防ぐを良とす

第十二 授乳

母の授乳は獨り小兒の健康を保つに大切なるのみな
 らず之れが爲めに褥婦は食氣を増して榮養を進め且つ子
 宮の收縮を促し惡露の閉止を早からしめ以て産褥の経過
 を善良にし生殖器の疾病を防ぐ等母體に於て大なる利益

あるものなり
 授乳時間 褥婦七八時間安眠せるの後ちは直ちに第一
 回の授乳をなさしむべし俗間に於ては往々一二日間乳房
 に就かじめざることをあり此の如きは甚だ不良にして小兒
 は衰弱の爲め哺乳力を減じ乳房は刺戟を受けざるを以て
 分泌増進せざるに至るものなり第一回の授乳終らば爾後
 時間を一定して之を與ふるを良とす始めより時間を定む
 れば小兒は能く之に慣るゝものなり時として此習慣の困
 難なることあれども授乳婦の熱心により多くは數日にし
 て慣るゝに至る此の如き習慣は小兒の發育に最も佳良な
 る關係を及ぼすものなり之に反し當初を不規則に授乳し
 一時の愛に溺れて等閑に附すれば終に之を改むるの時期
 を失ふに至る故に晝は凡そ毎二時間と夜間は哺乳休息
 止時間を長くして成るべく母兒共に安眠する様習慣せし

むべきを以て凡そ毎四時間となすべし
授乳の方法 乳房は左右屢々交換して與ふるを良とする
 れども一回の授乳間には一側に就かしむべし今右方の乳
 房を授けんとせば褥婦は右側に臥し右の肘を杖きて身
 を支へ其前腕を以て小兒を抱き豫め清潔に拭ひ置きたる
 小兒の口に含ましむべし左側の乳を授けんとする際は左
 側に臥せしめ右方に於けるが如くなすなり又分娩後九日
 間は坐して授乳せしむべからず之れ蓋し子宮甚しく壓下
 せられて其下垂症又は脱出症等を發すべきが故なり小兒
 の哺乳するには間斷ありて吸ひては休み休みては又吸ふ
 を以て授乳婦は忍耐を以て充分長き時間授乳すべし通常
 此時間を十五分乃至三十分となす
授乳時乳房の處置 總て授乳する際乳房及び乳暈の
 部を微温湯と石鹼を以て清潔に洗滌し後ち微温湯に濕し

たる布片を以て乳頭を牽き出し小兒の口内に含ましむべ
 し授乳終らば再び同前の法を行ひ清潔にして柔軟なる布
 片を以て乳房を被ひ温かに保たしめんことを要す乳房を
 不潔ならしむる時は乳頭の糜爛腺炎等を起すのみならず
 又小兒の口内疾患を發せしむ若し乳頭赤色となりて糜
 爛を呈せんとするものは授乳後直ちにワゼリン又はグリ
 セリンを塗布し之を豫防すべし
授乳時の注意 小兒哺乳の際乳房を以て其鼻孔を閉
 ぢ呼吸を障ぐることをあれば一指を以て軽く離し之を害せ
 ぬ様注意すべし且つ授乳婦は哺乳せしめつゝ睡眠するが
 如きことあるべからず否らざれば往々過て最愛の兒を窒
 息せしむるの危険あり其他哺乳時殊に注意すべきは褥婦
 自ら手を陰部に觸れざることなり若し此注意を缺き不潔
 なる手指を以て乳頭に觸るゝ時は病毒を傳へ更に小兒に

も危険を及ぼすことあり故に手指の汚染せる時は百倍の
 リゾール溶液にて洗滌し然る後授乳せしむべし
乳量僅少及び乳房緊満の處置 乳汁の分泌少なき時
 は牛乳其他の滋養に富める飲料を多量に與へ且つ屢く哺
 乳せしめて之を刺戟すべし決して直ちに授乳を廢すべか
 らず又乳量多くして乳房の緊満甚だしく褥婦疼痛を訴ふ
 る時は少しく食量を減じ且つ殊に飲料を減せしめ綿布を
 以て乳房を提擧し其綿布の兩端は項部に於て結縛すべし
 褥婦若し授乳すること能はざる際此の如く乳房緊満する
 時も亦同様に處置すべし安りに搾り出すは却て分泌を増
 さしむるものとす其他乳房に氷巻法又は冷巻法を行ふ時
 は其疼痛を減じ且つ多少乳汁の分泌を減少せしむ
授乳の困難なる場合 乳頭の甚だ短かきもの乳頭の
 凹陥したるもの或は乳房の扁平にして充滿したるもの等

は授乳困難なるが故に指を以て時々乳頭を牽き延ばすか
 或は他の人に吸はしむるか吸乳器にて之を吸ひ出さしむ
 べし若し小兒口を閉ぢて開かざるか或は哺乳運動を營ま
 ざる時は其頤を徐々に下方へ牽引して口を開かし舌上
 に乳頭を置き乳汁を搾り出すか又は微温の砂糖水を點滴
 し以て哺乳を促すべし
褥婦の授乳を禁すべき場合 は(一)脚氣及び腎臓病に
 罹れる時(二)産褥熱其他の熱性病に罹りたる時(三)結核梅毒
 癩病等を有する時(四)其他の重き疾患及び精神病癩慢性
 の皮膚病等を有する時(五)乳房炎に犯されたる時又は乳頭
 に糜爛損傷等ある時(六)身體常に虚弱なるか營養不良にし
 て貧血せる者等なり勿論此の如き場合に於ては醫の診察
 を求め其可否を決すべし
離乳時の處置 哺乳は適當の時日を経れば漸々廢すべ

し之を離乳と云ふ即ち此時期に至れば小兒の哺乳を減せしめ其不足を他の食物によりて補ひ漸次に慣らしたる後ち全く哺乳を廢するなり此の如く母乳の不用となれる時は乳房を綿或は清潔なる毛織物を以て軽く縛すべし此際乳房緊脹し疼痛ある時はワゼリン若くは其他の緩和なる油を其皮膚に塗布すべし但し膏藥の類は全く用ゆべからず斯くするも乳房尙硬く緊脹せば飲料及び營養分に富める食物を制限し且つ大便の通利を促すべし

第十三 褥婦に指示すべき攝生法

精神の安靜 褥婦は頗る精神過敏なるものなれば過度なる喜怒哀樂は勿論高聲の談話他人の來訪等も成るべく避けしめ殊に分娩後九日間は全く面會を禁すべし身體の安靜 褥婦は又頗る身體の安靜を要し生來壯健

の人にて産後九日間は静臥せしむべし褥婦若し此攝生を守らずして早く褥床を離れ又は身體を甚だしく動揺する時は子宮の弛緩腫及び子宮の下垂若くは脱出等の諸症を來し惡露も亦久しく持續するのみならず時として恐るべき出血を起すことあり故に大小便の排泄時衣服及び臥床の交換時にはなるべく其動揺を避けしむべし産褥の経過可良にして毫も身體に異常を感じざる時は褥婦は多く助産婦の言を用ひず強て褥床を離るゝことあるが故に助産婦は早く離褥し若くは身體を動揺するの危険を懇切に説明し嚴重なる安靜を守らしむべし

離褥及び運動 上述の如く毫も異常なきものに於て分後九日間は決して離褥せしむべからず虚弱なる婦人に於ては二三週間就褥せしむるを良とす而して正規の産褥なれば二週間後にして始めて室外に逍遙せしめ門外の散

歩は暖かき日と雖も三週間に於ては冬季なれば四五週間の後ちなさしむべし又離褥は之を徐々に營む様にするを要す急に離るゝ時は子宮全く回復するの後に雖も其下垂症を起すことあり故に假令離褥及び運動を行はしむるも産褥期中は身體を大切に保護し過度の運動即ち重きものを提ぐることを荷ふこと階段を登ること大便の際強く努責する等は禁ずるを良とす

温浴 褥婦の全身浴は第三週以後に至りて始めて之を行はしめ坐浴は九日以後に至らざれば營ましむべからず本邦に於ては古來六日だれと稱し分娩後六日目に坐浴を施すの風習は甚だ危険なるを以て之を廢さざるべからず

交接 産褥期間中は嚴重に注意を與へ全く之を廢せしむべし然らざれば往々生殖器の炎症出血突然の發熱等の障害を來し産褥経過を不良ならしめ且つ之を遷延す

食物 褥婦の食物は分娩後三日間は牛乳肉羹汁稀粥半熟卵等の流動性食物を取らしめ又柔軟なる良肉を食するも可なり第四日より漸次固形の食物を取らしめ且つ充分なる營養物を與ふべし第三週間前後に至れば常食に復せしめて可なり雖も尙消化し難きもの風氣を醸し易きもの或は強き香料等は禁せざるべからず

飲料 は麥湯微温湯砂糖湯等を飲ましめ一週間後には薄き珈琲及び茶の如きものは害なし但し其濃厚なるものは禁ずべし又産褥中強き酒類は飲用せしむべからず然れども麥酒の弱きものは乳汁の分泌を増進するの効ありを以て飲用せしむるも可なり

第十四 授乳婦の飲食物其他の要件

助産婦は授乳婦に向ひ懇切に理解すべき様授乳中に

於て注意すべき事項を教示すべし就中授乳婦の生活法は平素と大差なきを良とす但し食物中乳汁の質を害すべき品は避くべし即ち酸味及び香ひ高き食物強き香料鹽漬の食物脂肪多き食物身體を温暖ならしむべき飲料等は禁すべき者とす麵類は授乳婦に適當なる食品なり其他の滋養物及び飲料等は褥婦に於けるものと同一授乳婦大便秘結する時は適宜の運動を營ましめ煮たる菓物を食し稀薄なる飲料殊に砂糖水を飲めば多くは通利を得べきものなり之に依りて尙ほ通せざれば灌腸を行ふべし又長き間狭き室内にありて運動不足する時は乳汁分泌の量減少するのみならず其性質を悪しくするが故に適度の運動は甚だ必要なるものなり又食物及び夜間休息の不足等も其分泌を減せしめ其性を不良ならしむ其他授乳婦に於ける精神の感動等に由りても乳汁の分泌量及び性質に變化を來すも

のなれば甚だしき精神感動等の後には決して直ちに母乳せしむべからず此の如き場合には先づ吸乳器を以て乳房中に溜せる乳汁を吸取し然る後に母乳せしむべし乳房は常に温暖に保ち壓迫を防ぐを要す又授乳期中始め三箇月間は全く交接を止むべし之れ授乳婦更に妊娠する時は其乳汁は漸々稀薄となり小兒を養育するに不當なるを以てなり故に若し授乳期中に妊娠する時は其授乳を廢し小兒は母乳に就かしむるか又は人工營養を行ふべし授乳期間に於て月經來潮するも母兒共に害なきものなれども時として小兒は二三日間不安となることあり

第六編 異常妊娠及び其取扱法

第四十七章 異常妊娠

第一 妊娠性悪吐

悪吐とは妊娠性嘔吐を云ひ各人により著るしき軽重の差あるを以て今之を三期に別ちて述べんとす

第一期悪吐 妊婦の過半は妊娠第一箇月の終る頃より嘔心を來し又時々嘔吐を發するものにして殊に早朝空腹時に劇しとす之を第一期悪吐と云ひ妊婦は甚だしき苦悶を呈するに至らずして多くは第三箇月の終り若くは其以前に於て止むを常とす然れども時として此嘔心嘔吐は漸次増進し以て第二期悪吐に移り行くことあり

第二期悪吐とは第一期悪吐に移り行くことあり増劇したるものにして

絶えず嘔心を覺え爲めに食慾不進となり且つ嘔吐は頗る甚だしくして遂に算すること能はざるに至る故に殆んど絶食の状態となり妊婦は其他頭痛不眠煩渴或は胃痛等に苦しみ口唇は乾燥して輝裂を生じ齒齦は煤色を呈して時々出血し舌の白苔著るしく頬部潮紅し脈搏頻數便秘尿通不利となり遂に熱候を現はす此時期に於て適當なる治療を施さざれば危険なる第三期悪吐の症狀を發するに至るべし

第三期悪吐に於ては第二期症狀に加ふるに腦症を來したるものにして即ち頭痛劇しく眩暈耳鳴を發し凡ての音響ははるかに聴え途には精神朦朧となり絶えず眠れるが如き狀を呈し呼べども答へず叫べども應せざるに至る或は全く不眠症を來して終日譫語を發し恰も發狂せるかの如きものあり此の如き第三期の悪吐を發する時は治療

覺束なくたごへ適當の治療を施すと雖も遂に之を救ふ能はざること屢々とす

原因に種々あり主なるものは

一子宮の位置變状即ち後屈前屈等

二子宮壁又は頸管の硬くして卵の發育に伴ひて延長し

難きもの即ち子宮壁の腫瘍或は高年の初妊婦

三子宮の疾病即ち實質炎或は内膜炎子宮の癒着等

四卵巣或は喇叭管の疾病

五平素より胃或は腸の疾患を有するもの

六雙胎羊膜水腫等

七貧血性の婦人

八腎臟病心臓病等を有するもの

九ヒステリ性の婦人等とす

處置 凡て助産婦は妊婦に惡阻を來すべき原因なきや

否やに注意し若し之を起さんとすの疑ひあるもの或は前回の妊娠時に劇しき惡阻を發したるもの等にありてはたとへ輕症なりと雖も速に産科醫に治療を乞はざるべからず惡阻の第一期にして食慾營養共に佳良なるものは自ら然に治することあり此の如き際に於ても助産婦は尙ほ輕くしく觀過することなく第二期症狀に移らざる様注意すべし即ち消化し易き食物を與へ其好まざるものは避け新鮮なる空氣中に於て適當の運動を營ましめ大小便の通利を能くし便秘あらば緩和なる灌腸を施し且つ屢々温浴せしめ全身の新陳代謝を盛ならしむべし既に第二期症狀を發せるものは醫師に托するの外安靜に臥せしむべく劇しき嘔吐の際胃部に氷囊を貼すれば時として沈靜することあり其他氷囊は胃痛をも稍々輕快せしむるの効あり煩渴劇しければ牛乳中に氷片を混じて寒冷となしたる者を少

量宛與ふべし又口唇乾燥するを以て屢々綿を冷水に浸し之を以て口唇を濕はしめ其皸裂することを防ぐを良とす此時期に於ける便通は殊に注意し勿論醫士の命令に従ふべきもなるべくは日々緩和なる灌腸を行ふべし屢々入浴して新陳代謝を盛ならしむることは甚だ効ありと雖も第二期の劇しきものによりては身體を動搖し難きを以て助産婦は稍々大なる西洋手拭を微温湯にて絞り一日二回程妊婦の全身を拭ふを佳とす第三期症狀に陥れる者にはては醫士が流産術を行ひ其他適當なる治療を施すに係はらず母兒共に危険に陥るもの多し助産婦は此際尙ほ第二期に於けるが如き處置すべきものとす其療法に種々ありと雖も何れも卓効を奏すること尠なし予が近來創意せしめ處のベラスツング療法は頗る奇効を奏し第三期に於けるものと雖も流産術を行はずして尙ほ能く之を治癒せしめ

第一期及び第二期の如きは此療法に依り殆んど治せざるものなし且つ熱練して巧みに之を行へば有効無害なるを以て第一期症の際之を施せば第二期第三期の如き危険症を防ぎ得可しされど此療法は熱練せる醫士の診斷と其醫士自ら之れを行ふか或は其醫士監督の下に熱練せる助産婦が施すにあらざれば不慮の災害を來すことあり

第二 便秘

妊娠中は屢々大便秘結し易く其頑固なるものにありては七日若くは十日の間便通なきことあり此の如き時は腸内に瓦斯を生じて腸管膨脹し妊婦は腹滿に苦しむ食慾減じ逆上頭痛不眠等を起すに至る或は又血液骨盤内に鬱積し痔結節を生じて永く婦人を苦ましむ

處置 妊婦攝生法の條下に述べたる諸種の方法を施し

又常に便秘の傾向あるものは脂肪多き食物引割麥又は菓物を與へ或は小豆を良く煮て砂糖と鹽とを適宜に加へ食せしむも可なり其他頑固のものには醫治を乞ふべし

第三 下痢

多くの妊婦は便秘するものなれども時として毎妊娠時下痢の習癖あるものあり此の如きものは注意せざれば往々甚だ久しく持續し妊婦をして衰弱せしめ或は遂に流産を招くことあり其他感冒に罹り又は飲食物の不適當なる等によりて下痢を來すことあり

處置 腹部に温巻法を施すか或はフラネルの腹帶を以て之を温包し運動を戒め葛湯粥糜半熟卵パンを燒き之に熱き牛乳をかけたるもの等を與ふべし牛乳は善き滋養物なりと雖も之を飲用する時は間々下痢を來す人あるに

り注意せざるべからず又飲食物は凡て温暖なるものを用ふるを佳とす若し二三日を経るも下痢尙止まざるか或は初めより劇しき下痢ある時は速に醫治を乞ふべし

第四十八章 子宮増大に因する障害

第一 利尿の異常

一 尿意頻數 増大せる妊婦子宮のため膀胱は壓せられて妊婦は頻りに尿意を催すを常とすれども其症狀甚だ増劇し一日數十回に及び或は尿道壓迫せられて尿通の際疼痛を來せる時に於ては左の處置を施さざるべからず

處置 なるべく身體を安靜にし下腹部に温バツプを行ひ坐浴を施して膀胱部を温め温かなる牛乳葛湯等を與ふべし若し此等の法により治せざる時或は尿通の際痛みを

覺ゆるものは醫治を要す

二尿管閉 子宮若し甚だしく尿道を壓する時は全く尿管通
すること能はざるに至る之を尿管閉と云ふ妊婦若し此症に
罹る時は膀胱甚だしく充盈するが爲め下腹部膨満して劇
しき緊満痛を感じ食欲不進嘔心嘔吐等を來し時として
腦症を發するに至る又尿管を來せる際適當の療法を施さ
ざれば遂に膀胱破裂し生命を失ふことあり

處置 速かに醫士を聘し若し其來診遅きか又は危険に
迫る時は嚴重に殺菌せるカテーテルを以て排尿せしむべ
し

三尿管失禁 とは不随意に尿の排泄するを云ひ甚だ不癒
快なる症にして膀胱充滿せるの際或は笑ひ嘔みし咳する
等の際知らず尿の漏るものなり
處置 尿管失禁ある時は頗る陰部を不潔ならしむるを以

て微温湯にて毎日數回洗滌せしむべし妊婦耐え得べくは
冷水を以てするを良とす劇しきものは醫治を求むべし

第二 浮腫

妊娠の後半期に至れば増大せる子宮のため骨盤内の
静脈壓迫せられ下肢に循環する血液は自由に心臓に歸るこ
と能はざるを以て血液滯滞し血中の水分は血管壁より漏
れて組織内に蓄積し以て浮腫を來す此の如き下肢の浮腫
は妊婦の過半に來るものなり其他子宮の増大に因らずし
て起る浮腫あり左の如し
一 腎臓炎の浮腫は全身に現はれ先づ顔面より之を來
す

二 心臟病の浮腫は主に下肢殊に足背に現はる
三 脚氣の浮腫も亦主として下肢に現はるるも麻痺を

伴ふを以て心臓病に於けるものと異にす
總て浮腫を來したる部は其皮膚緊張して光澤を有し
すれば暫時の間凹陷を止む

處置

下肢に浮腫あるものはなるべく起立又は椅子等に
懸りて下肢を下垂することゝ禁じ坐する時には膝を伸
したるまゝになさしめ臥する時には下肢の下に二三枚の
蒲團を重ねて高く舉げしめ血液の歸流することを助くべ
し其の甚だしきものはトリコト小大を以て足の末端よ
り大腿に至るまで細帯すべし但し其際必ず足端より巻
き始め上行するを要す又かたき靴下を穿たしめて後ちメ
リヤスの股引を着けしむるも佳なり陰唇の浮腫には一布
巾の鉛糖水を以て巻法するを良とすれども若し此藥品な
きは往々肺水腫と稱して肺臓内に水分蓄積し呼吸困難を來

し遂に死亡することあれば一刻も猶豫することなく速に
醫士を招き且つ上半身を高くからしめ若し呼吸困難の徴あ
らば全胸面に微温濕布を施すを良とす總て妊婦にして浮
腫を有するものは其輕重に關せず醫士の診察を受くべし
何となれば静脈の壓迫に因するものなるや或は他の疾病
によるものなるや不明なればなり

第三 靜脈瘤

靜脈瘤とは靜脈管の甚だしく擴張して索狀若くは連
なれる結節狀をなし青色を呈して皮下に存し能く之を皮
上より認め得べく壓すれば軟かにして壓に應ずれども時
として硬きことあり此症の原因も亦浮腫と同じく増大せ
る子宮の爲めに骨盤内の靜脈壓迫せられ下肢に血液鬱
するに由る初産婦に於ては血管の抵抗力を以て之を發

すること割合に少なからず雖も妊娠する毎に血管の抵抗力は大に減するが爲め経産婦は静脈瘤を生ずること多し而して静脈瘤の主發生する部は陰唇肛門大腿膝臑腸部等なり其肛門に生ずるものは痔結節となりて現はる静脈瘤の症状は身體の運動若くは努力等によりて張り緊るが如き感覚又は疼痛を發し或は突然刺すが如き痙攣性疼痛を來すことあり其他瘙癢甚だしく安眠を害することあり静脈瘤愈々膨大すれば之を被ふ所の外皮は頗る菲薄となり努力摩擦若くは衝突等によりて破裂し危険なる大出血を發するに至るべし

處置 静脈瘤ある時は久しく起立し又は遠路を歩行するの他凡て脚を下垂することを禁じメリヤスの股引を穿たしめ大なるものは綿花を貼じてフラネル綳帶を施し以て其増大及び破裂等を防ぐべし若し又赤色を呈し疼痛あり

らば破裂の徴なるを以て速に安臥せしめ冷巻法を施し且つ醫治を求むるを要す其他突然破裂せるものは直ちに殺菌ガーゼ又は脱脂綿を以て強く壓抵し綳帶を施して猶豫なく醫士を聘すべし

第四十九章 腔内分泌物の異常

妊娠 すれば生殖器に充血するを以て腔内の分泌物即ち帶下(俗間之を帶下と云ふ)は増加すと雖も又種々の疾病により多量の帶下を漏すことあり

一 **淋疾** 妊婦淋疾を患ふるか若くは其夫に淋毒ある時は之を傳染して子宮内膜炎又は淋毒性腔加答兒を起し多量の膿様分泌物を漏す

二 **子宮内膜炎** 淋毒に因せざる子宮内膜炎は透明の粘稠若くは水様液を漏す時として血液を混ざるとあり

三 子宮癌腫 とは俗に「しらちながち」と稱するものに

して甚しき臭氣ある水様或は濃様液血液等を多量に漏す

四 生殖器の出血

妊娠中諸種の異常により腔内よ

り血液を漏すことあり即ち1. 癌腫 2. 内膜炎 3. ポリープ 4. 葡萄胎 5. 流産 6. 前置胎盤 7. 胎盤の早期剝離 8. 腔内静脈瘤の破裂 9. 月経等之なり但し月経は稀に妊娠の初めに於て來潮し敢て異常なるものにあらず

五 假羊水

妊娠中に於て時を定めず反覆一盞位づ

透明なる水様液を流出することあり是即ち假羊水にして子宮に疾患あるより發するものなり此の如きものに於ては早産を來すの虞れあるが故に速に醫士に依託すべし

第五十章 子宮の位置變狀

第一 子宮脱及墮脱

子宮脱 とは子宮下垂して腔内に下り遂には陰門間に現はるゝ症を云ふ其原因は妊娠中劇しく努力するによりて新たに發することあれば多きは前回の分娩後安靜を守らずして早く離床し若くは過度なる運動をなしたる等によりて生ぜること多し而して妊娠中に起る時は多くは二三箇月の頃にあり既に發生せる子宮脱に妊娠するか又はは妊娠中に子宮脱を起せるものも子宮漸々増大して大骨盤内にば自然に治するを常とす是子宮漸々増大して大骨盤内に上り其位置を上方に占むるが故なり若し此時期に治せざれば直腸及び膀胱等壓迫せられて大便通利尿等を妨げられ遂に流産を起すに至る又子宮脱は妊娠中此の如く治すも雖も分娩すれば再び脱出するものなり

處置

なるべく妊婦を安靜にして數週間努めて平臥せしめ臀部を稍高くし腹壓を禁じ便通を可良ならしめ稍

便秘の傾向ある時は決して努責せしめず灌腸を行ふべし著るしく脱出せる時は殺菌したる手指を以て軽く且つ徐々に整復せしめタンポンを行ひ丁字帯を施して其脱出を防ぐを要す然れども此の如き強度なるものは寧ろ最初より醫士を聘し其治療を受くべし

腔脱とは腔壁弛緩して下垂し陰門に脱出せるの症にして子宮脱の如く經妊婦に多く又兩者併發せること屢く之あり而して本症を發する時は尿利の障害を致し或は歩行を困難ならしむ又屢く脱出部糜爛することあり

處置 勞働を禁じ排便排尿を佳良ならしめ仰臥を勧め清潔なる冷水にて屢く外陰部を洗ふべし其他甚だしきものは醫治を要す

第二 子宮後屈症(乃ち嵌頓症)

子宮後屈症とは子宮體が其頸部より後方に向つて屈曲し且つ子宮底は薦骨の彎曲内に下り子宮頸部及び子宮口は却て上昇す故に最高度の後屈症に於ては後方にある子宮底は前方に存する子宮口よりも下方に位することあり而して此後屈症は既に妊娠前より存するもの多しと雖も又時として妊娠の三四箇月に於て發することあり今妊娠中に於て後屈症を來すべき原因を擧ぐれば

一 **薦骨胛の突出強度なるもの** 薦骨胛の突出甚だしくして増大せる子宮の骨盤内に昇ることを妨ぐる場合に於て子宮は遂に後方に屈曲し薦骨窩内に於て發育す

二 **腹壓の強劇によるもの** 即ち重き物を擧げ或は便秘に因る劇しき努責のため之を來す

三 **妊婦の不攝生** 即ち手を高所に達せしめんが爲に強て身體を伸ばしたる時或は劇く後方に轉倒したる時又

は永く排尿を忍び膀胱甚しく充滿せる際等によりて來る
 此の如く各種の原因によりて後屈症を來し若し妊娠の
 四箇月に至るも尙薦骨窩内に子宮の存する時は後屈した
 るまゝ月を重ぬるに従ひて増大し骨盤内臓器を壓迫して
 危険なる症狀を來す之を後屈症と云ふ
 妊娠せる後屈子宮の嵌頓症狀は主に膀胱及び直腸
 の壓迫症にして即ち子宮頸部を前方に於て強く膀胱及び
 尿道を壓迫するが爲め始めは頻りに尿意を來し排尿すれ
 ば僅かに滴瀝するに過ぎず次で全く尿閉し膀胱は頗る緊
 満して往々臍部に達することあり又子宮體は後方に於て
 直腸を壓迫するが故に頑固の便秘を來し妊婦は甚だしき
 苦悶を訴ふ内診するに骨盤腔の後方に當り柔軟なる腫瘍
 ありて腔後壁を壓出せることを觸れ子宮頸部及び子宮口
 は骨盤前壁に接して探るも之を發見すること困難にして

欠

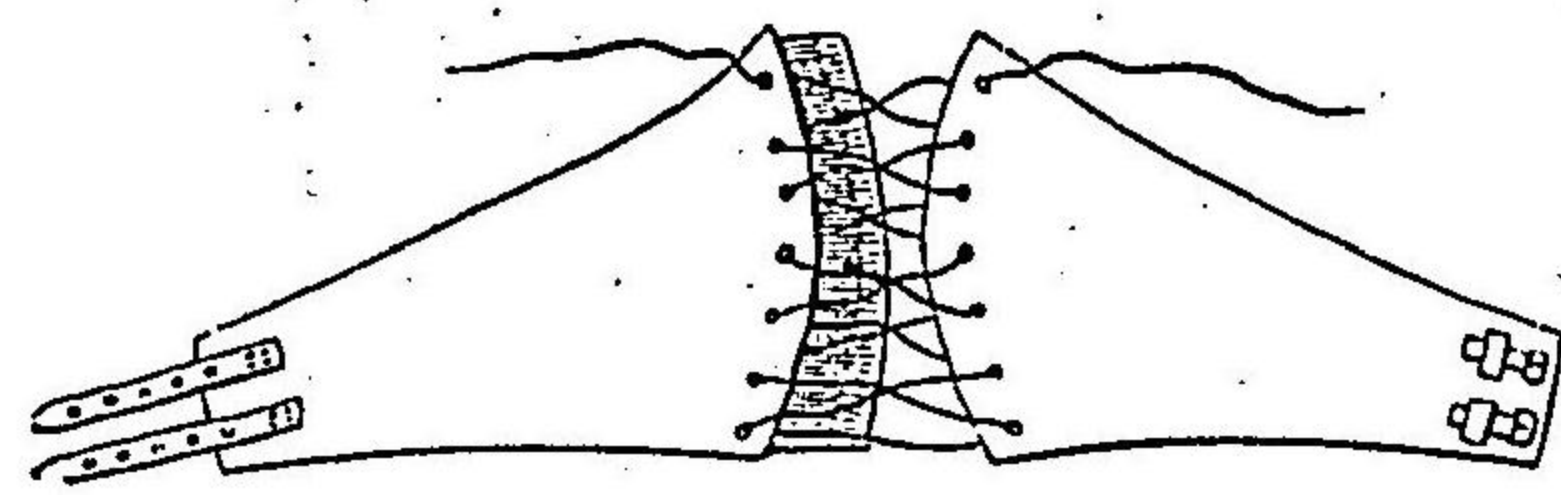
MISSING

設製カテーターを能く殺菌して用ゆべし其他灌腸を行ひて通利を圖り身體は極めて安靜に保たしむるを要す又充分排尿せる後は伏臥を取らしむべし

第三 妊娠子宮の前轉症(即ち懸垂腹)

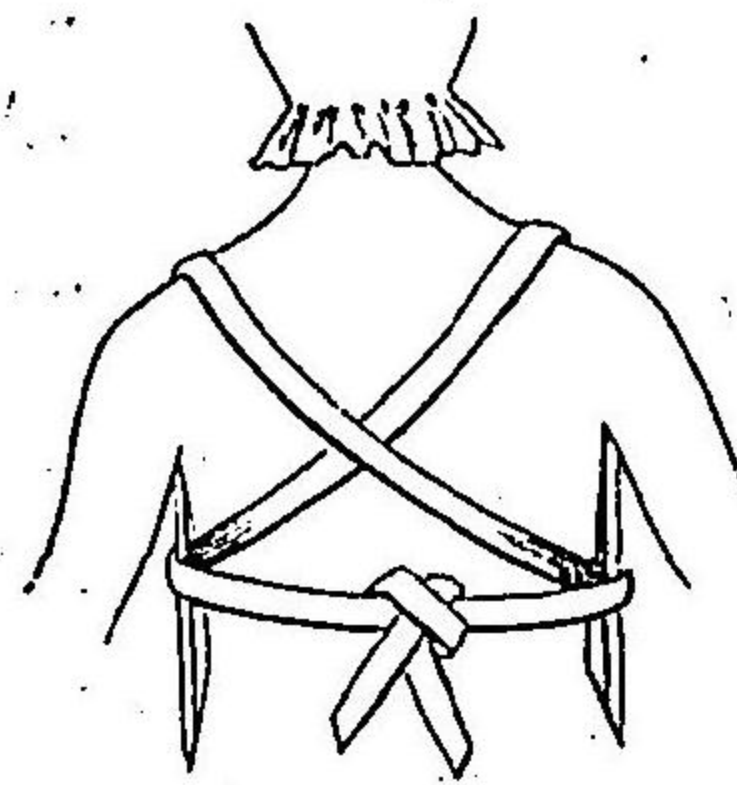
妊婦の腹壁著しく弛緩する時は子宮體は前方に傾き甚だしきに至れば子宮底は腹壁を壓して耻骨縫際の前方を越え其下方に垂れ降ることあり之を懸垂腹と云ふ主として經産婦に發するものなれども亦狹窄骨盤骨盤傾斜の度大なる者腰椎前彎症等も此原因となることあり懸垂腹の爲めに來る障害は第一胎兒の位置を異常ならしむ第二分娩の際子宮の收縮力は後方に向ふを以て小兒の産出を困難ならしむ第三陣痛微弱なる爲め分娩を長からしむ第四流産を誘起するにあり其他尿利困難消化不良等を起す

圖四十六第



帶腹きへす持支を腹垂懸 (一分五十の大然天)

圖六十六第



(一分五十の大然天)

圖五十六第



(一分五十の大然天)

帶腹の腹垂懸

宮處置 妊娠の後半期に至れば適當なる腹帯を施して子宮を支へ腹部の垂れぬ様務めざるべからず又分娩時に至らば仰臥の位置を取らしむるを良とす重症のものは宜し

く醫士に乞ふて其處置を仰ぐべし

第五十一章 卵の異常

第一 葡萄狀態及び血液肉胎

葡萄狀胎とは絨毛膜の疾病により其絨毛變化して大小無數の小嚢を形成したるものを云ふ其小嚢は麻の實の如きものより蠶豆の如き大きさに達し各々莖を以て相連り個々集簇して恰も葡萄の房の如し故に葡萄狀胎の名あり而して其小嚢内には水様の液を含む本症は妊娠の初期に發するものにして殊に一二週の頃に來る然時は卵は悉く變化して其痕跡だも止めずされど之を發すること遅く且つ其疾患蔓延せずして卵膜或は胎盤の一部に止まる時は其體を全ふし得べしと雖も其死亡は免るること能はず經妊

婦は初妊婦に比すれば多く且つ高齢なるものは之を發し易しと云ふ學者あり其他浸蝕性胎胞と稱する悪性のものありて若し之に犯さるゝ時は病變子宮壁にまで侵入し遂に之を穿ちて腹膜に達し妊婦は速に死するに至る者なり

葡萄胎胎の發育 は頗る速かなるを以て子宮も亦非常迅速なる増大を爲し未だ妊娠三四箇月にして既に子宮底は六箇月の部位に達し或は尙之より上方に至ることあり而して妊娠の二箇月又は三箇月頃より水様液或は水様液中に稍々血液を混じたるが如きものを漏し次で俄に多量の出血を來し漸くにして止血し數日又は數週の後再び強出血を來す此の如くにして出血幾度か反覆し遂に大量の出血と共に葡萄胎を排泄す時としては之を出すことなく出血の爲めに妊婦は死することあり此の如く強出血あるが故に本症は決して妊娠の後半期に達すること

なく第三若くは第五箇月にして必ず流産(即ち鬼胎の排泄)するものなり今本症を診断するに必要な症候を擧ぐれば

- 一 妊娠月數に適せざる子宮の増大及び其増大の非常に速かなること
 - 二 觸診するに子宮は甚だ柔軟にして且つ全く兒體部を觸れ得ざること
 - 三 聽診上心音及び胎動は全く之を聴取し能はざること但し血管の雜音は著るじきものなり
 - 四 水様若くは水様血性の分泌物及び反覆する強度の出血あること
 - 五 最も確實なる症候にして血液中に葡萄胎胎の一片を混じて排泄せるを認むること等なり
- 處置** 若し葡萄胎胎の疑ひあらば速に醫治を受くべし

出血あらば下腹部に氷菴法を貼し極めて安静に臥せしめざるべからず又急に大出血を來す時は此法を施すの外殺菌したるガーゼ又は脱脂綿を以て腔内を詮塞し貧血劇しければ葡萄酒其他の充奮劑を與へて妊婦の危険を防ぐべし

血液肉胎とは血液の凝固せるが如き塊りにして妊娠初期に當り外傷打撲其他の原因によりて胎盤部に出血を來し爲めに卵は死亡してその肉塊が血液の凝塊と混じて遂に此血液肉胎を形づくる者なり此中に於ける胎兒は通常消失するものなれども時として羊膜腔中に少量の液体と小さき胎兒とを存することあり此血液肉胎は硬くして手拳大に達するものあり又は之より小さきものありされど其の以上の大なるものは殆どなし即ち此ものは發育することなく妊娠七八箇月に達するも尙子宮は二三箇月

の大きさを保つべく其排泄せらるる際には葡萄狀胎の如き大出血を起さず故に危険少ない時としては一箇年餘も子宮内に存することあり此の如き血液肉胎を來す時は妊娠中胎兒死亡の症候と略々同一の症候を現はし或は全く障害なきことあり

第二 羊膜水腫及び羊水過少

羊膜水腫とは羊水の非常に多量なる者を云ふ通常羊水量は二千乃至二千五百瓦を有するも之より多量となる時は即ち羊膜水腫にして時として一萬瓦に達することあり此の如く多量の羊水を有するを以て子宮は甚だしく擴張して圓形となり従つて腹部の膨大も著しく外検査を施すに腹部は軟かにして著明の波動を呈し胎兒各部分及び心

音を辨ずること難し妊婦は腹部膨大の爲め呼吸促歩行
困難其他甚だしき苦痛を感じ分娩は正規の期日より數
日或は數週間早く來ること多し本症に依て來る障害は左
の如し

一 羊水多量にして子宮腔擴張するが爲め胎兒は頗
る移動し易く妊娠末期に至るも先進部骨盤上口に
固定し難きを以て異常の體位及び胎勢を來すこと

二 子宮の延長過度なるが爲め子宮の筋肉弱りて分
娩の際には陣痛微弱となり開口期遅延して分娩時間

三 多量の羊水急に流出する時は臍帶或は四肢の脱
出を來す

四 後産期に於て子宮弛緩し危険なる大出血を來す

處置 以上述べたるが如く本症は頗る危険の障害を來
すと雖も適當なる處置と注意とを怠らざれば平易なる經
過を取るべきものなるを以て助産婦は本症と認むる時は
速に醫士の診を乞ひ其命令に従ひ且つ適度に固く腹帶を
施し身體を安静ならしむべし又分娩の際に羊水流出する
に至らば成る可く兩脚を閉合し陰唇を閉鎖し壓迫して一
噸に多量を出さざるやう注意せざるべからず

羊水過少とは前症に反し羊水著しく少量なるものを
云ふ此は羊水少なき時は胎兒は其生活すべく腔間の狭き
ため體部の發育を障害せられて彎曲足或は扁平足を來す
又妊娠の初期に當りて羊水過少なる時は胎兒は羊膜に密
接するを以て遂に癒着を生じ後ち羊水の増加するに従ひ
て其癒着部牽引せられ糸状物を形成し胎兒と羊膜間に連
之を羊膜糸と云ふ此の如き異常ある時は兎唇狼咽膺へ

ルニア等の畸形を兼ね或は羊膜糸が指趾若しくは手足等を絞搾するを以て之を離断せしめ又は臍帯を纏絡して之を壓迫す

第三 胎盤の異常

副胎盤とは正規の胎盤を有するの外その傍らに一個若しくは數個の小なる胎盤が狭き橋狀片か又は單に血管のみによりて連なるものにして妊娠中には害を生せず又胎盤が二個或は數個に分裂せるものあり
過大胎盤とは胎盤が胎兒に比して非常に大なるものを云ふ梅毒羊膜水腫軟化する胎兒等の際は是を見ること多し此症は著しき障害を呈せず
前置胎盤とは胎盤の位置變じて子宮の下部に附着せるものを云ひ妊娠後半期に至れば屢々強き出血を來すの危険あり尙本症は後章に於て詳述すべし

第五十二章 臍帯の異常

過短及び過長なる臍帯 臍帯の甚だ長きものは稀れに百九十仙迷に達することあり而して臍帯長き時は真結節又は纏絡を生じ易きものとす臍帯の短きものは稀れに之あるのみにして妊娠中に於ては敢て著しき害を呈せずと雖も分娩の際には胎盤の早期剝離子宮内臓症臍帯の断裂等を生ず其他纏絡によりて短くなりたりたるものも亦此の如き害を來すものなり
臍帯の真結節及び假結節 臍帯の真結節とは胎兒の移動の際に臍帯に蹄係を造り胎兒自ら之を潜り抜けて結ばれたるものを云ひ胎兒の運動の爲めに漸々牽引せられ固く結ばれて血行止まり遂に胎兒をして死に至らしむ然

らざるも眞結節を生ずる時は其發育を害するなり
假結節とは臍帯内のワルトン氏酸肉一部にのみ多く
發生し或は一部分の血管彎曲して突隆し恰も結節の如く
見ゆるものを云ふ

臍帯の纏絡とは臍帯が胎兒の手足軀幹頸部等に一回
或は數回巻き付くを云ふ殊に頸部に多し纏絡輕度にして
緩く此等の部分を纏ふ時は其害少なしと雖も固くして且
つ數回に及ぶものは甚だ危険なり即ち胎兒の營養は損害
せられ甚だしきに至るは遂に死亡するものあり又手足も
之が爲めに絞断せらるることあり而して頸部に於ける纏
絡は分娩の際に於て最も不良なる結果を來すものにして
兒頭の未だ産出せざるに臍帯は強く牽引せられ加之産道
壁より壓迫を被むり其血行妨げられて小兒は死に陥るこ
とあり而して纏絡の有無は妊娠中に確定すること困難な

りと雖も臍帯雜音の聴取によりて略之を知り得べし
臍帯の捻轉 臍帯一部捻れて小さくなりたるものにし
て多くは臍の近部に生ずべく胎兒死亡せる後に發する
こと多し生活中に發する時は死亡の原因となるべし
臍帯血管の狹窄は主として靜脈に生じ梅毒の爲めに
發すること多し此症は羊膜水腫の原因をなすものにして
強き臍帯の雜音を發せしむ
臍帯の側縁附着及び卵膜附着 通常臍帯は胎盤の中
央に附着するものなれども又時として其側縁に附着し或
は全く胎盤に附着することなくして卵膜の一部に附着し
臍帯中の血管のみが卵膜を傳ふて胎盤内に移行行くもの
あり

第五十三章 妊娠中胎兒の死亡

妊娠中胎児死亡

するものにして稀れには一二箇月以上を経て流産又は早産
且つ此く死亡せる胎児は軟化するを常とす時としては死
胎児軟化せずして乾枯し且つ縮少して所謂木乃伊變性を
起し永く子宮内に止まることあり此の如きものは雙胎中
の死せる一兒に之を見ること多し

- 一 母體の疾病即ち梅毒熱性病等
- 二 臍帶血行の障害即ち緊き纏絡捻轉血管の狹窄等
- 三 胎盤卵膜子宮内膜等の疾患
- 四 外傷の爲め直ちに胎児を害し或は胎盤卵膜等の剝離を生せしめたるもの
- 五 母體の失血及び窒息或は毒藥の飲用等之れなり

第五十四章 妊娠早期の中絶

妊娠早期の中絶乃ち流産

妊娠早期の中絶とは未だ分娩時期に達せずして胎
 児及び其附屬物を排泄するを云ふ之を分ちて流産及び早
 産とす流産とは妊娠第二十八週以前に於て分娩するを云
 ひ小児は生活を保つと能はざるものなり早産とは第二十
 八週以後第三十八週以前に産出するものにして小児は胎
 外に生活し得るを以て規則となす然れども妊娠月数の少
 なれば少なき程小児は愈々虚弱にして從て益々死亡す
 るもの多しとす流産及び早産は共に同一の原因により之
 を發するものにして胎児死亡の原因をなすものは又之が
 原因となるは言を俟たず其他母體并に胎児の異常状態よ
 り來すものなり今之を列擧すれば

(1) 生殖器の異常

- (一) 後屈子宮
- (二) 子宮壁の腫瘍
- (三) 子宮實質炎及び内膜炎
- (四) 子宮の畸形

(2) 子宮及び卵の刺戟

- (一) 子宮の刺戟
- (二) 不適當なる膈内灌注
- (三) 卵膜の損傷

(3) 全身の疾病

- (一) 梅毒
- (二) 熱性病
- (三) 腎臓炎
- (四) 結核
- (五) 劇しき咳嗽

(4) 強き精神感動

(5) 妊婦の不攝生

- (一) 舞踏
- (二) 凹凸なる道の乗車
- (三) 強劇なる勞作
- (四) 温湯の坐浴又は脚浴
- (五) 房事過度
- (六) 睡眠不足なる過度の働勞

(6) 外來の刺戟

- (一) 墮胎藥
- (二) 劇しき下痢

第二 卵より來るもの

- (1) 葡萄状態
- (2) 羊膜水腫
- (3) 臍帶の眞結節捻轉纏絡

(4) 胎兒の畸形
 (5) 雙胎
 以上の原因は數個同時に來ること多し又同一婦人にし
 て數回流産するものあり之を常習性流産と云ふ梅毒患者
 に多く見る所なり

第五十五章 流産の症状及び處置

流産を二期に區別して第四箇月以前即ち胎盤完成前
 と第四箇月以後即ち胎盤完成後となす其第一期流産に於
 ては未だ胎盤完成せざるを以て著るしく出血するも第二
 期流産に於ては胎盤既に完成せるが故に正規分娩の如く
 胎盤産出の際には出血せざるものなり

第一期流産の症状

第一期流産の症状は出血を以て主なるものとす而
 して流産を突然發することなく必ず一定せる前兆を現

すべし即ち初め水様の分泌物ありて次に粘液様となり帯
 鏽色となり血様となり遂に全く純血を漏す稀れには初め
 より強出血を來し或は多くの疑血を混するものあり妊婦
 は下腹の不快感全身倦怠薦骨部の疼痛尿意頻數時々子宮
 の緊張するが如き感覺及び牽引狀の疼痛等を來す妊娠の
 初め四五週間に於て流産を起す時は未だ陣痛様の發作を
 來さざるを以て妊婦は鈍痛ある多量の月經と見做すもの
 多し妊娠第二三箇月に至れば流産の症状頗る著るしく陣
 痛様疼痛を發し出血甚だしきに至る此際脱落膜は未だ甚
 だ厚き時期なるを以て剝離容易ならず故に一部分のみ剝
 離して他部分は尙ほ附着せることありかゝる場合に於て
 は殊に強出血を來すものにして爲めに妊婦は死亡するに
 至ることあり而して妊娠第十二週以内に流産するものは
 卵多くは破るることなくして其まゝ一度に排出せらる然

れども若し子宮口開大せざれば其産出に際し卵の破るゝ
 こと間ふ之あり然る時は羊水流出し同時に胎兒も亦排出
 し後産は多くは破碎せられて其殘片子宮腔内に留まり反
 覆する出血の原因となり又は腐敗して著るしき高熱を來
 すことあり之れを腐敗性流産と云ふ其他羊水及び卵の一
 部排出せるの後は子宮の收縮漸く微弱となり終に全く
 止むを以て其殘留せる部分は數週乃至數箇月を経るも尙
 子宮内に遺殘して生殖器の疾病を發するに至る
 流産は又少量の出血久しく持続し時としては一箇月
 餘に亘り凝血と共に卵を排出し或は強出血を來すものあ
 り之を遷延性流産と云ふ此の如きものは妊婦をして貧血
 症に陥らしめ以て衰弱せしむ
第二期流産の症状 既に第二期の流産に至れば子宮
 の收縮は充分強く發し得るを以て小弱なる胎兒は甚だ容

易に娩出し得るものなり然れども後産の稍々剝離し難き
 爲め正規分娩よりも困難なりとす胎兒若し死亡の爲めに
 流産するものによりては胎兒死亡の徴候を現すべく其他
 前兆として下腹牽引痛腰痛等あれども通常出血はなきも
 のなり
流産に因する不良の結果 流産は甚だ不良なる結果
 を來すこと屢く之あり殊に産褥中攝生法を守らざる婦人
 に多し不良なる結果とは反覆する子宮の出血に因する貧
 血子宮の疾病等なり此等のものは不妊症の原因となり或
 は再び妊娠するも又流産するの原因となることあり
流産の診定 子宮出血其他の症状を呈し流産の疑ひあ
 る時は直に醫士の診察を受くべしと雖も止を得ざる場合
 に於ては助産婦は注意して内診を行ふべし之によりて若
 し子宮の柔軟にして膨大し開きたる子宮口に於て卵を觸

れ其他陣痛様の疼痛あれば流産の初期と認むべし又其排泄せし血液の凝塊及び膜様片は盡く之を取りて注意しつゝ新鮮なる水中に入れて卵の一部又は胎兒等の存するや否やを検すべし

初期流産の豫防

流産の徴を發する時直ちに適當の處置を施せば時として之を防ぐことを得べし即ち此の如き妊婦にありては先づ直ちに安静に臥せしむるを可とす但し餘り暖かにするは宜しからず其他凡て興奮すべきことを避け消化し易き食物を與ふべし尚ほ此の如き時には速に醫士を招くを要す而して若し幸に之を豫防し得るも尙一週間は臥床を離れしむることなく且つ爾後安静を旨とし攝生を怠らしむべからず

流産の處置

流産は甚だ恐るべきものにして殊に第一期流産にありては危険なる大出血を來し或は然らずして

全卵悉く排泄せるが如く見ゆるも尙脱落膜の殘片は子宮腔内に遺殘し種々なる後障害を來すが故に決して助産婦は自ら之を處置したるまゝ放置すべからず必らず産科醫を招くを要す而して流産既に始まり著るしき出血なき時は安静に臥せしめて自然の經過に任せ手指を挿入して卵を取り出すが如きことあるべからず出血劇しき時は下部に氷巻法を施し或は等分に混和せる冷水と醋とを浸したる布片を絞りて下腹部を巻法し其温暖となりたる時は屢く之を交換すべし其他一布仙のリゾール水を腔内に注し且つ殺菌せる綿花タンポンを數個挿入して緊しく之を子宮口に壓抵し以て醫士の來るを待つべきものとす但し此タンポンは十二時間を經過すれば除去し出血あれば再び挿入すべきも出血なければ施すを要せず若し出血の爲め劇しき貧血に陥りたる時は葡萄酒其他の充奮劑を

與ふべし其他流産は正規分娩及び産褥に於けるが如く取扱ふべく決して軽々しく處置すべからず且つ流産後の攝生を嚴守せしめ少くとも一二週間は離床することなく可成身體を動搖せしめざる様注意すべし

第五十六章 早産の経過及處置

早産の経過は妊娠時期の愈々進むに従ひ益々正規分娩に近似するものなり故に其出血も亦正規分娩に於ける出血と異なることなし
處置 早産を來すの徴あれば安靜に臥せしめて醫を招き之を豫防することを務むべし若し防ぐこと能はざる時は正規分娩と同じき處置をなすべし此際最も注意すべきは妊娠の期末だ満たずして分娩せる胎兒の生命を保存するにあり

早産兒の看護法

早産兒は固より充分に發育し居らざるを以て些少の原因にても直ちに死に至らしむるものなれば最も綿密なる注意を要す殊に其呼吸行は不完全にして冷却に陥り易きが故に常に之を温暖に保たざるべからず先づ小兒に第一回の沐浴を行ふ後は温かなるブランネル又は真綿に包み床に就かじめ其兩側及び足部に湯タンポを置き温を保つべし但し餘り温に過ぎざる様注意すべし又風呂タンポの冷却せざるや否やを檢し少しく冷えたる時は直ちに温湯を交換し以て始終一定の温度を保たざるべからず其他小兒は一日二回温浴を施すを良とす小兒の室も亦温暖に保ち且つ大氣の流通を計るべし其他ターニー氏或はオーヴァー氏保溫器を以てする時は最も完全に發育するを得べし

予の産科院に設置したる保育器は獨逸國ポーン大學婦人科教授

フリッチチ氏考察にかゝりパウルトマン氏が衛生上緊要なる
問題に對し細密なる注意を加へ製造せられし者なり

早産兒の哺乳は甚だ困難なるものなれども永く忍耐

して之を試まじむべし若し哺乳せざる時は母乳を新に
搾り取りなるべく屢く即ち凡そ一時間毎に匙を以て母乳
を小兒の口中に流し込み且つ屢く乳房より直ちに吸ふこ
とを試まじむべし又早産兒を初めより牛乳或は他の營養
品にて養ふときは殆んど死亡するを免れず若し止むを得
ざる時は通常の稀釋法よりも稍薄くなし殺菌法を行ひ
て之を與ふべし凡そ早産兒は絶えず睡眠に就き易きもの
なるが故時々之を醒覺して哺乳せしめざる時は終に餓死
するか又は凍死するに至るものなり殊に必要なるは能く
眠れる小兒に於ては一日に數回永く且つ強く涕泣せしむ
ることなり之によりて強き呼吸を營ましむるのみならず

小兒の昏睡に陥ることを防ぎ得可し

第五十七章 子宮外妊娠

子宮外妊娠とは妊孕卵が子宮腔内に占居せずして喇
叭管卵巢腹腔等の各部に止まり以て發育するものを云ふ
而して其停止したる部位に於ては脱落膜を發生し胎兒を
營養するものにして此際子宮内面にも亦其粘膜炎肥厚増殖
して脱落膜を發生するものなり妊孕卵の附着部に於て生
じたる脱落膜が全く之を被覆せるものを卵囊と云ふ
種類 子宮外妊娠を卵の占居せる位置により區別して
一 喇叭管妊娠二 卵巢妊娠三 腹腔妊娠となす此中最も多
きは喇叭管妊娠にして更に之を1 喇叭管腹腔妊娠2 固有喇
叭管妊娠又 壺腹妊娠3 喇叭管子宮妊娠の三種となす
原因 喇叭管に炎症ありて屈曲若くは狹窄を起す時は

喇叭管中に於て妊孕せる卵は子宮内に降ること能はざる
 か故に遂に此部に發育して喇叭管妊娠を來す又精虫が卵
 巢の部分に迄進入し此部に於て卵と會合し剪採より取ら
 るることなれば即ち卵巢内に落ち以て發育する時は腹腔
 卵巢に停止せずして腹腔内に落ち以て發育する時は腹腔
 妊娠となる又續發性腹腔妊娠なるものあり之は喇叭管若
 くは卵巢妊娠に際し卵巣破裂して胎兒腹腔内にいで更に
 發育するものを云ふ

症狀 子宮外妊娠の症狀は一は妊娠に於ける生理的徴
 候にして一は妊娠位置の異常に因する病的徴候なりとす
 一 **生理的徴候** 月經は閉止し乳房増大して著色し子
 宮も亦増大して柔軟となり殆んど通常の妊娠と區別し難
 し其他妊娠に現るる全身の徴候を來す

二 **病的徴候** 月經は閉止するも子宮腔内に脱落膜を
 形成するにより妊娠初月より不規則なる出血を來し且つ
 其脱落膜は四箇月を出でずして稍強き出血と共に排出
 せらるる子宮は初め増大す雖も第四箇月以後に至れば
 變小す三卵血管の雜音を著るしく聴取す四胎動及び心
 音を發するの時期に至れば正規の妊娠に於けるよりも早
 く認知し得べし且つ明瞭なりとす五胎動の際劇痛を感す
 六妊孕卵の發育するに従ひ周圍を壓迫して下腹及び骨盤
 内に持續性の鈍痛を現はす七時々強劇なる疼痛の發作を
 來し大に患者を苦ましむ此劇痛發作に際し子宮出血を來
 して脱落膜を排出し或は卵巣の破裂を生ず此破裂は喇叭
 管妊娠にありては卵巣小にして延長し易きが爲め第三四
 箇月に於て來ると雖も若し腹腔妊娠又は卵巢妊娠にあり
 ては稀に妊娠末期に達することあり而して子宮外妊娠の
 徴候中最も必要なるものは持續性の鈍痛及び發作性の劇

痛は稀に妊娠末期に達することあり而して子宮外妊娠の
 徴候中最も必要なるものは持續性の鈍痛及び發作性の劇

痛なりとす

子宮外妊娠の経過

一 妊娠の最も初期に於て胎児死亡すれば卵の發育止まり胎児及び其附屬物は共に溶解吸收せられて消失す

二 卵嚢破裂すれば劇痛を發し胎児は腹腔内に出で且つ血液盛んに腹腔内に流出し所謂内出血を來し妊婦は急性貧血に陥りて遂に死亡するに至る然れども其卵嚢が扁韌帯の兩葉間或は腹膜の癒着せる嚢腔に破裂する時はたとへ出血するも限局せる部内に止まるが故に其量甚だしきに至らずして死を免るべし

三 卵嚢若し破裂せずして妊娠末期に達するも正規の産道を通過して分娩すること能はず早晩死亡して破壊し爲めに其周圍に化膿を生じ母體は腹膜炎によりて死亡す

或は又幸に膀胱尿管若くは腹壁に向て破開し此部より膿汁及び胎児の破裂したる軟部又は骨片等を排泄して治癒に赴くことあり

四 稀に死亡せる胎児は乾燥して石灰様の質によりて被はれ化石兒となり毫も母體に障害を起すことなく永く體內に存することあり

處置 若し子宮外妊娠の疑ひあらば速に醫士に托せざるべからず突然卵嚢破裂する時は専ら安靜に臥せしめ下腹部に氷巻法を施し四肢を温め葡萄酒珈琲其他の亢奮劑を與へて醫士の來るを待つべし

第五十八章 妊娠に合併する疾病

第一 妊娠性腎炎

妊娠性腎炎は多くは其末期に於て徐々に發生し先づ顔面に浮腫を來し次で下肢に至り甚だしきは全身に及ぶ又尿意頻數嘔心等の感あり然れども尿量は著るしく減少し且つ多量の蛋白質を含有す此の如き状態は妊娠の終期まで持續し經過可良なる時は分娩後速に治療に赴く然れども往々危険なる子癇を發起し又は胎盤の早期剝離を起さしむ其他往々蛋白質尿性網膜炎と稱する眼病を引き起し視力朦朧となるこゝあり本病は初産婦に多く又雙胎羊膜水腫等に伴發す

處置 妊婦浮腫ある時は必ず醫士に尿の検査を乞ふべし而して妊婦は可成安靜に平臥せしめ多量の牛乳を與へ刺戟性の食物即ち酒類胡椒山椒葱芥子等を飲せしむべからず其他助産婦は本病と認むる時は直ちに醫士を聘せざるべからず

第二 脚氣

脚氣は米を食する地方に起るもの多しと云ふ人あり乃ち歐洲人に少なく本邦に於て多く妊婦及び褥婦は甚だ之に犯され易し又是等の婦人に發する時は好んで重症に陥らしめ幸に死を免るこ雖も久しく治し難し而して脚氣を患ふる褥婦の乳汁を小兒に飲用せしむれば小兒も亦脚氣に罹り往々危険なる症状を發す之を乳兒脚氣と云ふ部筋肉を壓すれば疼痛を覺ゆ病進む時は下肢の知覺全く麻痺し無力となりて歩行すること能はざるに至る又下肢は著るしく浮腫し心臓の動悸高ぶる胃には食物停滞し食進まず且つ便秘あり尙劇症に至れば浮腫は四肢顔面に及び遂に全身に廣がり下肢の麻痺は進みて下部上部

口唇迄及ぼし心臓に異常を來して動悸益々劇しく脈搏は不正となり妊婦は甚だしき呼吸困難苦悶を感じ食慾全く不遂に衰弱によりて斃る其他急に劇しき胸内の苦悶を來し口唇顔面四肢の尖端等紫色となり數時間にして死に至るものあり之を脚氣衝心と稱し心臓及び横隔膜の麻痺するによるものなり以上述べたるが如く多くの脚氣には浮腫を來せども又乾性脚氣と稱し全く浮腫のなきものあり此ものは悪性にして脚氣衝心を起し易しとす

處置 脚氣は夏季に發すること多きを以て此時期に至れば脚氣流行地に住めるもの又は前回の妊娠又は産褥時に之を患ひたるもの等にありてはなるべく轉地療養をなさしめ且つ米飯を廢して麥飯となし不消化物を避け又常に便通を佳しならしめざるべからず既に本病を發したるものは速かに醫士の治療を乞ひ以て其指圖に従ふべし

第三 梅毒と妊娠の關係

梅毒は妊娠と綿密なる關係を有し父母何れに存するも之を胎兒に傳へ生れながらにして梅毒を有する病兒を生み或は流産早産を起し或は生後病毒を現す殊に父の梅毒はたとへ母體に感染せしむることなきも尙之を胎兒に傳ふるに從ひて漸次減少するものなるが故に兩親が梅毒の舊きに從ひて數年を経れば胎兒は毫も病氣の徵候なく唯虚罹りてより數年を経れば胎兒は毫も病氣の徵候なく唯虚弱なる體格にて生るることあり然れども分娩後三週乃至六週にして鼻カタル皮疹等の遺傳梅毒の徵候を發すること多し又兩親が本病に犯されてより十箇年以上経たる後には小兒は全く健全に生れ健康に成長し得べし殊に其兩親が適當なる治療を受けて治したる時に於て然りとす以

上述の如く梅毒は諸種の障害あるを以て本病患者妊娠する時は初めより醫治を乞ふべし

第四 肺結核と妊娠の關係

肺結核患者が妊娠する時は却て一時病症輕快せるが如き状態を感じ且つ妊娠中には病勢停止するものなきに非ずと雖も多くは益々増進し殊に月數の重なるに従ひて劇しく甚だしきに至れば疾病増悪後二三日若くは二三週間にして死亡するに至ることあり又妊娠時に停止せるものと雖も産褥期に至れば頗る増劇し復た之を救ふこと能はざるに至る故に本病患者が妊娠すれば速に産科醫に乞ひ適當なる治療を求めざるべからず

第五 妊婦の卒倒

妊婦突然卒倒して人事不省に陥ることあり其初め俄かに倒れ身軀殊に顔面蒼白色となりて厥冷し次で五官機能消失して凡そ數分間乃至十五分間以上も持續することあり其原因は身軀の強き壓搾に帶又は狹隘なる衣服等に於て胸部を絞壓し又演劇舞踏會場寺院等閉鎖せる室内に多人數相集り呼吸に由りて汚穢となりし大氣を吸入するに因し其他精神の感動周圍の温熱等又之が原因たることあり故に妊婦は注意して凡て以上の原因となるべき事件を避く可し助産婦は此の如き卒倒せる妊婦に會するときは先づ之を平に臥せしめ稍々頭部を下垂して直ちに狹隘なる衣服を解き窓戸を開きて新鮮なる大氣を通せしめ室内は適當の温度とし醋若くは香水の如き刺激性のもの鼻の下に灌ぎて之を嗅がしめ強く呼吸せしめ少量の冷水を飲ましめ前頭及び顳顬部は醋又は葡萄酒にて拭ひ温

暖なる毛布或は刷毛の類を以て身體を摩擦し芥子泥を心部へ貼付すべし

心臓の搏動及び呼吸を認知せざる卒倒症にありては假死なるか或は眞死なるかを區別せざるべからず故に斯る場合には直ちに産科醫を招くべし之れ妊婦に於ても必要なるのみならず殊に胎兒に對しても最も緊要なるものなり之れ妊娠末期に於ては已に死亡せる母體よりも生かせる小兒を娩出せしめて救助することを得ることあるが故なり

第七編 異常分娩及其取扱法

異常分娩とは産出力産道胎兒及び其附屬物等の異常并に産婦の疾病によりて分娩の經過正規ならざるものを云ひ一朝其機を誤れば母兒兩體を危険ならしむ而して此場合於ける助産婦の務めは速に醫治を乞ふにあり若し助産婦にして己の名利を貪らんが爲め助産學の範圍外に屬する無謀の手術を行ふ時は之が爲め遂に醫士の施すべき適當なる手術の時期を失し不幸の結果を來すに至るべし然れども醫士の施術に際しては助手となりて敏悟且つ注意周到に之を補佐せざるべからず以下異常の分娩及び其取扱法并に之に依て起る諸種の損傷を論せん

第五十九章 産出力の異常

第一 陣痛微弱

陣痛微弱とは諸種の原因によりて子宮の収縮力弱くなり胎児の娩出甚だ困難なるものを云ひ陣痛の發作間短くして間歇時長く且つ其度數少なくして疼痛亦弱く分娩は頗る遅延し遂に全く中止するに至る

原因 陣痛微弱の原因に二種ありて初めより弱きもの即ち原發性陣痛微弱と種々の障害によりて分娩の中ごろより弱くなりたるもの即ち續發性陣痛微弱とに區別す

(イ) 原發性陣痛微弱

一 高年の初産婦若くは甚だ若年の産婦
 二 營養不給或は重病後若くは生來の多病等によりて身體の虛弱なるもの

三 子宮の變常即ち子宮壁の腫瘍羊膜水腫雙胎過大なる胎児及び頻回の分娩等によりて子宮壁の過度に延長せられたるもの

四 甚だしき精神感動等なり

(ロ) 續發性陣痛微弱 は初め正規の陣痛を來すと雖も分娩困難なるが爲めに子宮の疲勞より來るものにして

一 過大なる兒頭
 二 狹窄骨盤

三 三十年以上の初産婦即ち年長くるまで分娩せざる時は子宮口及び膣は硬くなりて分娩の際開大及び延長し難きによる

四 膀胱直腸の充盈又は胃の膨滿せるもの等之なり

陣痛微弱の爲めに起る障害 は分娩の各期によりて

大差あり即ち

一 開口期に於て陣痛微弱を發する時は子宮口の開大
ること甚だ遅く分娩亦長時を費すと雖も敢て母兒兩體に
著るしき害なし

二 産出期に至り始めて之を來すか或は開口期よりの陣
痛微弱尙ほ持續する時は胎兒の下降すること甚だ徐々に
して遂に全く分娩停止し若し胎兒破裂して兒頭既に小骨
盤内に降れる際においては産道は兒頭による久しき壓迫
の爲めに挫傷を生じ分娩後膀胱又は直腸等に瘻管を形成
して尿或は大便秘絶えず腔内より出で甚だ煩しき障害を
來す又此の如く胎兒破裂する時は羊水漏泄して益々其分
娩を困難ならしめ且つ空氣は不潔物を伴ひて子宮内に浸
入することあるが故に子宮内に於ては腐敗を生じ發熱脈
搏頻數下腹部の知覺過敏等の症狀を呈し分娩後産褥熱を
發するの危険あり胎兒は産出期に於ける陣痛微弱の際多

くは假死に陥り或は全く死するに至る

三 後産期の陣痛微弱は最も危険なるものにして出血甚
だしく且つ後産の娩出頗る遅延し又假令娩出すと雖も陣
痛微弱なるが爲め剝離せる胎盤部の血管斷口は閉鎖せず
して劇しき出血を發し暫時にして母體を死に至らしむ
處置 原發性陣痛微弱の原因あるものは妊娠中より之
を豫防せんことに務めざるべからず即ち充分なる滋養物
を與へて身體を強壯ならしめ適當の運動全身浴等を勵む
るを要す

一 開口期に於ける陣痛微弱にありては第一に膀胱直腸
を空虚ならしめ尙ほ産婦の耐え得る間は室内の運動を試
ましむべし又半時乃至一時の間程攝氏三十八度若くは四十
度の温湯を以て全身浴又は坐浴を取らしむるも子宮口尙
硬くして開口大し難き時は一時間か二時間毎に攝氏三十八

度をなしたる一布仙のリゾール水二千瓦を腔内に灌注するを良とする

二 産出期の陣痛微弱にありて尙ほ胎胞の存せるものは著るしき害なきも既に破裂して羊水流出せる後に於ては胎児に危険を來すの恐れあるが故に此際頗る注意して屢く心音を聴取すること要す又時々臥位を交換せしむれば容易に兒頭下降し得ることあり其他葡萄酒珈琲の如き興奮性の飲料を與へ子宮の摩擦法を行ひ未だ疲勞著るしからざる産婦にありては努責を命すべし此の如き方法を施すと雖も二時間以上にして尙陣痛増進せざるか或は胎児頭蓋位なるに係はらず胎糞を漏すか又は胎児の心音微弱となりて危険の徴候を現す時は速に醫治を乞ふべきものとす

三 後産期に於ける陣痛微弱は頗る危険なるものなれば

第二 過劇陣痛

過劇陣痛とは子宮の收縮頗る強く且つ其發作間長くして間歇時短きものを云ふ而して此陣痛は初めより劇しき努力を伴ひ疼痛は却て弱く甚だ速に胎児を娩出すと雖も之が爲めに母兒兩體に危険なる障害を來すものなり此の如く分娩早きを以て開口期と産出期とは殆んど合併せしむ

原因 劇しき精神の感動興奮劑の濫用熱性病に因する神經の興奮等にして其他不明の原因によりて起ることあり又初産婦よりも經産婦に多く且つ同一婦人に反覆して發すること屢くなり

過劇陣痛の爲めに起る障害 産道の未だ充分開大せ

度をなしたる一布仙のリゾール水二千瓦を腔内に灌注するを良とする

二 産出期の陣痛微弱にありて尙ほ胎胞の存せるものは著るしき害なきも既に破裂して羊水流出せる後に於ては胎児に危険を來すの恐れあるが故に此際頗る注意して屢々心音を聴取することと要す又時々臥位を交換せしむれば容易に児頭下降し得ることあり其他葡萄酒珈琲の如き興奮性の飲料を與へ子宮の摩擦法を行ひ未だ疲勞著るしからざる産婦にありては努責を命ずべし此の如き方法を施すと雖も二時間以上にして尙陣痛増進せざるか或は胎児頭蓋位なるに係はらず胎糞を漏すか又は胎児の心音微弱となりて危険の徴候を現す時は速に醫治を乞ふべきものとす

三 後産期に於ける陣痛微弱は頗る危険なるものなれば

若し出血の徴候を來す時は速に醫治を受くべし

第二 過劇陣痛

過劇陣痛とは子宮の收縮頗る強く且つ其發作間長くして間歇時短きものを云ふ而して此陣痛は初めより劇き努力を伴ひ疼痛は却て弱く甚だ速に胎児を娩出すも之が爲めに母兒兩體に危険なる障害を來すものなり此の如く分娩早きを以て開口期と産出期とは殆んど合併せしむ

原因 劇しき精神の感動興奮劑の濫用熱性病に因する神經の興奮等にして其他不明の原因によりて起ることあり又初産婦よりも經産婦に多く且つ同一婦人に反覆して發すること屢々なり

過劇陣痛の爲めに起る障害 産道の未だ充分開大せ

ざるに當り胎胞破裂して羊水は流出すると共に一頓に胎
 児を娩出するが故に子宮口膣陰部等に大なる裂傷を生
 じ若し此際骨盤狭きか児頭の大なるが爲めに分娩困難な
 れば時として子宮破裂を來すことあり骨盤廣き時は子宮
 の下部は骨盤出口まで押し出され甚だしきは陰門外にま
 で達す其他産婦が直立又は歩行する際之を發する時は小
 児は地上に墮され所謂墜産を來し臍帶を斷裂せしめ或は
 子宮内臓等を發起す又陣痛の過劇なるが爲めに産婦は
 非常に興奮して全身甚だしく發汗し且つ震戦すべく或は
 頭部の充血を來すを以て時として人事不省に陥り言語
 躁狂等を發することあり或は後産期に至り子宮疲勞して
 陣痛微弱を起し危険なる出血を來す胎児は強き陣痛の爲
 め壓迫せられて窒息し假死若くは眞死に陥ることあり
 處置 前回の分娩時に此症を發したる妊婦にありては

豫め注意しなるべく身體を安靜にせしめ妊婦の末期に至
 れば己れの住家を遠く去りて他出せしむることを避け既
 に陣痛の初徴を發せば速に産床に就きて助産婦の許へ通
 知すべきことを諭すべし助産婦は此の如き産婦には屢々
 診察することをして避け足を伸して側臥せしめ假令産出期な
 りと雖も決して腹壓を加へしむることなく且つ前進し來
 る児頭を押し返してつゝ務めて其娩出を徐々ならしむべし
 既に排膿するに至れば最も注意して會陰を保護し若し子
 宮の下部が下降することを認むる時は指を以て之を還納
 する様試むべく其他産婦の甚だしく興奮せる徴候あるこ
 きは猶豫なく産科醫の來診を依頼すべし

第三 痙攣性陣痛

痙攣性陣痛 とは全子宮の收縮不規則にして諸々に劇

痛を伴ひたる収縮を發し且つ各問歇時の持続に不同あり
 て數回の極めて短き問歇の後一回の稍々永き問歇を來
 し或は又問歇時非常に短くして遂に全く之を認め難く全
 子宮は持続性の収縮を現す之を子宮強直症と云ふ痙攣性
 陣痛に於ける子宮収縮の部分は分娩の時期によりて之を
 異にす即ち開口期に於ては主に子宮外口部に劇しき収縮
 を起し産出期にありては子宮體の上部と下部との間に於
 ける収縮最も強くして収縮輪は非常に著るしく現はれ溝
 状をなし外部より能く觸知し得らる之を痙攣環と云ふ此
 の如く子宮には痙攣環を生ずるを以て其中央凹陷して瓢
 形を呈すべし後産期に於ては主として子宮内口部に過度
 の収縮を起すものなり

原因 痙攣性陣痛の原因は之を二種に大別す
 一子宮収縮すと雖も胎兒前進すること能はざるもの

二子宮の収縮を誘起するもの之なり

其第一に屬するものは横位膈水腫癒着せる雙胎狹窄骨
 盤産道内の腫瘍子宮口の強硬卵膜の甚だ厚きもの早期破
 水等に於て第二に屬するものは不適當なる子宮の摩擦頻
 回の内診及び指を用ひて子宮口の開大を試みたるもの不
 適の手術醫藥の濫用感覺過敏にして痙攣を起し易き性質
 を有する産婦等之なり

痙攣性陣痛の爲めに起る障害 劇甚なる疼痛絶えず
 持續し子宮は収縮するに係はらず胎兒は同一の所に固定
 して毫も下降せず體温上昇して脈搏頻數となり産婦は疼
 痛の爲めに煩悶し心身の充奮によりて精神障害を來し屢
 く嘔吐を催し又尿管及び便秘を來す開口期に於ては子宮
 外口縁緊張して硬くなり更に開大することなく稍々前進
 せる兒頭は痙攣によりて再び高く骨盤内に壓上せらる産

婦は此際子宮外口部に於て切るが如く或は刺すが如き疼
 痛を感ず産出期にありては瘰癧環は劇しく胎児を括約し
 て血行障害を起し速に死に至らしむことあり後産期に於
 ては子宮内口收縮するを以て胎盤を固く茲に鎖されて全
 く娩出すること能はざるに至る

處置 本症を發する時は直ちに醫士を迎へ其間産婦を
 安靜に臥せしめ腹壓を禁じ内外検査は全く之を廢し膀胱
 直腸を空虚ならしめ全腹部に温巻法を行ひ膈内より子宮
 口に向て温湯灌注を施し又薦骨部に芥子泥を貼するも可
 なり其他産婦にカミツレ浸又は麥湯牛乳等を温暖ならし
 めて與ふべし

第四 腹壓の異常

腹壓

は開口期に於ては未だ必要ならずと雖も産出期

にありては缺くべからざるものにして全く之を起すの力
 なきか又は不十分なる時は大に分娩の経過を長からしむ
 原因 産出期に於て腹壓は自ら起るものにして下半身
 麻痺症を患ふるの深麻酔に陥りたるものに非ざれば全く
 之を缺くことなし然れども腹内に大なる腫瘍を有するも
 の及び膀胱の充満等は腹壓の作用を妨げ懸垂腹大なるへ
 ルニヤを有するもの心臓病肺病等にて衰弱したるもの等
 は腹壓の發起すること甚だ不十分なりとす

處置 原因に從ふて之を處置し若し全く分娩中止する
 が如き不幸に陥らば直ちに醫治を乞ふべし

第六十章 産道の異常

第一 軟部産道の異常

一 子宮の異常

重腹子宮とは子宮腔の中央に薄き壁ありて之を左右の二腔に分てるものを云ひ兩腔共に妊娠する時は雙胎に於けると同じき症状を呈し一腔のみ妊娠すと雖も子宮斜めに傾き易きを以て横位を生じ或は分娩の際子宮収縮の方向を不正ならしむ其他兩腔若くは一腔の妊娠に關らず陣痛微弱を來し胎盤若し中隔壁に附着する時は胎盤の剝離困難にして且つ後産娩出後に於て收縮する性質を有せざるが故に胎盤部の血管斷口は閉鎖せらるることなく著るしき出血を呈すべし

處置 各々其場合によりて應救の處置を施し危険なれば速に醫士を招くべし

子宮の右轉若くは左轉 通常子宮の位置は少しく右方に傾くものなれども若し著るしく右方に傾くか或は又著るしく左方に傾く時は之を右轉若くは左轉と云ふ此の如き症にありては分娩の際子宮收縮力の方向正常ならずして右轉せるものは左腸骨窩に左轉せるものは右腸骨窩に向ふを以て胎兒の先進部は骨盤入口に進入し難く爲めに横位又は陣痛微弱等を生じ分娩をして甚だ困難ならしむ

處置 子宮右轉して胎兒の先進部骨盤内に入し難きは左側臥を取らしめ左轉せるものは右側に臥せしむべし然る時は子宮は自己の重量によりて其位置中央に來り收縮力の方向を正當ならしむることあり

子宮の前轉 子宮底の著るしく前方に傾きたるものを
 前轉と云ひ懸垂腹に伴ふものにして經産婦に多しとす
 處置 懸垂腹の條下に述べたる方法を行ふべし分娩に
 際しては子宮口後方に向ふを以て産出力の方向を不正な
 らしむ故になるべく産婦を仰臥せしめ臀下に枕子を挿入
 して之を高からしめ陣痛のある毎に兩手を平くして子宮
 底に貼し強力を用ひず適度に之を後方に壓するを良とす
 子宮の後轉 妊娠後半期に於ける子宮の後轉症は稀な
 り分娩には著るしき害を及ぼすことなし
 分娩時に於ける子宮の下垂及び脱出 胎兒の先進部
 と共に子宮の下部著るしく下降することあり之を下垂と
 云ふ分娩には障害を興ふることなし若し下垂更に甚だし
 くなりて外陰部に現るゝ時は脱出と云ふ
 處置 産婦を仰臥せしめ手指を以て下垂部を支ふべし

脱出せるものは醫治を要す
 子宮口狭窄及び閉鎖 子宮外口狭くして且つ硬きも
 のを狭窄と云ひ其外口の全く癒着して塞がりたるものを
 閉鎖と云ふ狭窄の原因は前回分娩せし時の損傷若くは手
 術等の痕痕のため子宮口狭窄となれるより起り或は頸
 管に腫瘍あるもの三十歳以上の初産婦其他生來子宮口極
 めて少くして自ら開き得ざるもの等なり
 子宮口の狭窄又は閉鎖症を有するものが分娩に臨
 む時は陣痛屢々發作して子宮内口既に開大せるに關らず
 外口は毫も開大することなく爲めに頸管壁は伸張して薄
 くなり之を隔てゝ容易く胎兒の先進部を觸知し得可し甚
 だしきに至れば此部の破裂を來す或は然らざるも分娩少
 しも進行することなく遂に癒着性陣痛を起すことあり其
 他閉鎖症に於ては兒頭の壓迫によりて子宮腔部甚だしく

延長膨出し非薄となり時としては胎胞と誤認せらるゝこ

とあり

處置 温湯の腔内灌注温湯坐浴等を施し且つ速に醫治を

求むべし決して妄りに子宮口に指を挿入して之が開大を

試むべからず

子宮の腫瘍 子宮に腫瘍を生ずる妊婦にして流産する

ことなく妊娠末期に達し得る場合ありと雖も其分娩の際

としては甚だ困難なるものにして大なる腫瘍にありては胎

兒の骨盤入口に入るを妨げ小なる腫瘍にして骨盤内に存

する時は産道を狭隘ならしめ子宮頸部にある時は子宮口

を硬からしめて其開大を妨ぐるものなり

處置 醫治を要す

二 腔の異常

重複腔 亦重複子宮に於けるが如く其中央に中隔あ

りて之を二腔に分つものにして甚だ稀に存す此の如きも

のは勿論分娩困難なるを以て豫め醫治を受くべし

腔狭窄 の原因は生來腔の狭きもの既往の分娩時に於

ける損傷によりて癒痕を生じたるもの腔壁の腫瘍高年の

初産婦等なり此の如く腔管狭き時は分娩の際甚だ困難に

して産出期延長し腔壁緊張して疼痛劇しく遂に裂傷を生

ず

處置 温湯坐浴温湯の腔内灌注等を施して効なき時は醫

治を受くべし

腔脱 とは腔壁翻轉して陰唇間に脱出し青紅色の腫瘍

を生ず分娩の際腔脱ある時に産出期の進むに従ひ益々甚

だしくなり脱出部は壓迫によりて腫脹し遂に壞疽に陥る

ことあり

處置 産婦を仰臥せしめ努責を禁じ手指を以て徐々に脱出部を復納すべし困難なるものは醫治を要す

三 外陰部の異常

陰部の血腫 は陰唇會陰又は陰等に生ずるものにして皮下の血管破裂し血液流出して其部に貯留し暗紫色の腫瘍状を呈するものを云ひ速に増大す此もの破裂する時は危険なる大出血を來し又分娩中腔内に發生すれば胎兒の下降を妨げ其他産褥中に於て化膿し熱症を起すことあり
處置 分娩の際血腫を生ずる時は直ちに一布仙の冷りゾール水を布片に浸し之を軽く壓し若し破裂せば該布片を強く壓迫して出血を止め速に醫治を受くべし
陰唇の浮腫 陰唇の浮腫は其著るじきものに非ざれば分娩を妨ぐるることなし而して分娩後二三日を経過すれば

多くは自ら消退す

處置 微温リゾール水若くは硼酸水を以て巻法を行ふべし其浮腫甚だしくして疼痛亦劇しく分娩困難なるものは醫治に託するを良とす

陰唇の靜脈瘤 青色の結節状をなして現はれ破裂する時は危険なる大出血を來す

處置 産婦を仰臥せしめ努責を禁じ二布仙のゾール水を布片に浸して陰唇に壓し破裂せる時は強く出血部を壓迫して速に醫治を乞ふべし

處女膜の強硬 處女膜硬くして分娩の際まで尙存し兒頭の發露を妨ぐることもあり雖も多くは自然に之を破りて娩出するものなり

處置 甚だしく強硬なる時は醫治を要す且つ自然に分娩せる際には處女膜を破裂せしむると同時に會陰も亦破

裂するを以て此の如き場合に於ては最も注意して之を保
護せざるべからず

會陰の強固

なるものは主として高年の初産婦に來り
又は瘰癧により生ず

處置

甚だしき會陰破裂を生ずるの危険あるを以て豫
め破裂することを確め得ば醫治を受くるに而かず

第二 産道附近に於ける臓器の異常

一 卵巢の腫瘍

卵巢の腫瘍は骨盤腔内にある時は産道を狹小ならし
め其分娩を妨げ骨盤入口以上位する時は胎兒の骨盤内
に進入することを妨害す其他腫瘍大なるが爲め陣痛微弱
を生ずることあり

處置

固より醫治に委ぬるを要す

二 膀胱直腸の充満

直腸の充満 直腸内に多量の硬き糞便蓄積する時は産
道を狹からしめて小兒の産出を妨げ又陣痛微弱に陥るこ
とあり

處置

凡て分娩に際しては其初期に於て必らず糞便を
排泄せしむべし大便甚だ硬くして灌腸に應ぜざる時は指

油を塗りて肛門内に挿入し徐々に之を排除すべし

膀胱の充満

産出期に至り兒頭骨盤内に入る時は尿道
を壓迫するが故に屢く尿管を起す膀胱の充満甚だしけれ

ば恥骨縫際上に於て球形にして波動ある腫瘍の如く觸れ

兒頭の骨盤内進入を妨げ腹壓を害し或は陣痛微弱を來す

處置

産婦の身體を強く前方に屈せしめて排尿を試ま

しむべし若し尙ほ排泄すること能はざる時は指を膈内に挿入して陣痛間歇に際し兒頭を後上方に壓して尿道の壓迫を免れしめつゝ排尿せしむべし此等の方法にて効なき時は嚴重に殺菌せるカテーテルを用ふべく其挿入困難なれば宜しく醫士に委ぬべきものとす

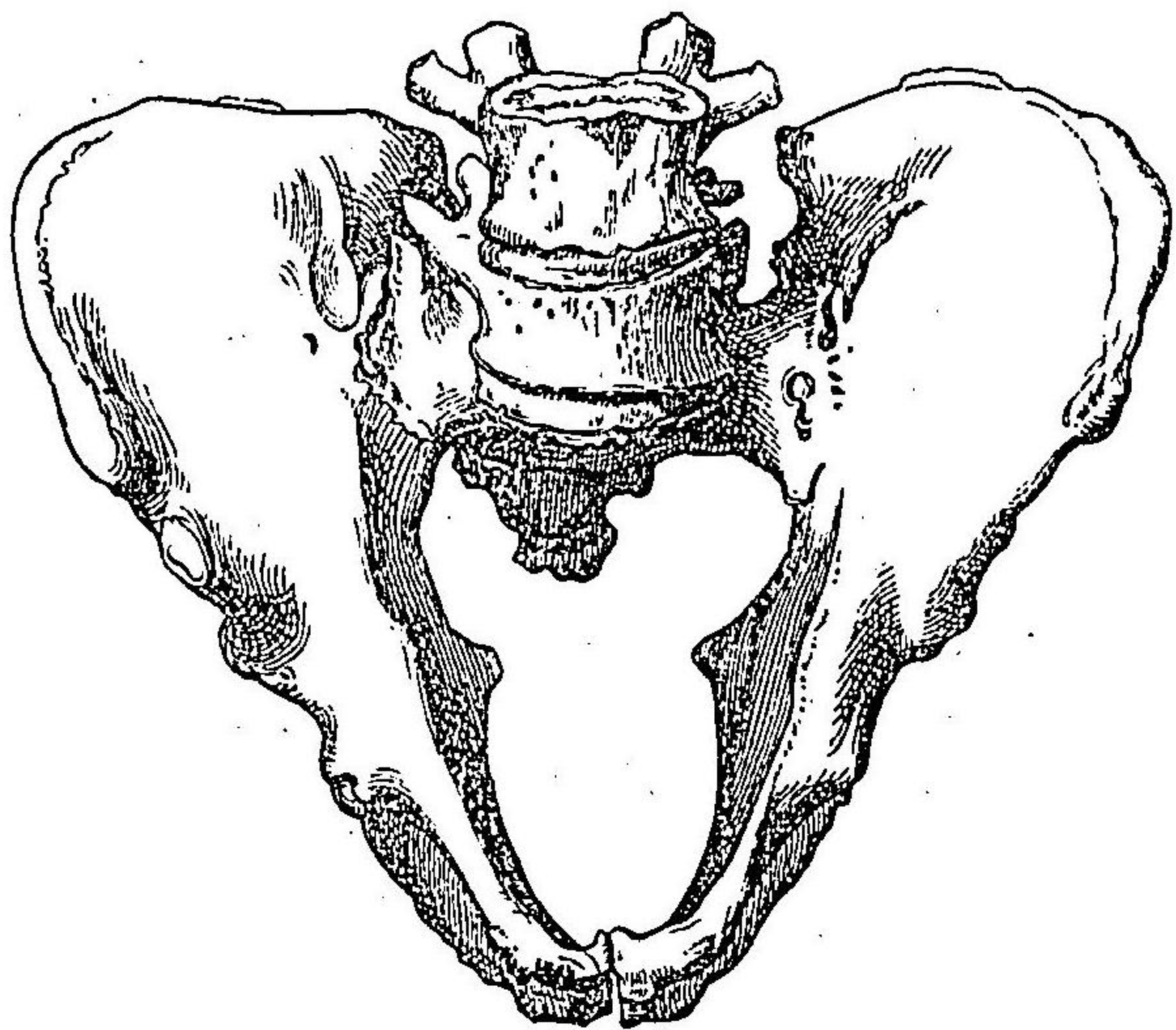
第三 骨部産道の異常

一 狹窄骨盤

狹窄骨盤とは骨盤が通常よりも狭くして分娩困難なるものを云ひ時としては全く分娩を遂ぐることはざる事あり而して其狹窄の模様によりて之れを種々に區別す即ち

- 一 單純扁平狹窄骨盤
- 二 佝僂病性扁平狹窄骨盤

第六十七圖



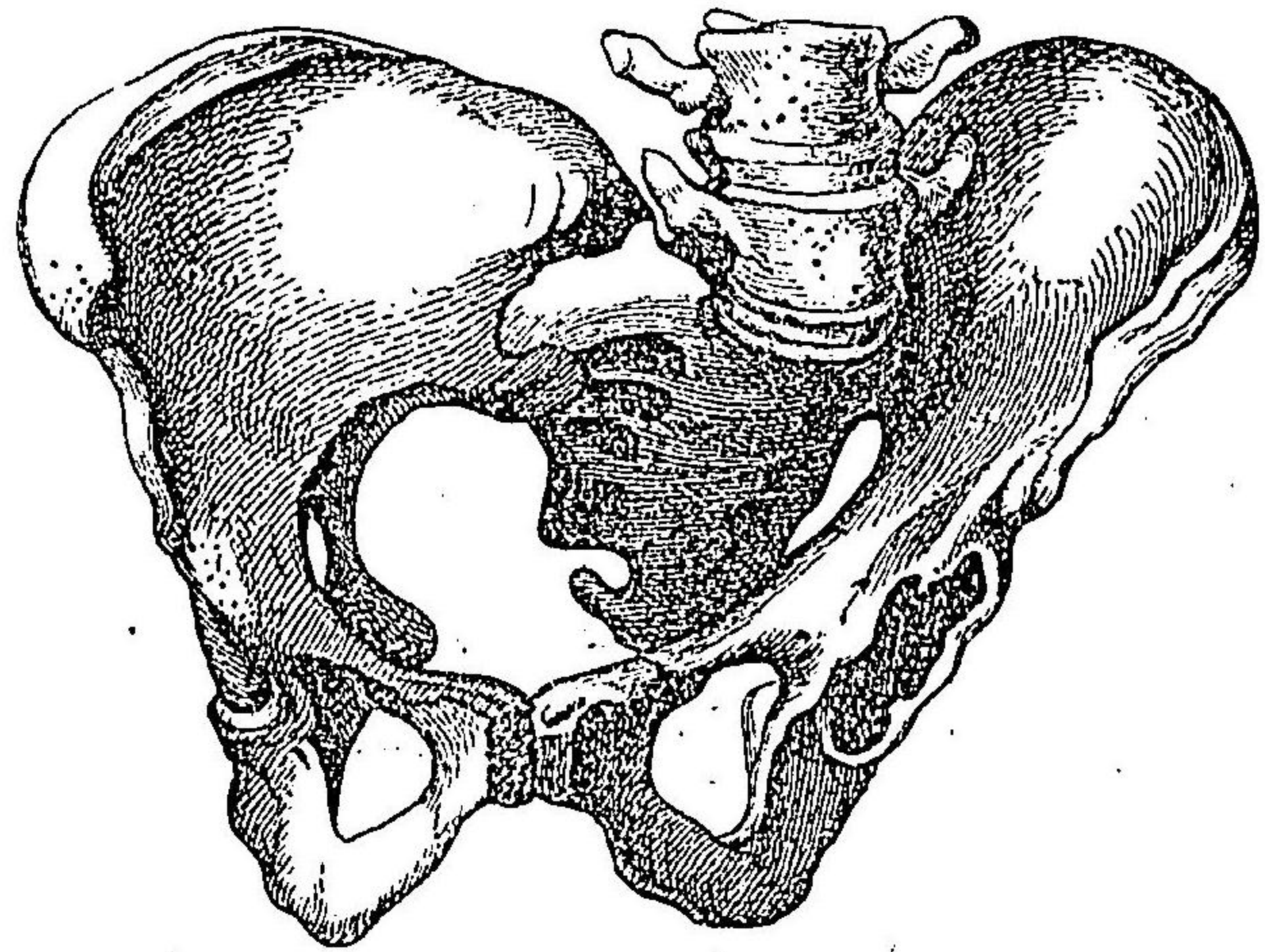
横徑狹窄骨盤(天然の三分一)

之なり

- 一 單純扁平狹窄骨盤
- 二 佝僂病性扁平狹窄骨盤
- 三 骨軟化病性狹窄骨盤
- 四 斜徑狹窄骨盤
- 五 横徑狹窄骨盤
- 六 骨痛性狹窄骨盤
- 七 全狹窄骨盤

の直徑線短くして前後に扁平なるを云ひ其他の諸徑線は却て長きことあり此骨盤を有する婦人にありては内診上容易く手指の薦骨岬に達し得

第六十八圖



斜徑狭窄骨盤(天然の大三分一)

るによりて之を知り得べしと雖も外見上は全く通常のものとは異なることなし

二 佝僂病性扁平狹窄骨盤

平狹窄骨盤とは佝僂病に罹りたる婦人に生ずるものなり佝僂病は多く小兒期に發する疾病にして骨質久しく硬くならざるが故に脊柱より薦骨の上へに懸する重

力のため薦骨岬は著しく骨盤内に突出し以て扁平なる狹窄骨盤となる故に骨盤入口の直徑線は非常に短縮し甚だしきに至ては正規骨盤の半ばに過ぎざるものあり然れども横徑線は却て延長し腸骨翼は扁平にして外方に開き恥骨弓は頗る廣し

佝僂病を有する婦人は身體甚だ小さく下肢は彎曲

し手足の節々大にして腰部廣く薦骨の下部を突出して鞍状を呈し歩行蹣跚として鳴の歩むに似たり又脊柱は彎曲を呈すること多し而して本病を有するものは三四歳に至り漸くにして歩み得或は一たび歩行し始むるも又久しく歩み得ざることもあり

扁平骨盤の分娩に於ける兒頭の器械的作用には

三種の特異點あり即ち第一大顛門の下降すること第二矢状縫合の薦骨岬に接近すること第三矢状縫合の久しく骨

側に傾くか等の諸原因によりて發し分娩甚だ困難なりとす

五 横徑狭窄骨盤

壓したるが如き形を呈し骨盤腔は甚だ狭く殊に其横徑は短し此骨盤は薦骨の發育不完全にして且つ兩側共に薦骨と腸骨と癒着するによりて生じ或は腰椎の後彎症を有するものに發す外診上其婦人の腰部は頗る狭く内診するに恥骨弓亦著るしく狭きを以て之を知り得べし此の如き骨盤を有する婦人は全く分娩を遂ぐることを能はざるものなり

六 骨瘤性狭窄骨盤

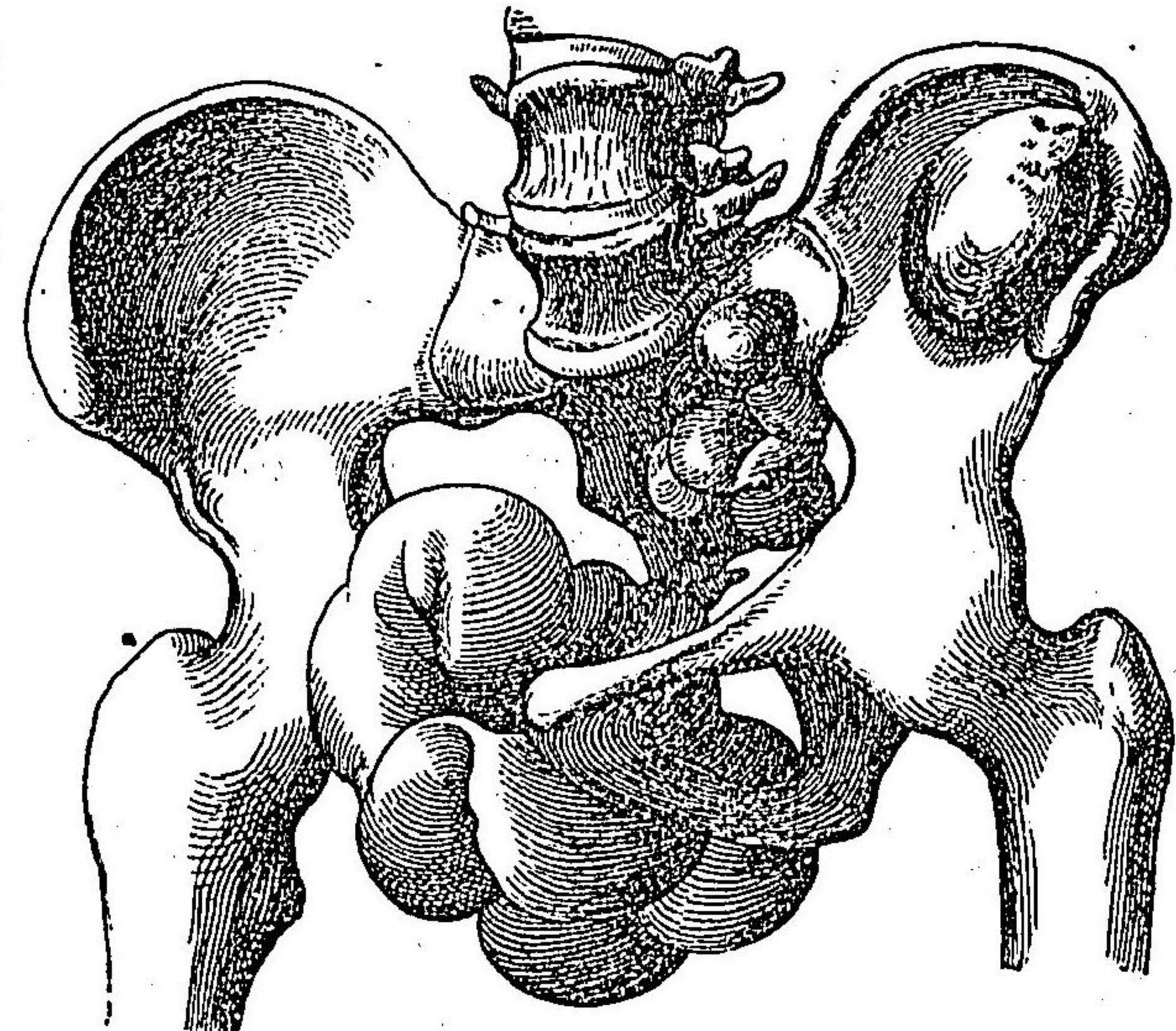
骨盤内に腫瘍を生じて其内腔が狭窄せられたるものを云ふ此腫瘍は時として特發し或は骨の損傷後治癒の不完全なる時に續發するものにして發生部位と數と大さとは一定せず甚だしきは全く骨盤内に

を充たし更に外部に挺出するものあり此骨盤に於ける分娩の難易は腫瘍の大小と數の多少によりて之を異にす

七 全狭窄骨盤

骨盤の各徑線悉く一様に狭きものを云ひ多くは一乃至二仙迷づ短きものなれども尙之より外見上著るしき異

圖 二 十 七 第



盤 骨 窄 狹 性 瘤 骨

り以上短きものあり此の如き骨盤は

常なきを以て助産婦は之を發見すること甚だ困難なるものなり然れども身體の能く發育したる婦人にして比較的腰部狭きか或は内診せる手指の容易に薦骨岬に達し得べく且つ骨盤内壁の周圍に觸れ得べき時は即ち此骨盤なるを知り得べし

狭窄骨盤の徴候

は以上各種狭窄骨盤の條下に述べたれども今更に其要點を擧ぐれば

- 一 身體矮小なる者
- 二 腰部狭小なる者
- 三 佝僂病を患ひたる者
- 四 骨軟化病を發せる者
- 五 常に跛行せる者
- 六 脊柱の彎曲せる者
- 七 前回の分娩困難なりし者
- 八 懸垂胎となれる者

九 妊娠末期に至るも兒頭高く位し骨盤内に進入せざる者
十分娩時に於て正規の陣痛發作せるに因らば兒頭も前進せざる者或は前頭頂骨位を現す者其他深在(確かならず)横位大頤門の下降等を呈せる者も亦骨盤狭窄の一徴と見做すべし

狭窄骨盤の爲めに發する障害

狭窄の度少くして

一 仙迷内外に止まるものは産出力及び胎兒の位置等に異常なき時は分娩遅延すると雖も多くは自ら分娩を營むことを得可し又之より狭小なる骨盤にありても陣痛強く且つ兒頭小さくして軟かに頭蓋の縫合移動し易き時は通常自然に分娩し得るものなり然るに狭窄骨盤の度劇しく且つ兒頭硬くして正規の大きさを有する時は分娩甚だ困難にして長時間を費し以て種々の障害を來す即ち
一 妊娠末期に至るも兒頭骨盤内に固定せざるを以て胎位及び胎勢の異常を生ず

二期 陣痛發作するに關はらず兒頭前進せざるを以て早期破水臍帶若くは四肢の脱出を來す

三期 痙攣性陣痛を來すことあり

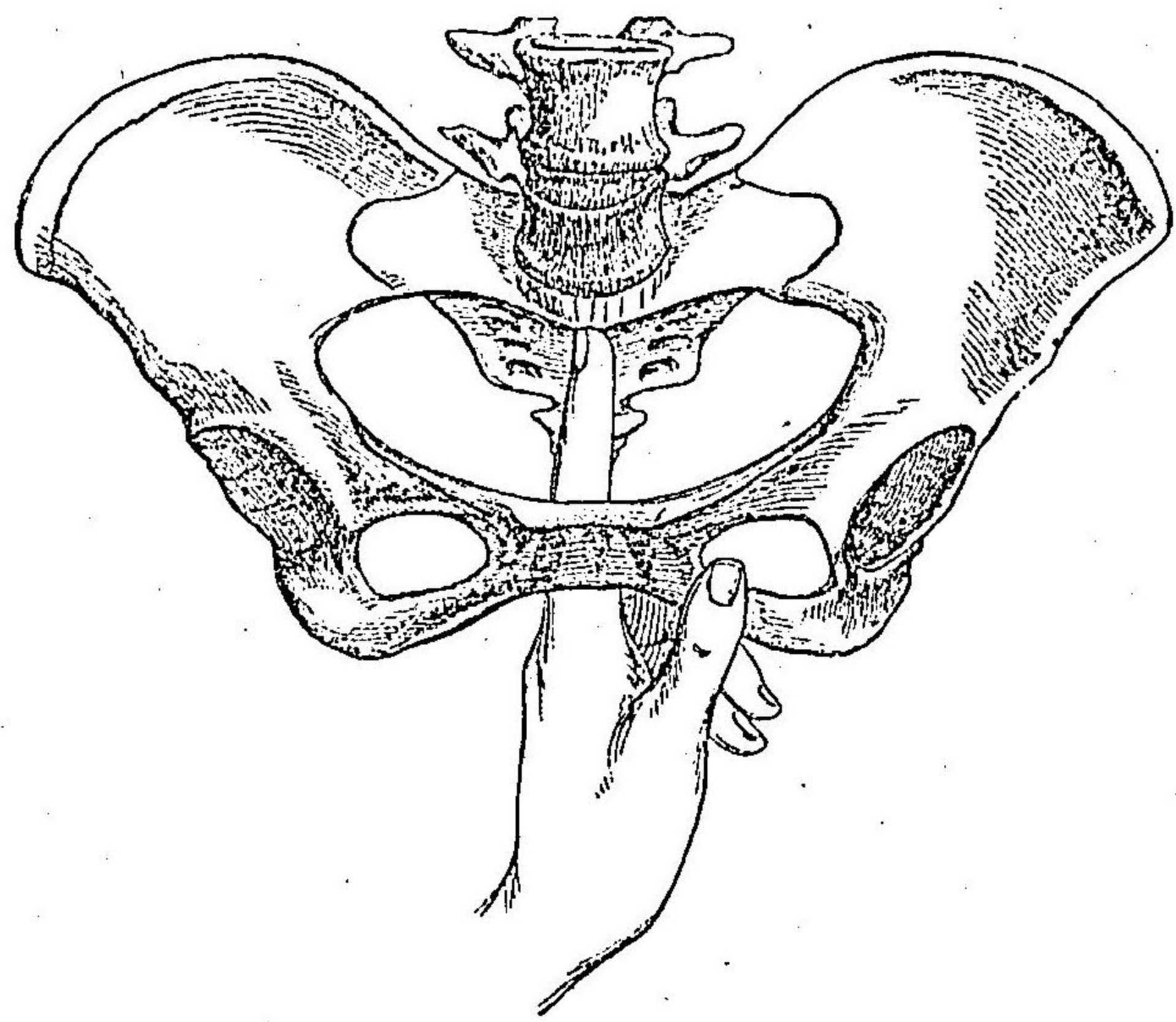
四 續發性陣痛微弱に陥り易し

五 狭窄高度にして陣痛強きものは往々子宮破裂の危険を來す

六 兒頭骨盤内に侵入したるまゝ分娩毫も進行せずして長時を経る時は其壓迫によりて骨盤内の軟部に挫傷を生じ其部壞疽に陥りて分娩後膀胱腫瘍直腸腫瘍等を形成し或は又此部より不潔物吸收せられて産褥熱を發することあり

七 胎兒は分娩長時を費すと上述せる種々の障害によりて血行を妨げらるふことにより多くは假死に陥り或は全く眞死に至ることあり

第七十三圖



法方る測を盤骨て以を指手 (一分三の大然天)

狭窄骨盤の検査法

狭窄骨盤の疑ひある時は醫士に依頼して其計測を受くべきもの

なれども先づ助産婦自ら之を検査するの必要あり今其法を述べれば 一 一手の示指及び中指を伸して第七十三圖の如く腔内に挿入し徐々之を進後上方に進め

指尖を薦骨岬に達せしむべし而して他種の爪を以て挿入せし指の恥骨縫際下縁に接せる部に壓痕を印し膈内の手に指を伸ばしたるまゝ抜き取りその壓痕より薦骨岬に達せし指の尖端までの距離を測るべし是即ち對角結合線の長さの測定法なり此の如くにして計測したる結合線の長さは未だ眞の距離にあらずして之より二仙迷を減せざるべからず何となれば凡そ二仙迷を有する恥骨縫際の厚さも共に此中に含まれるればなり故に對角結合線の長さより二仙迷を減じたるものは所謂眞結合線の距離にして即ち骨盤入口の直徑線の長さと同じされば眞結合線は通常十一仙迷にして之より短き時は狭窄骨盤なりとす

二 法の前は前法よりも尙單簡なるものにして示指を膈内に挿入し徐々に後上方に進め薦骨岬に達し得るや否やを検するにあり若し其尖端が容易く若くは漸くにして

達し得るものは其骨盤は狭窄せるものと知るべし

三 一手を擴げて之を下腹部に貼て其小指の尖端と拇指の尖端とにて一側の腸骨前上棘より他側の腸骨前上棘に達し得るや否やを検するにあり若し容易く達し得れば其骨盤は横徑に狭窄せるものとす

四 兩手を外陰部に於て恥骨弓の角度に沿ふて貼し其廣狹を検すべし其廣きに過ぐるものは扁平狭窄骨盤たるを疑ふべし狹きものは横徑の狭窄せるものなるを知るべし

五 内診せる手指を以て無名線に容易く觸るゝや否や及び左右坐骨結節の距離等を檢す可し其容易く無名線に觸れ得るものは横徑の狹き骨盤にして坐骨結節間の距離短き時は骨盤出口の狭窄あるものなり

狭窄骨盤の分娩に於ける處置 助産婦若し狭窄骨盤

の妊婦を検出する時は必ず之を産科醫に託すべし既に分娩に臨めるものに於ては兒頭の未だ小骨盤内に下降せざる時に醫士を招くを要す其醫士の來るまでに助産婦は産婦を側臥せしめて奴責を禁じ膀胱直腸を空虚ならしめ内診を避け其他興奮劑等は決して用ふることなくなるべく胎胞の破裂せざる様注意すべし

二 過大骨盤

過大骨盤とは骨盤の全徑線皆平均數より大なるものを云ふ此骨盤に於ける分娩は甚だ容易にして其經過極めて短く胎兒の骨盤内を通過する状態も亦一定の分娩機轉を取ることなくそのまゝ押し出される故に往々墜産を來し子宮脱陰破裂臍帶斷裂子宮内翻症等を生ず

過順る短かきか墜産せるが如き既往症あれば助産婦は常に産婦に陣痛様疼痛を覺ゆる時は直ちに安静に臥すべきことを命じ置き且つ此際直ちに往診して凡ての準備をなし奴責を制し早くより會陰の保護に注意すべし

三 高度なる骨盤の傾斜

骨盤の傾斜甚だしきものにありては臀部は強く後方に突出して腹部を前方に挺出せしめ恥骨縫隙は低くして外陰部は兩大腿の間にあり此の如く傾斜甚だしき時は兒頭は恥骨に支へられ骨盤入口に進入し難し

第六十一章 胎兒の異常

第一 胎兒發育の異常

一 過大胎兒

過大胎兒とは身體に異常なきも其發育頗る佳良にして體重は三千五百瓦を超え身長亦五十二仙迷以上なるものを云ふ此の如く過度に發育せる胎兒の頭蓋骨は概ね硬化して縫合は既に移動することなく爲めに其分娩は恰も狭窄骨盤に於けると均しく困難なるものとす過大胎兒の徴候は外診上腹部甚だ大にして胎兒の軀幹長く殊に其頭部は大にして硬きを觸知すべし又分娩時に於て羊水流出後と雖も妊婦の腹部は縮小することなく内診するに兒頭は非常に大きく大頤門と小頤門とは著しく内診するに其間の隔た

れるを觸知す
處置 助産婦既に妊娠末期より胎兒の發育過大なるを知らば其分娩時に於ては速に醫士を招かざるべからず然れども此の如き異常は多く分娩に際して産道及び産出兒の正規なるに關はず兒頭毫も進行せざるが爲めに發見せらるるものなり此の場合にありては狭窄骨盤に於けると同様の處置を施し分娩遅延するときは醫士を聘せざるべからず

二 腦水腫其他の疾患

腦水腫とは腦内に多量の水液溜るが爲めに頭蓋が著るしく膨大する疾病にして其大さ時としては大人の頭程に達することあり外検査を施すに兒頭は大にして軟かく且つ波動を呈し内検査に在ては縫合及び頤門の甚だ廣き

を觸知し得可し然れども此等の状況は通常診知すること
容易ならず若し骨盤に狭窄なく且つ陣痛強きに關はらず
兒頭の下降せざる時に於ては或は腦水腫ならざるやの疑
ひを起すべきものなり而して此症にありては分娩の際に
宮下部強く延長せられ容易に子宮の破裂を生ずるが故に
甚だ危険なるものなり或は兒頭自ら破裂し縮小して容易
く分娩すること亦之あり

處置 子宮破裂の危険あるを以て助産婦は腦水腫なる
ことを診断するときは直ちに醫士を招かざるべからず
頸部の腫大 時として先天性に甲状腺の腫脹したるも
の又は粘液囊腫と稱する腫物の爲めに胎兒の頸部腫大し
て分娩を障害することあり

胸部の腫大 は甚だ稀なるものにして胸腔内に水液の
溜るによりて生ず強度なる時は分娩に害あり

腹部の腫大 腹水膀胱の充満腎臟肝臟脾臟等の腫瘍に
よりて腹部著るしく膨大するものあり甚だしければ分娩
-を害す

全身の腫大 象皮腫皮下の水腫及び諸種の腫瘍發生の
ために全身若くは局部に膨大を來し分娩を害することあ
り
處置 以上の諸疾病に於て分娩に障害あれば醫士を招
くを要す

三 畸形胎兒

重複畸形 とは二個の胎兒相癒着して種々の變形を呈
するものを云ふ即ち
一 兩兒共に完全なる發育を成し以て胸部に於て癒着す
るあり或は背部に於てするあり

二兩兒の癒着甚だ親密にして殆んど一頭一體の如く見ゆれども其頭部に二面を有するものあり或は三足あるあり又は二面四手あるものあり

三 一兒の頭部に他兒の頭部に癒着するあり或は一兒の尾骶部に他兒の尾骶部に癒着するあり

四 其他二頭三手なるあり或は一頭三足なることあり

處置 此等の畸形は概ね分娩に害あるものなれども分娩前に發見すること難し分娩時に於て娩出困難なれば醫士を聘すべし

其他の畸形に於ては分娩を害することなきを以て之を後章に詳述すべし

畸形兒分娩時の注意 總て畸形兒を分娩する時は直ちに之を其母に知らしむることなく密かに家人に告げ治し得べきものなれば家人と圖りて醫士の治療を乞ふべし

又其生死に關はらず畸形兒を娩出する時は醫士の來診を求むべきものとす

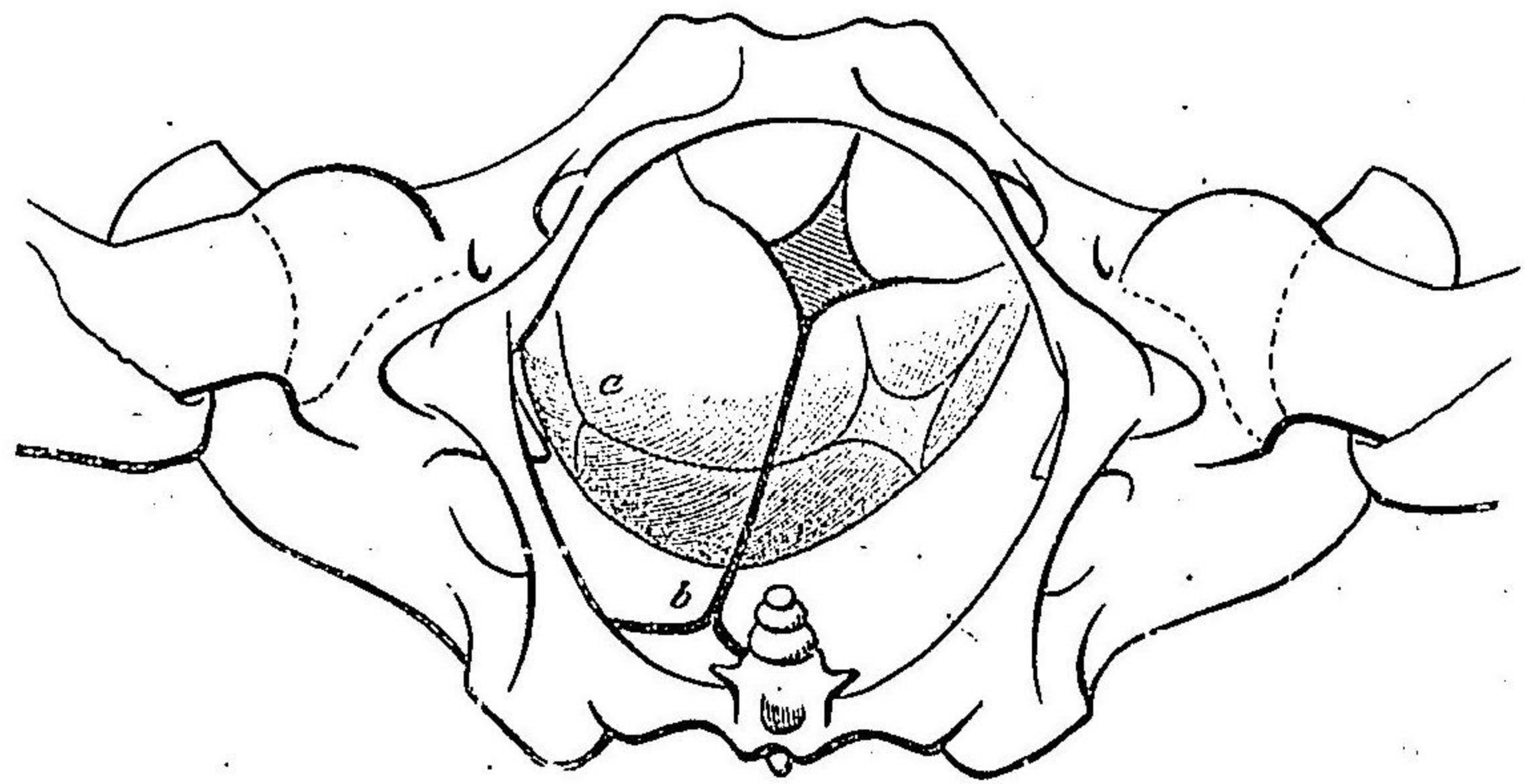
第二胎位の異常

一 前頭位

前頭位とは第三及び第四頭蓋位を云ひ兒頭骨盤内を通過するに當り其後頭が前方に回轉せずして却て前頭が恥骨縫際の方向に來るものなり此位置は小なる胎兒廣き骨盤或は狹窄骨盤兒頭の過大なるもの等に發す前頭位に於ける分娩の經過は正規の頭蓋位に比すれば長くして困難なりと雖も尙自然に産出し終るを常とす然れども初産婦に於ては醫の補助を要すること多し

區別 第一體向をなせるものを第一前頭位と云ひ第二

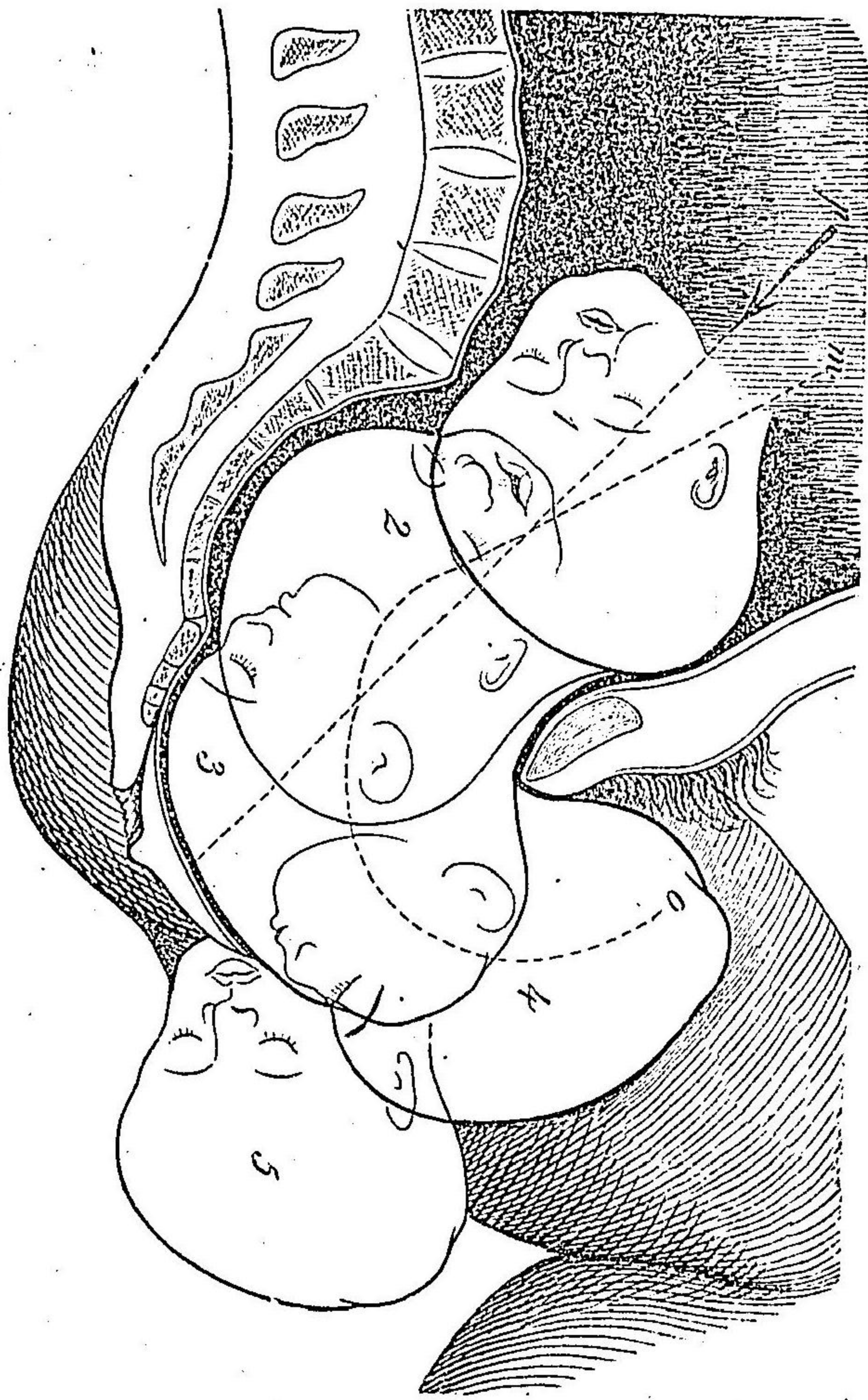
第七十四圖



第二前頭位に於ける兒頭分婉の經過を示す
(天然大の三分一)

體向をなせるものを第一に
 二前頭位と云ふ故に第一
 四頭蓋位は第一前頭位
 にして第三頭蓋位は第一
 二前頭位なり而して此
 位置は後頭位に反して第
 二を多しとす
 内外検査外検査に
 於て第一前頭位は第一
 頭蓋位に同じく第二前
 頭位は第二前頭蓋位と同
 一なり内検査に在りて
 は兒頭骨盤に存在する
 に際し第一前頭位の大き

第七十五圖



第二前頭位に於ける兒頭分婉の經過を示す
(天然大の三分一)

顛門は右前方に小顛門は左後方に位置し第二前頭位の大顛門は左前方に小顛門は右後方に存在す
 器械的作用 始め大顛門下降し漸次前方に回転して骨盤出口に至れば恥骨弓下に小顛門は後方に向ふ而して前頭結節の部位が恥骨弓下に固定し會陰部より先づ後頭を出し次に前頭及び顔面は恥骨弓下より産出す而して後頭は正しく母の左腿若くは右腿に向はすして第一前頭位に於ては右前方に第二前頭位に於ては左前方に向ふものなり其他軀幹及び四肢の娩出は正規の頭蓋位と異なることなし
 産瘤 前頭位に於て其先進部中最も下方に位置する部分は大顛門の近傍にして即ち顛頂骨の前部に産瘤を生ず故に第一前頭位に在りては右顛頂骨の前部に於て第二前頭位に在りては左顛頂骨の前部に於て分娩の経過常に

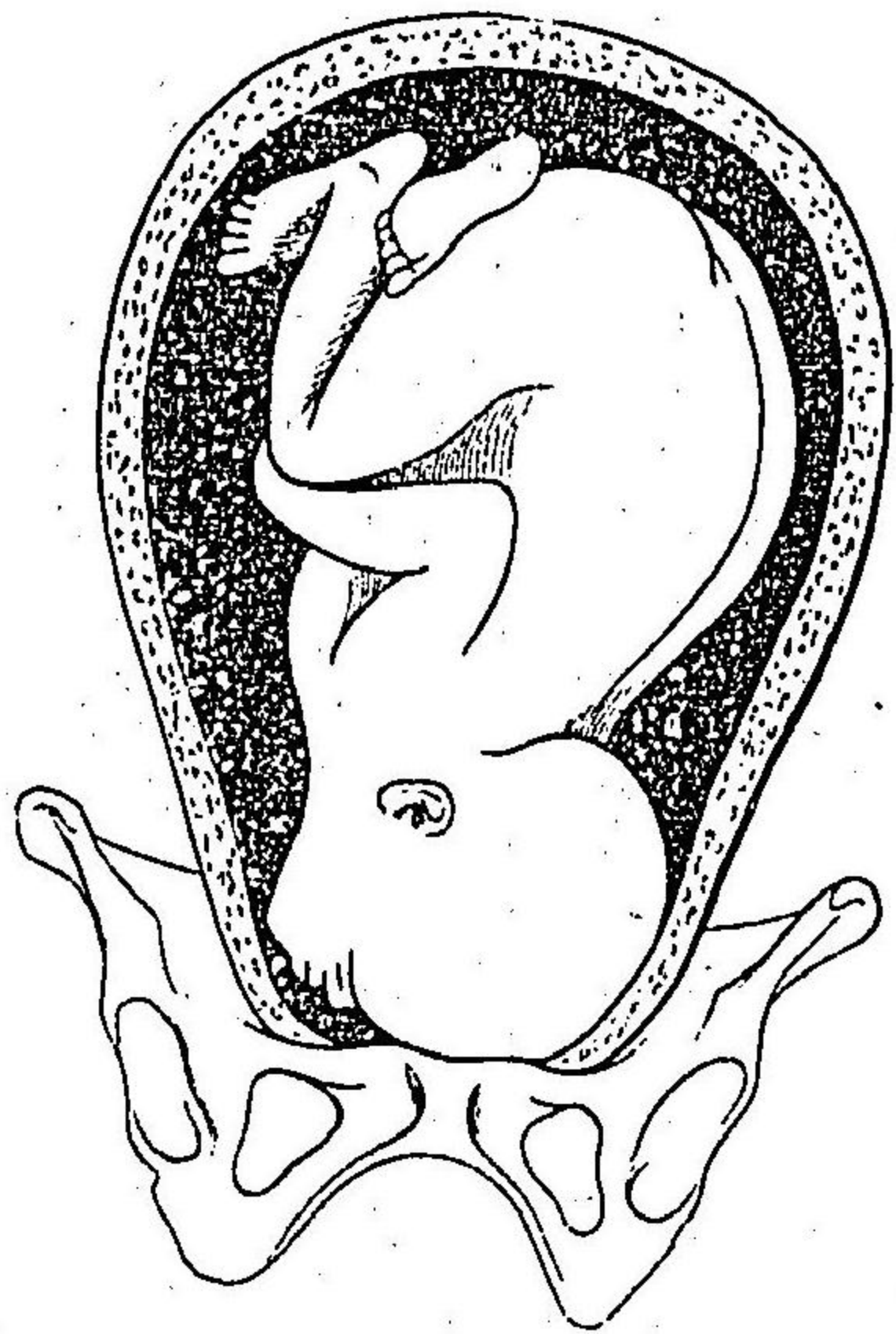
長きを以て産瘤も亦従つて大にして其甚だしきものは大顛門部或は尙其前方に蔓延することあり
 處置 分娩の際に助産婦が内診を施して大顛門を前方に觸るゝも兒頭尙骨盤の廣部にある時は産婦を後頭の位置の方を下にして側臥せしむべし然る時は往々小顛門次第に前方に回転して遂に正規の頭蓋位となりて娩出するものなり然れども前頭位を以て既に骨盤の狭部に來れるか或は後頭が少しも前方に回転するの模様なき時は直ちに産婦の位置を轉じて大顛門の位置する方を下に側臥せしめ兒頭娩出の際には正規の頭蓋産に於けるよりも更に注意して會陰を保護すべし是れ此位置の分娩に於ては會陰を緊張すること甚だしきが故に大なる破裂を生じ易すければなり若し分娩に長時を費す時は速に醫の來診を乞ふべし

二 顔面位

顔面位とは小児が頸部を強く伸展して後頭を頂部に接し以て其顔面を下降せしむるものを云ふ此位置を發するの原因は未だ明らかならずと雖も主に狹窄骨盤懸垂腹羊膜水腫過大兒頭等に來る而して多きは分娩中に始め生ずるものにして妊娠中より發するものは稀なりとす區別 顔面位に二種あり第一及び第二顔面位と云ふ第一顔面位とは兒背及び前頭部が母體の左側に向ふものなり第二顔面位とは其右側に兒背及び前頭部の向ふものなり

外検査 子宮底部には臀部を觸れ腹部の一侧に於けるものより明らかなに觸るゝことを得可し而して

第七十七圖



第一顔面位 (天然の大分五)

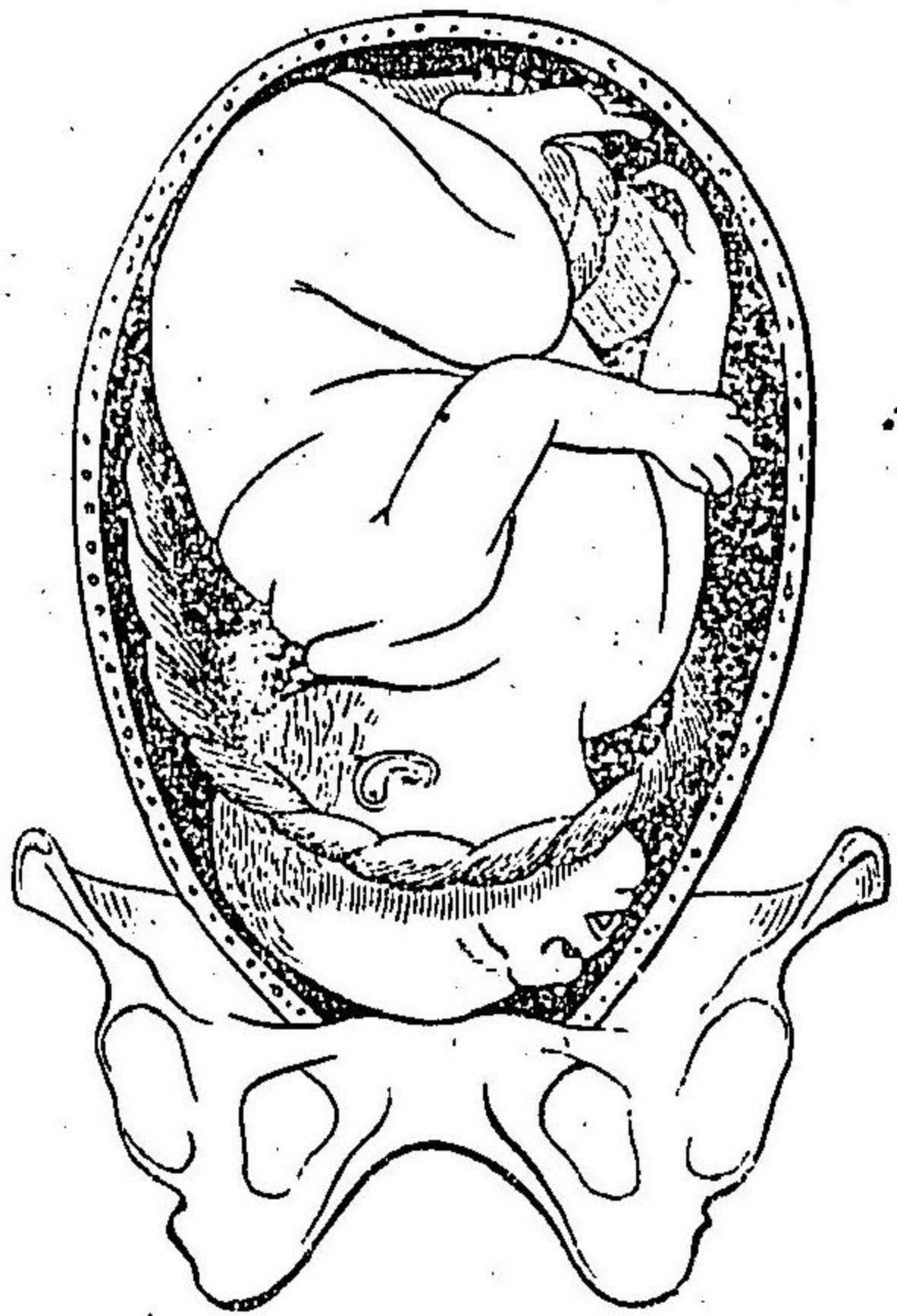
胎骨縫隙上には兒頭を觸知すべく殊に其後頭は頂部に接着せるを以て觸診上背部と頭蓋との間に深き溝を呈するものなり

して其他の位置にありては常に兒背側に於ける特異點に於て心音を聴取すべきものとす

内検査 内診の際胎胞の破裂如何に關はらず柔軟にし

て凸凹不平なる面を觸るゝ時は先づ顔面位ならざるやを疑ふべし而して骨盤入口に於て顔面線は其横徑に位し一側に前頭縫合を有せる前頭を觸れ他側に口及び頤部あり

圖七十七第

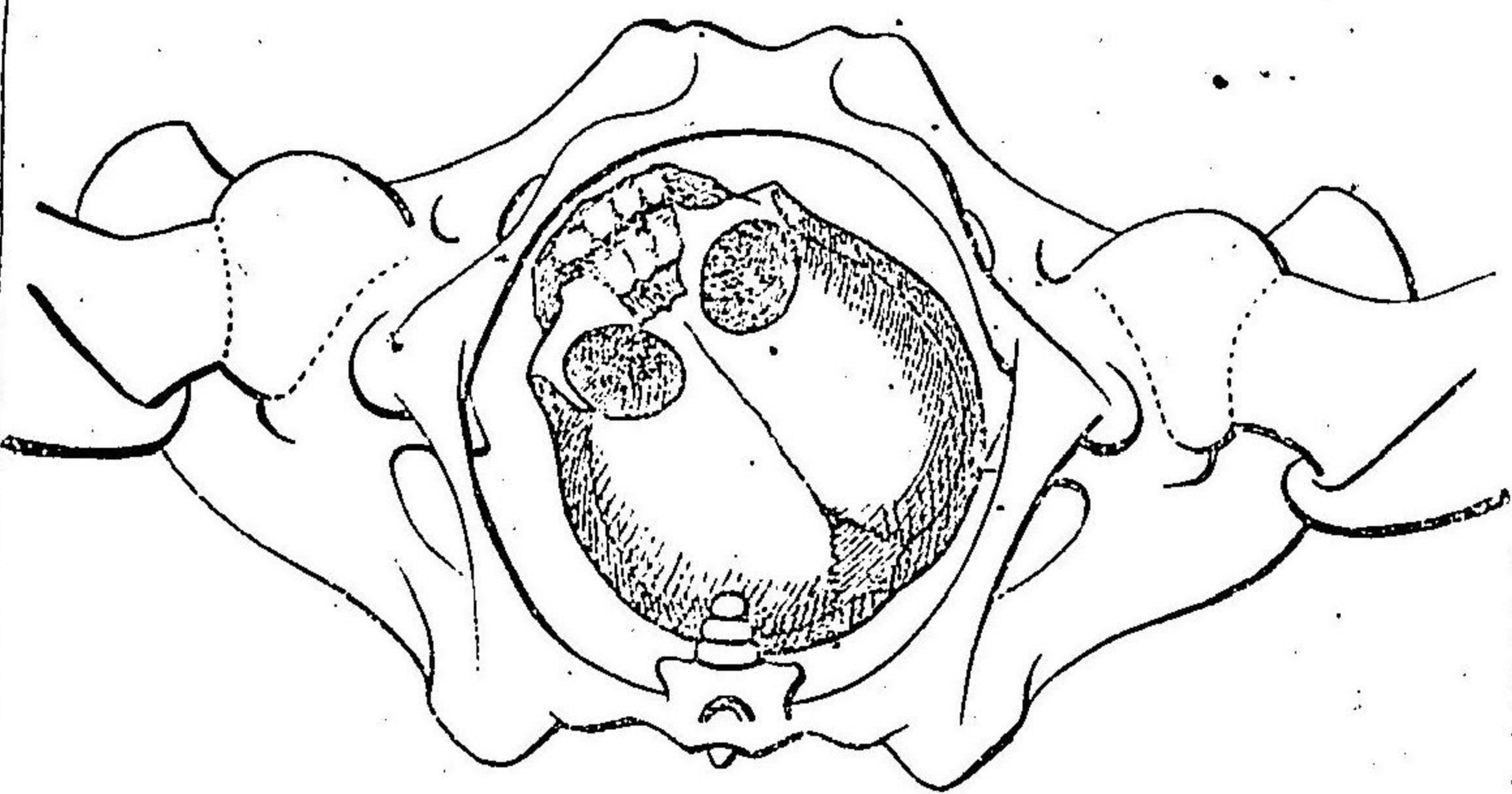


位面顔二第 (一分五の大然天)

左後方に存すべし顔面線とは前頭縫合より鼻梁を越えて頤部の中央に達せる線を云ふ而して顔面位に於ける内診の際には注意して眼を損傷せしむべからず

骨盤腔内に進入せる時は顔面線は斜徑に位し頤部は右前方若くは右後方を越えて

圖八十七第

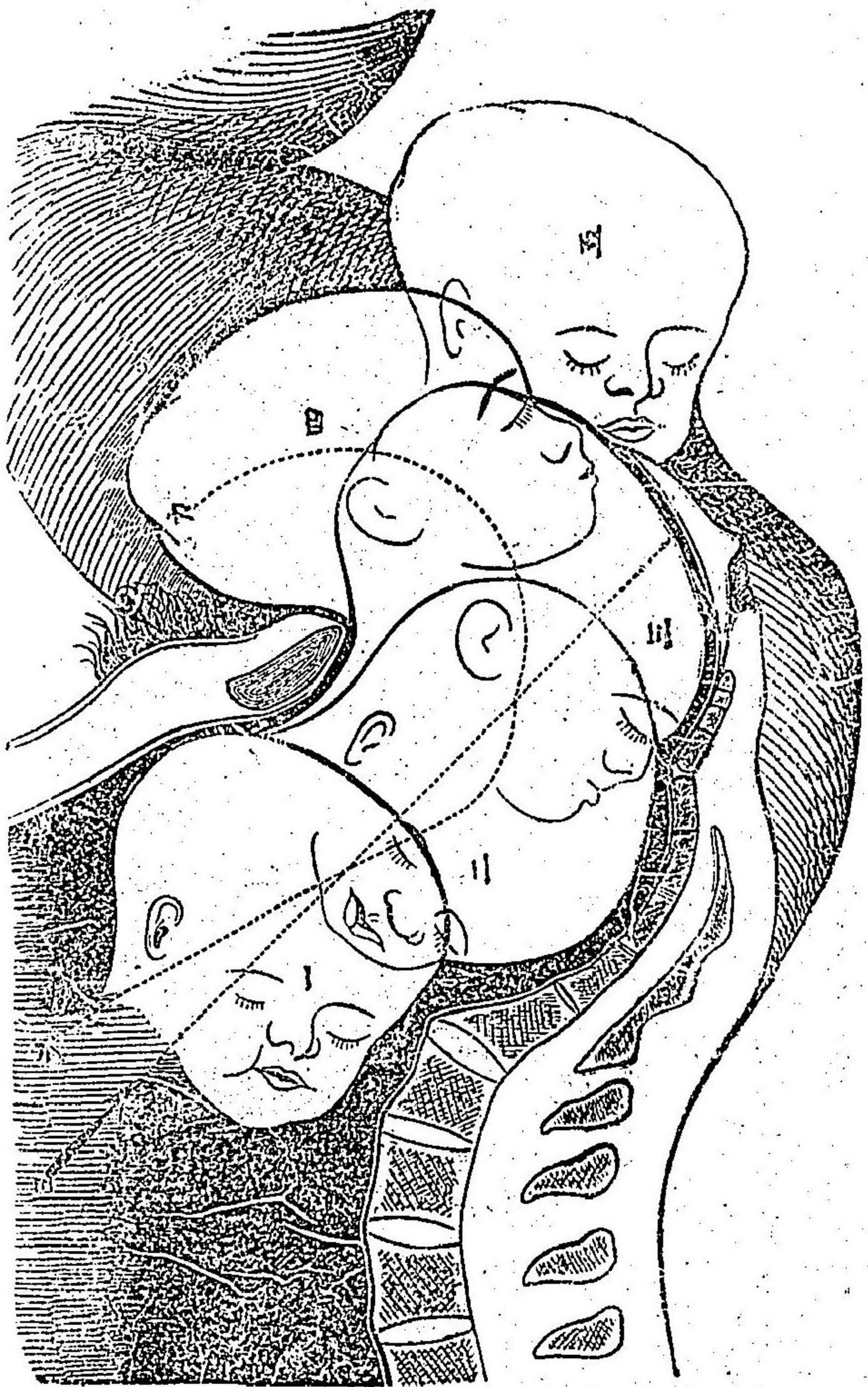


位面顔るた見りよ口出盤骨 (一分三の大然天)

機械的作用 顔面位に於ては胎兒の胎勢變化して頤部は胸部を離れ後頭は却て頂部に接し若くは脊柱の壓力により先づ頤部に及ぼして之を下降せしむ故に顔面位の第一回轉は正規の位置に於けるものと反對にして頤部は益々胸部を離るべし此際顔面線は骨盤入口の横徑と一致す次で第二回

第七十九圖

顔面位に於ける見頭分娩の經過を示す



轉を營むに至れば先進せる頤部は前方に廻り前頭は後方に向ふものにして顔面線は骨盤腔の斜徑線を取らざる如き状態を以て漸次下降し骨盤の出口に至れば顔面線は遂に其直徑線と一致し頤部は恥骨弓下に止まりて會陰部より前頭顛後頭等を順次に産出し次で頤部は弓下を離るに於て兒頭の娩出全く終りたるものなり産瘤は一側の頤部に發して甚だしく蔓延し且つ顔面は横に壓縮せられて甚だ醜形を呈す兒頭既に産出すれば顔面は母體の右腿若くは左腿に向ひ肩胛線は顔面線の取りたるものと反対の斜徑線に一致して骨盤内を降り出口に至れば其直徑線を取り側の肩胛は恥骨弓下に顯はれ他側の肩胛は會陰部より出づ其他の體部は頭蓋位に於けるが如く容易く娩出するものなり

すべきものなれども時として却て後方に廻ることあり
此の如きものは全く自然に娩出し能はざるものとす

検査内		検査外	
頭部は左後方に依りて回轉す故に顔面線は	第一斜徑に一致す	心音は臍の右下方	第一顔面位
頭部は右前方に依りて回轉す故に顔面線は	第一斜徑に一致す	臍の左下方	第二顔面位

顔面位分娩の害 顔面位に於ては先進部の周徑大なるが爲めに分娩大に困難にして長時を費し且つ小児を屢く假死に陥らしめ或は全く眞死せしむることあり此の如く小児の假死に陥り易き理由は分娩の經過遅延するの外小兒は其頭部を劇しく反すが故に頸の血管は強く緊張せられて絶えず多少の壓迫を受け加之ならず尙骨盤出口に露せんとする時に際しては恥骨縫際によりて強く壓迫せらるるを以て頭部より静脈血の還流することを妨げ腦に

右頰部	骨盤腔に於て第一斜徑を占む	同
内を降す	同	同
右頰部	同	同

胎血を起すに基くものなり又母體に於ても會陰破裂を生じ易きこと前頭位よりも更に甚だしき殊に初産婦に於て然り然れども經産婦にして骨盤の造構軟部の性質陣痛の強き胎兒の大きき先進部の回轉等の關係凡て其宜しきを

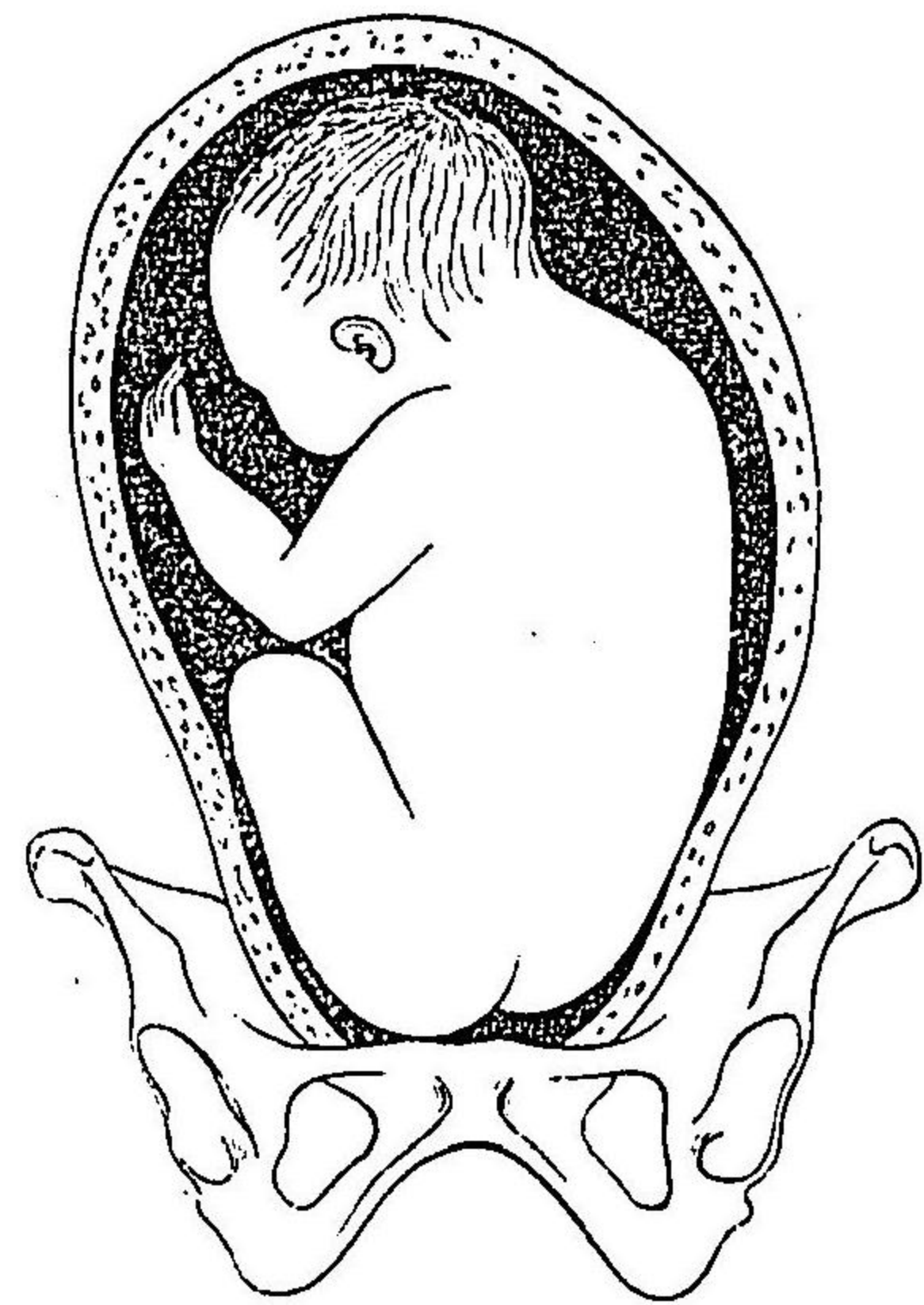
得る時は母兒共に害を受けずして自然に分娩を経過し終るを常とす
處置 顔面位は多くは自ら分娩を營み得るが故に必ずしも醫治を求むるを要せざれども若し分娩に長時を費し或は頤部後方に回轉する時は速に醫士の處置を仰がざるべからず助産婦の顔面位に於ける處置としては先づ胎胞の早期破裂を防ぐにあり即ち分娩の始めより産婦を安靜に臥せしめ奴責を禁じ無用の検査を避くべし産婦の位置は頤部の向へる方を下ににして臥せしむるを良とす胎胞破裂の後には殊に注意して内診を施し小兒の眼を損傷せ

しむべからず會陰の保護は前頭位よりも更に精密なる注意を要すれども妄りに壓迫し其産出を緩漫ならしむる時は小兒の頸部は益々恥骨縫際によりて壓迫を受け爲めに假死に陥り易からしむの恐れあり兒頭娩出後の處置は頭蓋位と異なることなし而して此位置を以て産出せる小兒は醜き顔貌を呈せるが故に直ちに之を産婦に示すべからす

三、骨盤端位

骨盤端位とは胎兒の骨盤部が母體の骨盤に向ふものを云ひ其先進せる部分によりて之を臀位膝位及び足位の三種となす就中臀位は最も多數なるものなり而して此各骨盤端位にありても頭蓋位に於けるが如く其體向によりて第一乃至第四の位置に區別するを得可しと雖も第三及

び第四の骨盤端位は甚だ稀にして假令之あるも分娩の際多くは骨盤腔内に於て第一或は第二骨盤端位に回轉して娩出するものとす



向胎一第 (一分五の大然天)

勢を變ずることなく足踵を臀部に接せしめたるまゝ下降せるものにして不全臀位とは足を伸ばし臀部のみ下降せるものを云ひ全臀位よりも多し

1 臀位
一乃至第四を區別するの外全臀位及び不全臀位の二種あり全臀位とは正規の胎位

圖十八第



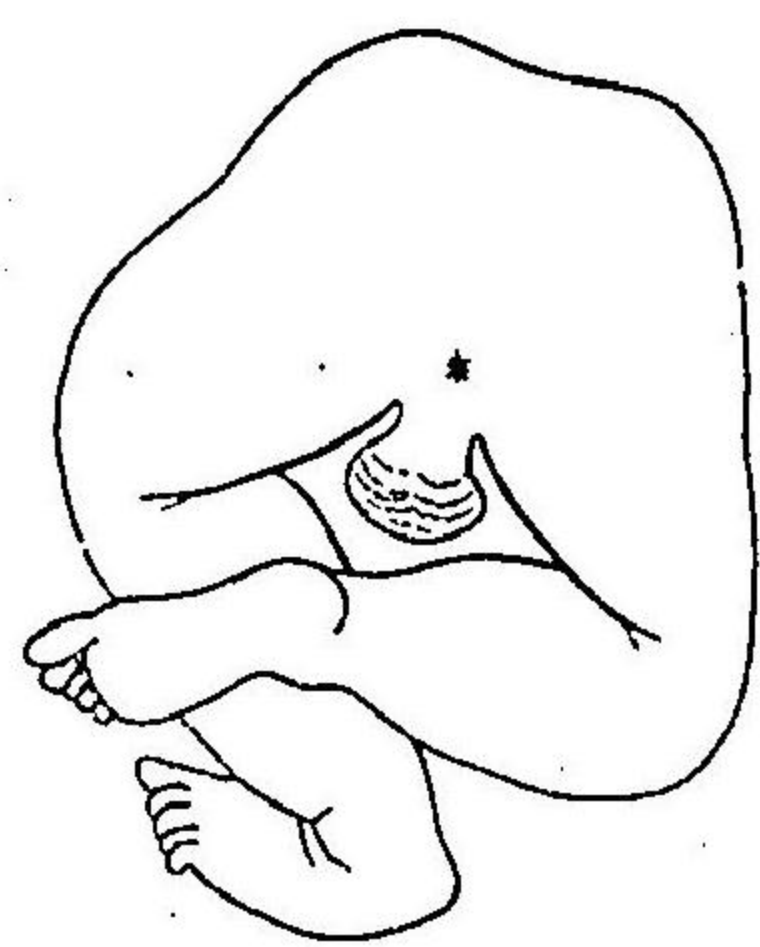
向胎二第 (一分五の大然天)

骨あり若し子宮口充分に開大せざる時は尾骨を觸れ其上部に於ては脊柱あるを認むべし他側に於ては陰部を觸れ其上部に於ては

外検査 子宮底部に於て圓形硬固なる兒頭を觸れ耻骨縫際上に在ては不正柔軟なる臀部を觸知し得べく心音は臍の高さ若くは稍之より上方にあり第一臀位に於ては其

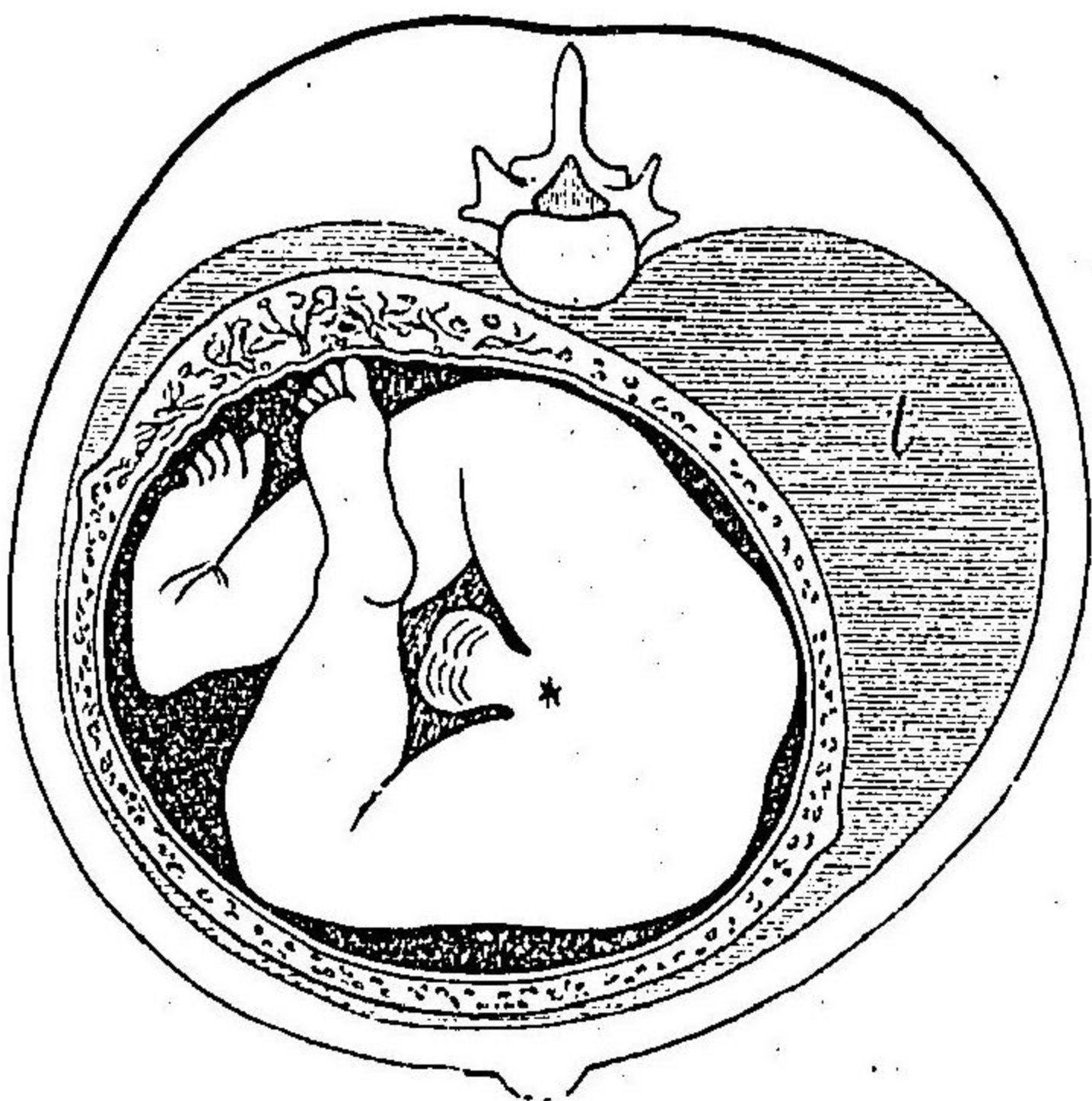
左側に第二臀位なる時は右側に聽取す

圖一十八第



兒胎熟成るた見りよ尻尾
(一分五の大然天)

圖二十八第



兒胎熟成内宮するた見りよ底宮子
(一分五の大然天) 勢姿規正の

全臀位にありては
 臀部の側に小に
 して移動し易き足
 部あり指を以て衝
 突を試むる時は容
 易く逃去するもの
 なり其他胎胞既に
 破開せる場合に於
 ては其中央に肛門
 を觸れ指を挿入す
 るに稍之を括約し
 且つ往々指先に胎
 頭部と臀部の

鑑別

を述べれば左の如し

- 一 圓形にして硬固
- 二 縫合及び臍門を具す
- 三 著明なる浮遊運動あり
- 四 尾骶骨を觸れず

臀部

不正にして柔軟
 存せず
 著明ならず
 一側に於て尖りたる尾骶骨を觸る

口と肛門の鑑別 他の諸部分によりて口と肛門は容易
 く區別し得らるべしと雖も時として不明なることあり
 然る時は左の諸點に注意すべし

口

- 一 指を挿入するも括約せず時として弱き哺乳運動あり
- 二 指を挿入すれば齒齦を觸知す
- 三 挿入せし指尖に胎莖附着することなし

肛門

稍々括約す時として強きことあり哺乳運動なし
 然ることなし
 臍と胎莖を附着す

臀位分娩の器械的作用 骨盤入口に於て臀部の横徑
 線即ち臀線は多くは其斜徑に一致す是臀部は柔軟にして
 壓縮せられ易きが故に臀部の廣徑と骨盤の廣徑と一致せ
 すして臀部は骨盤入口上に於て位したるまゝ即ち斜徑線
 に一致したるまゝ骨盤内に進入するものなり故に臀位に
 ありては第一回轉を營むことなし然れども時として尙
 頭蓋位に於けるが如く臀線と骨盤入口の横徑線と相一致
 することあり臀部骨盤腔内に入る時は第二回轉を營みつ
 る臀線は斜徑より漸次出口に至るに従ひ直徑線に一致し
 全く出口に達すれば一側の臀部は耻骨弓下に停止し他側
 の臀部は會陰部より出づ次で弓下の一臀を離れて全臀部
 に出すれば兒は足を高く舉上し軀幹と共に産出すべし稀
 に膝を屈し足は臀部に沿ふて之と共に産出すことあり
 肩胛線は臀線の占めたる斜徑と同一の斜線を取りて

骨盤内を降り出口に至るに従ひ直徑線に一致し臀部に於
 けるが如く一側の肩胛は恥骨弓下に止まり他側の肩胛は
 會陰を出で次で全く産出す際兩上肢は胸部の前面に
 於て交叉し以て共に外陰部に顯る兒頭は屈伏せる状態を
 呈し頤部は胸上に接着して兒頭の直徑線即ち矢狀縫合は
 骨盤の横徑若しくは臀線の占めたる反對の斜徑線を取りて
 其腔内に進入し漸次に回轉して後頭は恥骨弓下に止まり
 會陰部より先づ頤部を産出し顔面頤頂等之に次ぎ遂に全
 頭部を娩出す
 産瘤は先進臀部に發生し生殖器に至るまで蔓延すべ
 し
 今更に記憶に便ならしめんが爲めに臀位の内外診に於
 ける状態及び其器械的作用を左に表示せん

器械	検査内	検査外	第一臂位	第二臂位
骨盤入口に於て骨盤は第二斜徑に一致す	胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり
骨盤入口に於て骨盤は第一斜徑に一致す	胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり
骨盤入口に於て骨盤は第二斜徑に一致す	胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり
骨盤入口に於て骨盤は第一斜徑に一致す	胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり

作用	右臂部
胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり
胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり
胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり
胎児の頭部は子宮底にあり	胎児の頭部は子宮底にあり

第三及び第四臂位は甚だ稀にして假令骨盤入口に進入するの際見背は左後方(第四臂位)或は右後方(第三臂位)に向ふと雖も骨盤腔内に於て回轉して第一若しくは第二臂位と同様の器械的作用を營みて娩出すされば若し其顔面後方に回轉せざる時は頤部は恥骨弓下に止まり後頭は會陰部に對して分娩甚だ困難なるものとす

2 膝位

は毫も母兒兩體に害なくして自ら分娩を遂ぐることを得可し

各骨盤端位分娩の難易

骨盤端位中最も佳良の経過を取るは骨盤位にして不全膝位及び不全膝位之に次ぎ全膝位并に全足位は最も不良なり是れ骨盤位なる時は胎兒の骨盤と兩下肢とを合したる大部先づ出でる産道を充分に擴張しあるを以て次で出づる所の肩胛及び頭部の通過もまた從ふて容易なりと雖も膝位及び足位に於ては先進部小にして充分に産道を開大し難きを以てなり此理によりて全膝位并に全足位の其不全よりも害あること自ら明かなるべし

5 骨盤端位にして小兒の危険に陥り易き理由

一 臍帯の壓迫 骨盤端位に於ては軀幹娩出後尙大なる肩胛及び兒頭の存在するを以て此等のものが骨盤内を通過するに際しては必らずや臍帯を壓迫せざるべからず又分娩の初期に於て先進部の小なるが爲め骨盤入口を充たすこと能はざるによりて臍帯脱を起すことあり然る時は骨部の娩出時と雖も既に臍帯は壓迫せらるべし若し此壓迫五分間以上持續する時は小兒をして遂に死に至らしむるものなり

二 胎盤の剝離

骨盤端位に於ては軀幹先づ産出し大なる兒頭は最後に止まるを以て子宮の上部は空虚となりて縮小す故に兒頭未だ産出せざるに當りて胎盤の剝離を生じ小兒の血行を妨害して之を假死に陥らしめ若くは死に至らしむ

三 早期破水

骨盤端位にありては其先進部小さくし

て産道を充たすこと能はざるが爲めに羊水は多量に胎胞内に入り來り充分子宮口を開大せしめざるに先ちて既に胎胞破裂し分娩を困難ならしめ且つ之を遅延せしむる多量の羊水を失ひたるため子宮は縮小し以て胎盤の血行を害するにより胎兒をして危険ならしむ

四 分娩の遅延 産道の開大充分ならざるに早期破水すると最後に硬固にして大なる兒頭を娩出するににより分娩に長時を費し小兒をして益々危険に陥らしむ

6 骨盤端位分娩の處置

助産婦 若し婦人の妊娠中より其胎兒が骨盤端位を取れることを認むる時は直ちに醫士に乞ひて之が整復法を仰ぎ且つ常に小部分側に臥せしめて頭位に變せしめんことを務むべし分娩時に於てはなるべく早く醫士を聘せざ

るべからず何となれば醫療を要する時期に迫りて始めて之を告ぐるも醫の來るまでには已に遅れてまた救ふ能はざることあればなり若し醫士の來診遅くして危険に陥るの虞れある時は宜しく助産婦の許されたる技術即ち骨盤端位の娩出術を行ふべきものとす

骨盤端位にして胎胞未だ破裂せざる時はなるべく之を保存する様務めざるべからず即ち産婦を安静に側臥せしめ奴責を禁じ内外検査共に屢々行ふことを止むべく便通の際は必ず便器を用ふべし胎胞既に破裂して産出期に達せるものと雖も臀部の未だ産出せざる間に腹壓を禁するを良とす是れ其力を蓄えて臀部娩出後に於ける強劇の奴責に耐え得べからしむるものなり而して分娩漸次進行するに係はらず醫士の來着せざるときは産婦を仰臥せしめて臀部に枕子を挿入し産婦若し寢臺上に臥する時は

横床位を取らしむべし横床位とは臀部を床端に持ち來し
 仰臥せしめて兩脚を屈せしむるを云ふ此際兩脚を固定せ
 しめんが爲めに二人の助手に之れを保持せしむるか或は
 二個の椅子を取りて各脚を之れに載せしむるを良とす且
 つ下肢は前章に述べたるが如き足袋を以て被ふを要す茲
 に於て助産婦は總ての必要なる器具を傍らに備へ産婦の
 外陰部に向て其兩脚間に坐を占むべく尙其前方に陰部よ
 り流れ出でる汚物を受くべき器を備ふべし此際臀部若く
 は足等が陰門より顯るべく雖も決して之れを牽引すべか
 らず然らざれば之れが爲めに胎兒の正しき體勢を變じて
 上肢を伸展せしめて頭部の兩側に轉せしめ以て上肢及び
 頭部の娩出を妨げ益々胎兒を危険に陥らしむるの害
 あり已にして胎兒の臀部將に發露せんとするに至れば固
 より會陰を保護するの必要ありと雖も頭蓋位に於けるが

如く強く壓すべからず臀部産出し次で臍部出づる時は拇
 指と示指とを以て臍帯を掴み胎盤端即ち其牽引に應ずる
 端を少しく引き出して緊張を弛むべし又兩脚の間に臍帯
 挟まりて胎兒之に跨り出づる時は直ちに兒背に沿ふたる
 臍帯を掴みて之を牽き出し其關係を大ならしめて後方の
 臀部を潜らせ以て之を脱せしむるを要す此等の場合に於
 て臍帯の緊張著るしく牽引するも之に應ぜずして臍帯斷
 裂若くは胎盤の早時剝離するが如き虞れある時は速に二
 個の結紮を施して其中間を切斷し且つ最も迅速に娩出せ
 しめんことを務むべし此の如くにして臀部娩出すれば臍
 帯の切斷あるとなきことに關せず成るべく速かに産出すべ
 き様なすを要す即ち産婦に強き奴責を營ましめ適當なる
 助手あらば此者に子宮の輪狀摩擦を行はしめて陣痛を促
 し陣痛起らば直ちに兩手を以て子宮底を骨盤腔の方向に

壓せしむべし若し助手なき時は一手を以て兒體を保持し
 他手を以て子宮の摩擦及び壓入法を行ふを要す而して上
 肢は胸前に於て屈したるまゝ胸部と共に出づるものなり
 若し伸ばして頭部の兩側に至れる時は娩出術の條下に述
 ぶる方法によりて出さざるべからず肩胛娩出の際は一
 手を以て兒體を把持し之を腹上に向て舉上し一手を以て會
 陰保護すべく肩胛及び頭部産出時に於ける會陰保護を最
 も注意せざるべからず
 以上述べたるが如く骨盤端位は自然に分娩し助産婦は僅
 かに之を補助するに止まるが如きは甚だ稀にして多くは
 分娩困難なるを以て醫士の來着遅く且つ危険に迫れる時
 は速に娩出術を施して胎兒を救はざるべからず

7 骨盤端位娩出術

骨盤端位娩出術 を行ふには手指に嚴重なる消毒法
 を行ひ顯はれたる兒體は一%のゾールに浸せるガ―ゼ
 を以て之れを被ふべし今娩出術の方法を述べれば左の如
 し

- 一 臀部既に骨盤出口に來り其娩出困難なるときは兩
 手の示指を小兒の股關節部に鈎狀にかけ拇指を薦骨部に
 貼して恥骨縫際下の臀部を弓下に固定せしめ先づ會陰部
 に存する臀部より娩出し次で前方の臀部を出すべし
- 二 一足のみに出でる臀部久しく娩出せざる時は(即ち不
 全足位)一手を以て既に産出せる足の股關節部に鈎狀に
 示指を以て未だ出でざる足の股關節部に鈎狀にかけ前述
 の方法に従ひて之を牽き出すべし
- 三 兩足既に産出せる時は(即ち全足位)兩手を以て大腿
 を握り兩拇指を薦骨部に貼し以て後方の臀部より牽き出

すこと前に同じ
 四 臀部娩出すれば直ちに小兒の腹側の手指を臍部に送り臍帯の緊張せざるや否やを検すべし若し緊張すれば上記取扱法の際述べたる方法によりて處置せんことを要す

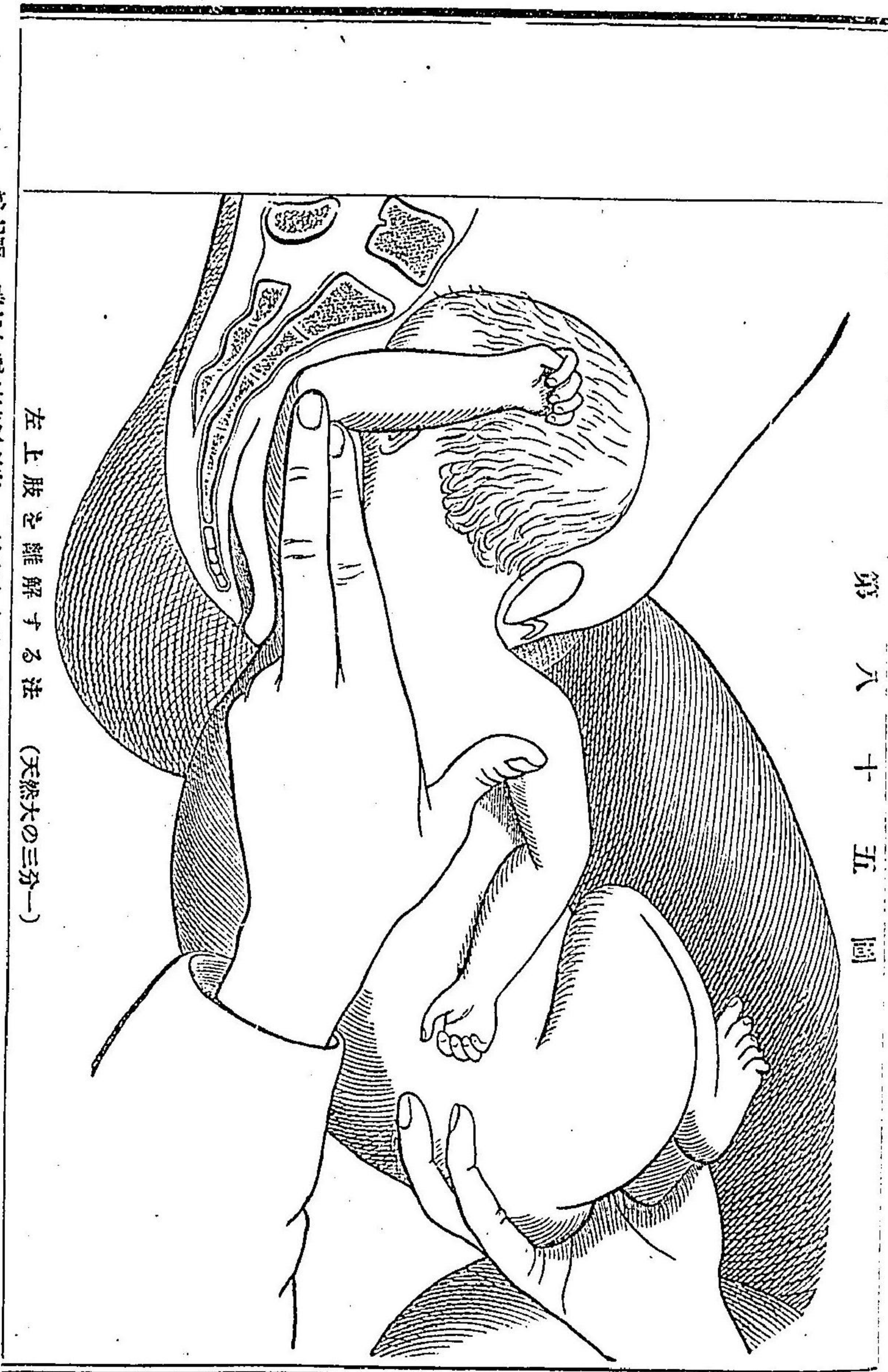
五 臍帯の検査終れば兩手の拇指を薦骨部に貼し他の四指を以て大腿及び臀部を把持し之を地平の方向に牽引すべし此際兒の兩脚は股關節に於て屈し下脚は伸して軀幹と共に娩出し或は股及び膝關節部に於て屈したるまゝ産出するものなるが故に助産婦は足のみを牽き出すことなく自然に出づるに任すべし
 六 臀部娩出するの後は産婦に奴責を命じ若くは助手をして子宮底を摩擦し且つ之を骨盤内に壓入せしめて分娩を催進せしむること亦前述の如し

第八十四圖



右 upper limb 離解する法 (天然大の三分一)

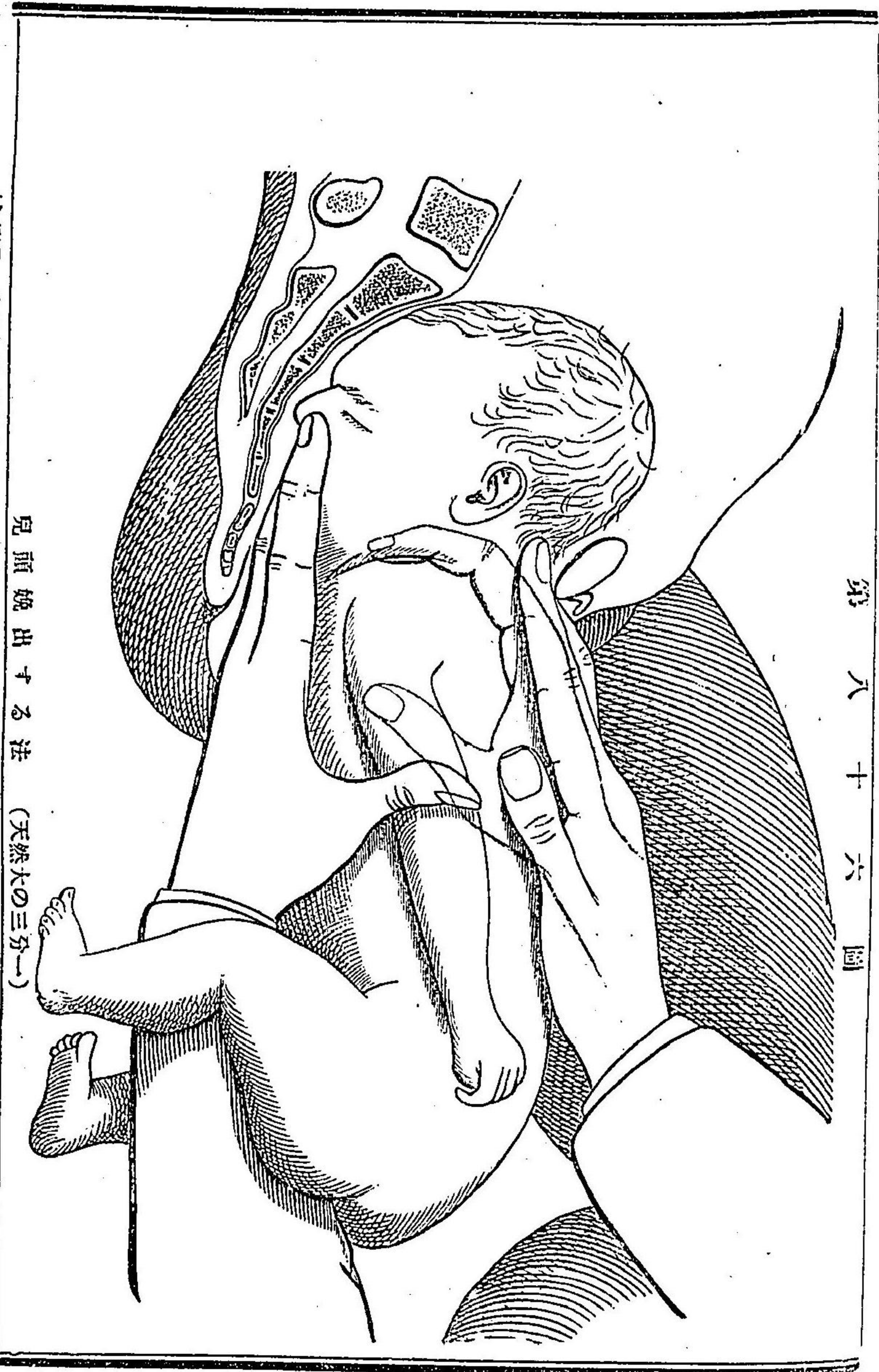
七 軀幹娩出の際其胸部顯はるゝ時は臀部を把持せし
 両手を進めて拇指を脊椎の兩側に貼し他の四指を以て胸
 廓を把持すべし腹部は内臓を損傷するの恐れあるが故に
 此部を摘みて牽引するが如きことあるべからず
 八 肩胛部骨盤の出口に顯るゝに至れば其腹側に對せ
 る助産婦の手を以て小兒の下腿を把握し以て之を擧げ且
 つ強く骨盤の一侧に偏せしめて小兒の背側よりする他
 の挿入に便ならしむ而して助産婦は他手の示指及び中指
 を小兒の背部に沿ふて腔内に挿入し後方に向ふたる肩胛
 の上を越えて肘關節部に達せしめ更に拇指を挿入し以て
 此部を握り上肢を引きて顔面を摩するが如くなさしめて出
 すべし單に上肢を引き出さんとすれば爲めに上肢の骨折
 を來すことあるを以て注意せざるべからず而して此際内
 方の手にて肘關節部を握れば外方の手にて把持せる下腿



第八十五圖

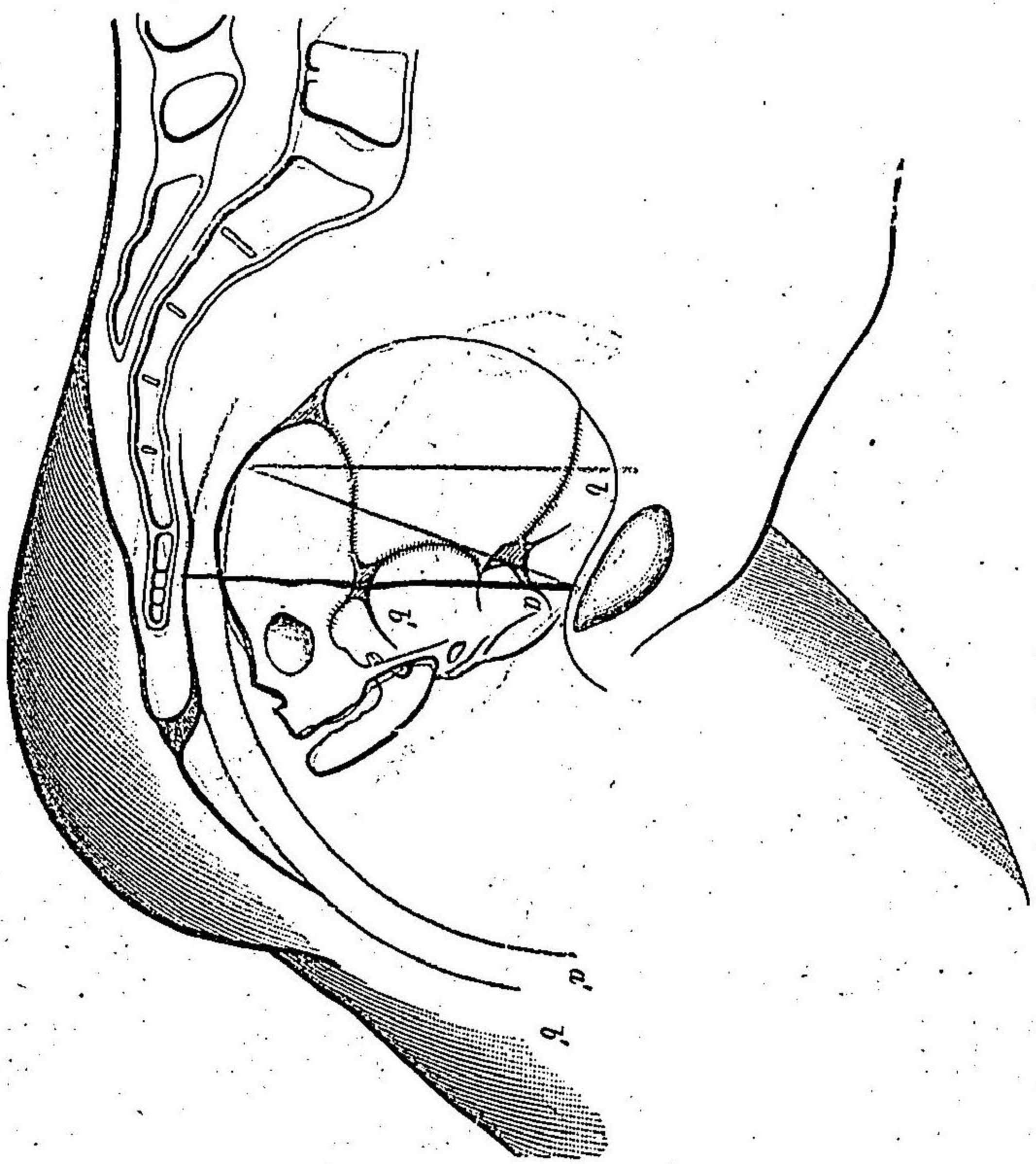
第七編 異常分娩及其取扱法 第六十一章 胎児の異常 胎下腿を離脱する法 (天然大の三分一)

を兒の背側に面せる骨盤の側に偏せしめ上肢の出づる部を廣からしむべし
 九 此の如くにして後側の上肢を離開すれば此上肢を伸ばして軀幹に接着せしめ助産婦は兩手の指を伸ばして之を軀幹の兩側に平たく貼し拇指を背椎の兩側に置き而して兒體を回轉し前方に存する上肢を會陰部に來らしむべし次に之を離開することまた初めの如くなすを要す但し此軀幹を回轉する際には決して強力を用ふべからず兩側の上肢出づる時は小兒は自ら俯きて後方に向ふものなり
 十 兒頭を娩出するには一手を以て兒體を舉上し他手の示指及び中指を會陰部より膈内に挿入して鼻翼の兩側に貼し或は此二指を口内に入れて下顎に掛け兒體を前膊上にのせて兩脚を之に跨がらしめ次に兒體を舉上せし手



第七編 異常分娩及其取扱法 第六十一章 胎児の異常 母面娩出する位 (天然大の三分一)

第八十七圖



後胎兒頭產出法 (天然大頭の三分一)

を小兒の項部に來らしめ之を頸部に鈎狀を掛け兩手を以て頭部を前上方に牽くべし此際前方の手にて先づ頂部を會陰に向て押し後頭を恥骨弓下に固定せしめて分娩の方
向に従ひ後方の手にて之を前上方に牽引し會陰部より順次に頤部顔面前頭顱頂等を出さしむべし頭部娩出の際は殊に強き腹壓を加へしめ更に助手をして腹壁上より兒頭を壓せしむれば大に其産出を容易ならしむるものなり

施術時の注意

- 一 小兒を娩出せしむる際には妄りに強力を用ふべからず否らざれば往々鎖骨上膊骨等の骨折を來すことあり
- 二 未だ兒足の出でざるに妄りに之を牽き出すが如きことあるべからず
- 三 臀部肩胛頭部等の産出する際には會陰に注意し助手をして之を保護せしむべし

四 娩出頗る困難にして小兒既に死亡し再び蘇生するの
見込みなき時は母體を損傷せしめざらんが爲めに手術
を中止して醫の來診を待つべし

五 娩出術を行ふ際には小兒は多く假死に陥るを以て
豫め蘇生術を施すの準備をなすべし

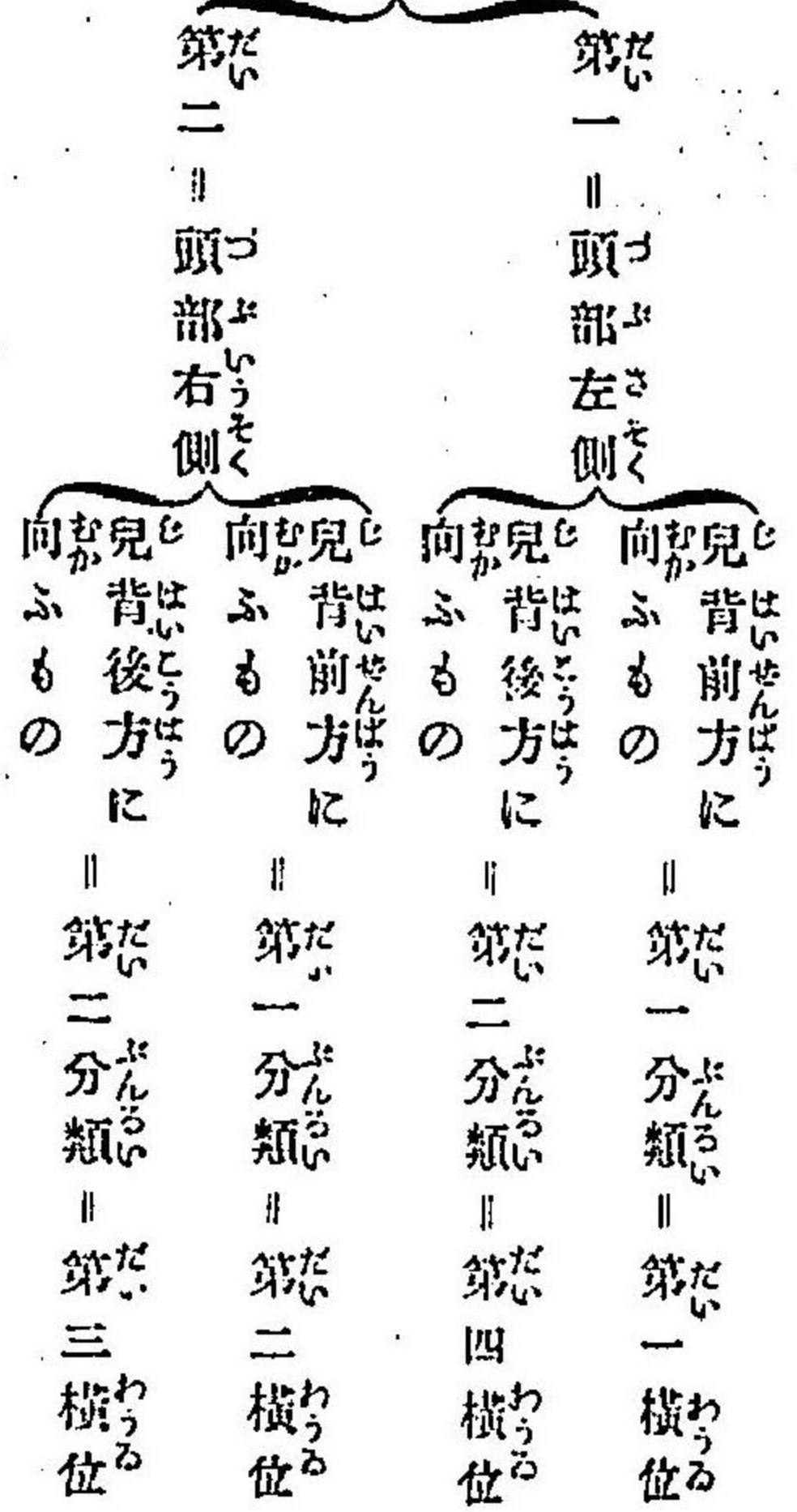
六 第三及び第四臀位にして兒の後頭後方に回轉する
時は兒頭産出の際先づ兒體を高く舉上し以て後頭を會陰
部より娩出せんことを要す

四 横位

横位とは胎兒が子宮内に於て横に存在するを云ふ然
れども正しく横に位すること稀にして多くは斜の位置
を取るが故に又之を斜位と名づく斜位にして分娩の際頭
部或は臀部低く位するときには縦位に變じて娩出すること

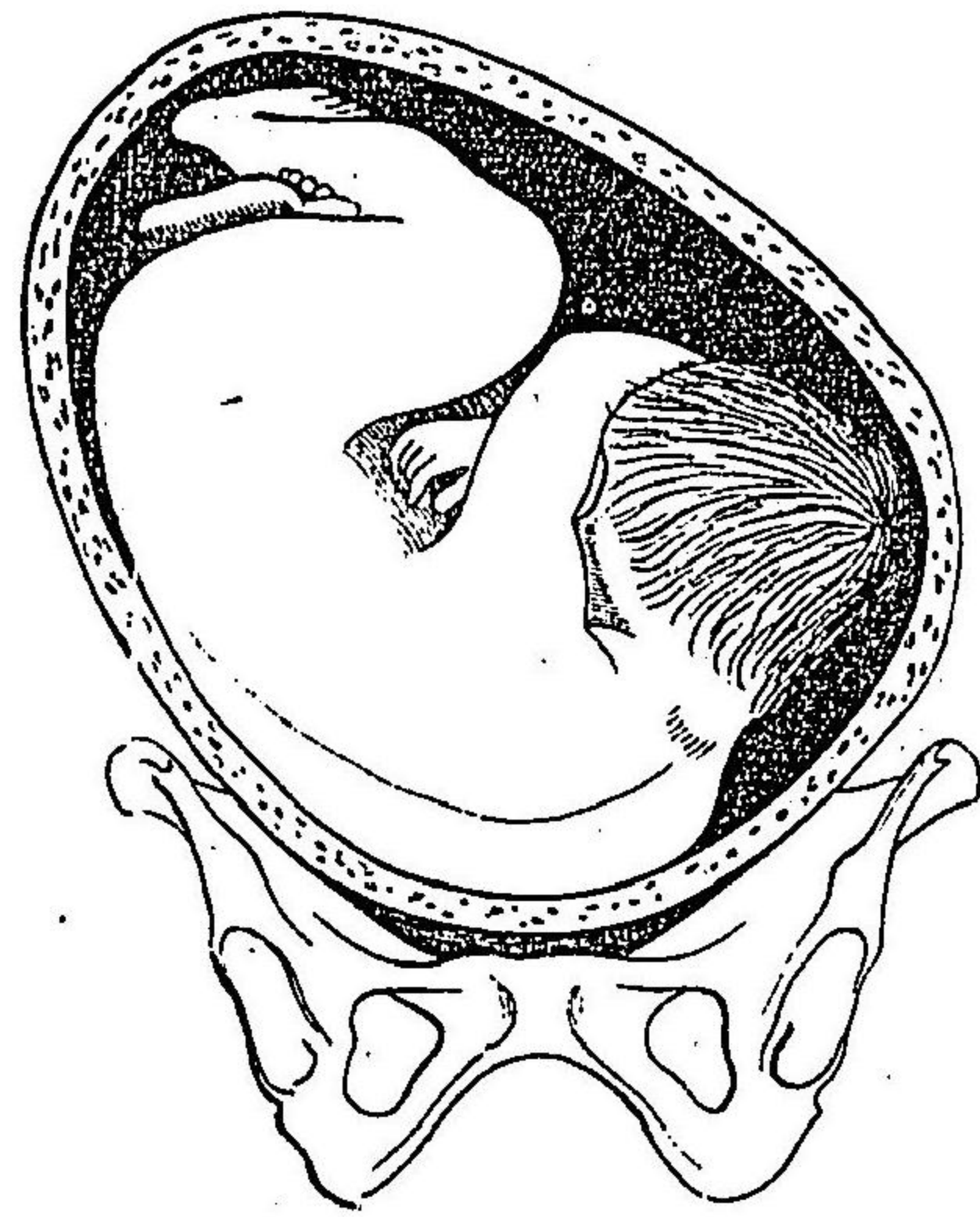
あれども然らざる時は固より自ら分娩を營むこと能はず
區別 兒頭母體の左側にあるを第一横位と云ひ右側に
あるを第二横位と云ふ而して兒背が母體の前方に向ふを
第一分類と云ひ後方に對するを第二分類と稱す其他第一
横位の第一分類を單に第一横位と云ひ第二分類の第一分
類を第二横位と稱す第二横位の第二分類を第三横位と稱
し第一横位の第二分類を第四横位と云ふことあり尙左表
に就て見るべし

横位



其他先進せる部分に依て之を肩胛位背位腹位と云ふ就中肩胛位を最も多しとす

圖八十八第



位横一第

原因 第一児頭の骨盤内に進入するを妨ぐるもの即ち狭窄骨盤内生殖器の腫瘍懸垂腹過大なる児頭臍帯が頸部に纏絡して児頭の下降を妨ぐるもの

第二胎児の移動し易きもの即ち多産婦羊膜水腫雙胎の第二胎児早産兒軟化せる胎児死兒等なり

圖九十八第



類分二第位横二第

症候 横位は左の症候によりて之を診知し得可し 外検査 視診上腹部の兩側突出して横に廣く之を觸診するに子宮底及び恥骨縫際の上腹部は空虚にして且つ子宮

の中央若くは児頭の存在せる側方に於て胎児若し斜位を背前方に向ふ時は最も明らかなり而して胎児若し斜位を

呈せる時は通常兒頭は臀部よりも低く位し腹部も亦斜めに廣きものとす

内検査 を施すに胎胞尙ほ破裂せざる時は胎兒の先進部を觸知すること能はず破水後手指を深く挿入すれば始めて骨盤入口上に肩胛の存在せるを觸知せらる或は肩胛部が緊しく骨盤内に壓入せらるることあり其肩胛は肩胛骨銷骨肋骨等の存するによりて之を知り得可し即ち肩胛骨は三角形を呈し鎖骨はS字形にして肋骨は隣々相並ぶを特異なりとす

各位置及び先進手の辨別 横位の各位置を辨別せんには肩胛骨の存否腋窩の開ける方向等を檢すべし即ち三角形の肩胛骨前方に存在すれば兒背は前方に存するものなるべく腋窩の開ける方向には臀部あり其閉ぢたる方向には頭部存在す其他S字形の鎖骨を前方に於て觸るる時は

は兒背は後方に向ふものとす此故に外診上兒頭は母體の左側に臀部は右側に位し心音は腹部の左側に於て聽取し内診するに肩胛骨は前方に觸れ腋窩は母體の右方に向て開ける時は即ち頭部は左側に存するものにして第一横位なることを認知し得べし第二横位は之と左右相反するのみ

横位 は又屢く上肢の脱出を起すを以て其左右を辨別するの必要あり其法は脱出せる手の上に檢者の手を重ねるにあり若し兩指相對せる時は異名手にして拇指と小指と相對せる時は同名手なりとす

分娩の經過 胎兒若し横位を取るときは自ら分娩を營むこと能はざるものとす今横位の分娩に際し人工の補助を加ふることなく自然に任す時は胎胞頗る早く破裂し臍帶脱上肢の脱出其他種々の障害を來す即ち先づ始め陣痛發

作すれば子宮兩側の擴張せる部分強く緊張して劇痛を發し以て漸次強度となり羊水は悉く胎胞内に集まりて早期破水を生ず然る時は暫らく陣痛止み次で再び強く起り肩胛部は深く骨盤内に壓入せられ次で胸部も共に骨盤内に進入す此際既に羊水は漏れ盡くして子宮壁は胎兒に密接し子宮の上は劇しく收缩して其厚さを増せども胎兒は毫も前進すること能はざるを以て子宮の下部は著るしく非薄となり痙攣性陣痛若くは子宮強直症を發し疼痛は益々劇しく遂に其薄き部分に破裂を生じて兒體を腹腔内に脱出せしめ母體は劇甚なる出血の爲めに死するに至る或は破裂せずとも時々は劇甚なる出血の爲めに死するに或は破産を來し或は時間を費すが爲めに子宮内に傳染毒を導きて腐敗を生じ母體は發熱甚だしく遂に虚脱に陥りて死す胎兒は既に脱出せる臍帶の壓迫により或は強き子宮の

收缩により若くは胎盤の剝離等によりて死するものなり此の如く横位の分娩は母兒兩體の生命を危険ならしむるものなりと雖も甚だ稀れには無事に經過することありその有様を二種に區別す

第一自然回轉

下降せず却て頭部或は臀部が骨盤入口に於て肩胛部著るしく痛の發作によりて胎兒自然に頭部若くは骨盤位に變じて分娩するを云ふ此の如きは産婦適當なる臥位を占めたる場合に多し

第二自己産出

に支へらるゝに際し強き陣痛によりて胎兒の下體は骨盤内に壓入せられ恰も胎兒は二つに折れたるが如き状態を呈して遂に臀位の如くなり會陰部より先づ臀部顯はれ續て軀幹と共に足部を出し最後に頭部を娩出するものなり

又一側の四肢既に脱出せる時は脱出せる上肢と同側の肩胛部とは強き陣痛によりて益々下降し遂に肩胛の上部は恥骨弓に支へられ軀幹は強く彎曲して會陰部より漸々滑り出で初めは先進肩胛部と同側なる胸部の半側を顯し次に臀部を出し頭部と脱出せざる上肢とは最後に産出するものとす

此の如き自己産出は成熟胎兒に殆んど之なく早産兒若くは雙體の第二兒の如き小なる胎兒にして而も陣痛強く骨盤廣き際にのみ發するものなり其他死胎兒軟化胎兒等にも來すものとす

處置 助産婦若し横位なることを發見せば其妊娠中なると分娩時なることに關せず直ちに産科醫に依頼すべし而して妊娠中にありては常に兒頭の存在せる側方に臥せしめ分娩時に至れば奴責を禁じ身體を安靜ならしめなるべし

く胎胞を保存せんことを勉め醫士の來診を待つべきものとす若し上肢脱出せるが如きことあるも決して之を牽引すべからず

外回轉術

外回轉術とは横位を取れる胎兒を腹壁上より頭位若くは臀位に回轉せしむる手術を云ふ此手術は妊娠中或は分娩の初期に於て胎胞の未だ破裂せざる際醫士の來診を得難き時にのみ行ふべきものなり其法先づ産婦を仰臥せしめ助産婦は産婦の顔面に對して其一側に坐し陣痛間歇時に於て一手を平たくして頭部に貼し之を強く骨盤入口に向て壓下し同時に他手を臀部に平たく貼して子宮底の方向に壓し上げるものとす若し胎兒を固定して陣痛の休息するを待ち休歇時に至れば再び手術すること前如きなすべし此くして徐々に回轉を行ひ全く縦位となる時は兒

頭が骨盤入口内に固定するまで手を以て之を其位置に保つを要す

内回轉術

外回轉術を試むるも其効なく胎胞は尙ほ存在して子宮口充分に開大せるの際醫士の來着なく之を待つ時は却て不良の結果を來し母兒兩體を危険ならしむる

場合に限り助産婦は内回轉術を施すことを得るものなり
準備 先づ膀胱直腸を空虚ならしめ外陰部及び膣内を消毒し仰臥せしめて兩脚を屈し且つ之を開かしめ膣下に

消毒

枕子を挿入し助産婦は上膊の半ば迄現はして之を嚴重に消毒し子宮内に送入すべき手は常に胎兒の臀部に對向する

の一手を撰ふべし即ち第一横位なる時は左手を用ひ第

二横位なる時は右手を用ひ而して此手には肘部まで石炭

酸華設林を塗り助産婦は産婦の兩腿間に坐を占めて手術

を初むるなり手術の目的は横位を足位に變ずるに在るも

のにして第一横位は第二足位に第二横位は第一足位とな

さしむるを要す
方式 撰びたる手の指を束ねて圓錐形となし他手の指を以て陰唇を開き送入すべき手の拇指側を恥骨縫際に小

徐々

指側を會陰部に對せしめ軽く其手を螺旋狀に回旋しつ

徐々に深く送入すべし若し陣痛發作せば其進行を止め間

歇時を待ちて進ましむるを良とす而して胎胞存在せば之

を破開して直ちに手を子宮腔内に入れ兒體に沿ふて足部

に達せしめ下方に存在せる一足を握るべし此際外手を臂

部に貼し之を押し下げ足部の把握に便ならしむるを要す

す一足を把握するに示指と中指との間に足趾關節を握

み拇指を足趾部に貼すべく兩足を把握するに兩足の間

に中指を入れ示指と環指とを以て各足の外側に貼すべし

又足部を把握するに此の如く足趾關節に於てすることな

く膝部を握る法あり此際には示指を膝の後ろに送り拇指を其前面に當てて把握するを良とす既に斯く兒足を把握したる後は陣痛間歇時に於て徐々に之を牽引し骨盤後壁に沿ふて之を娩出し兒の膝部陰裂間に至るまで牽き出すべし兒足を牽引する際は外手を兒頭に貼し之を子宮底部に向て押し上げ以て其回轉を助くべきものなり内回轉術は全く之にて終了したるものとす

術後の處置 術後は五分乃至十分間猶豫して其經過を見若し胎兒が危険に迫れるか母體既に疲勞して自然分娩に耐え得ざる時は續て娩出術を行ふべしと雖もなるべく爾後自然の經過に任ずべきものなり

第三 胎勢の異常

一 頭蓋位に於ける上肢及び下肢の下

垂并に脱出

頭蓋位に於て上肢或は下肢が一側稀れには兩側共に下垂し又は脱出することあり下垂とは未だ胎胞破裂せざるの際之を隔てて手或は足を觸るゝを云ひ脱出とは胎胞既に破裂して手或は足の顯るゝものを云ふ

原因 兒頭が子宮の下部及び骨盤の入口を完全に充たすこと能はずして生ずるものと兒頭既に骨盤内に進入するも尚ほ其傍らに間隙を有せるが爲めに生ずるものとの二種あり即ち前者に屬するは狹窄骨盤羊膜水腫懸垂腹過大胎兒等にして後者に屬するものは過大骨盤過小胎兒早産兒等なり

處置 右二種の原因中後者に依て起れる時は大なる障害なし然れども若し前者によりて來る時は頭部と脱出肢

とは固く骨盤内に箱入して分娩を營むこと能はざるに至り甚だ危険の症状を發することあるにより速かに醫治を乞ふべし而して産婦は脱出肢のなき方を下にして側臥せしむるを良とす

二 臍帶の下垂及び脱出

此症は四肢の下垂若くは脱出と同じく未だ胎胞破裂せざるの際臍帶の一部が胎兒先進部の傍らに在るか或はその下に降れるを下垂或は先進と云ひ胎胞破裂の後ち下垂と同一状態にあるを脱出と云ふ

原因

胎兒の先進部が骨盤内を充たすこと能はざるによりて生ず即ち狹窄骨盤羊膜水腫懸垂腹横位骨盤端位過大胎兒未熟兒過大骨盤等にして其他前墜胎盤早期破水過長なる臍帶産婦直立せる時の破水等も亦之が原因となる

診断

ありて柔軟なる細き索状物を觸るゝ時は臍帶の下垂なるを知るべく又胎胞既に破裂せるの際子宮口部腔内又は陰門部等に同じく搏動を有する索状物あるを認むる時は即ち臍帶の脱出せるものなることを知るべし但し陣痛時に於ては其搏動停止するものなり若し始めより搏動を有せざれば胎兒は既に死亡せるものとす

障害 臍帶の下垂又は脱出あるも母體には著るしき影響を及ぼすことなしと雖も小兒に於ては甚だ危険なり是れ臍帶は兒體と骨盤壁との間若くは緊張せる子宮口縁との間に於て壓迫せられ爲めに血行障害を來して假死に陥り分娩長時を費す時は遂に死亡するに至る臍帶脱出に於ける此の如き危険は頭蓋位の際最も著るしく足位之に次ぎ臀位にありては其害最も少なしとす

處置 臍帶の下垂若くは脱出あるを認むる時は直ちに
 醫士の來診を乞ふべし其間尙ほ胎胞破裂前にありてはな
 るべく之を保存せんことを勉め内診を避け奴責を禁じ下
 垂なき側方に安静に臥せしむべし胎胞破裂後は其壓迫を
 免れしめんが爲めに消毒せる手の一指若くは三指を以て
 兒頭を強く壓し却し且つ奴責を禁じて醫の來るを待つを
 要す若し兒頭既に骨盤出口に進み將に産出せんとするも
 のにありては子宮を摩擦して其收縮を促し且つ強き奴責
 を命じ或は後會陰壓出法を行ひて速に娩出せしむべし然
 れども全く臍帶の搏動休止して久しきを經胎児死亡せる
 ことを確むる時は宜しく自然の分娩に任すべし

三 臍帶の纏絡

臍帶は頸部軀幹四肢等に纏絡 することありといへ



第九十圖

臍帶の壓法及び前進せる肩の描下方を示す (天然大の三分一)

ども頸部に於てするを最も多しとす(前章参照)此の如き異常は臍帯の過長なるときに生じ易し若し其纏絡數回に及び臍帯の短縮を來すときは過短なる臍帯のごとき障害即ち臍帯の断裂若しくは胎盤の早期剝離子宮内翻症等を發す

處置 臍帯の纏絡を認むる時は其兩端を牽き試み以て之を弛め且つ之を解除すべし然れども著るしく緊張し小兒の娩出を防ぐる時は直ちに二個の結紮を行ひて之を切斷し速に分娩を結了せしめんことを要す

第六十二章 胎兒附屬物の異常

胎兒附屬物の異常 とは羊水卵膜臍帯胎盤等の異常を云ひ其過半は前章に記したるを以て以下分娩に必要にして且つ未だ述べざるものを論せん

一 卵膜の強硬

卵膜強硬 なる時は子宮口の開大には妨げなきも時として腹壓の力を減じ産出期を永からしむることあり或は産出期の終りに至るも尙胎胞破裂せず小兒は卵膜に包まれたるまゝ娩出することあり之を被膜兒又は囊兒と云ふ
處置 子宮口充分開大するに關はらず胎胞尙破裂せざれば速に之が穿刺法を施し若し囊兒を娩出する時は直ちに卵膜を破りて小兒を出し其室息を免れしむべし

二 臍帯の断裂

墜産 にて小兒が地上に産み落されし時又は臍帯過短なる時に於て臍帯の断裂を來すことあり其他臍帯の卵膜

附着をなせる時は臍帶断裂又は臍帶血管の裂傷を起し易し
 臍帶断裂する時は恐るべき出血を來すものにして殊に
 其断裂部臍部に近づけば近く程出血愈々甚だしとす
 處置 若し胎兒娩出中臍帶断裂の不幸に逢へば結紮し
 得べき場合に於ては直ちに兩端を結紮し産婦に奴責を命
 じて速に小兒の娩出を營ましむべし又断裂端短きたため結
 紮し難き時は尙ほ一層迅速に分娩を急がしめ娩出後直ち
 に結紮を施さんことを要す臍部に於て断裂せば石炭酸水
 に浸せるガーゼ片を以て強く此部を壓抵し且つ速に醫士
 を招くべし

三 前置胎盤

前置胎盤とは胎盤が子宮の下部に附着せるものを云ふ
 子宮の下部とは收縮輪より以下を云ひ妊娠末期に於て

收縮輪は子宮内口より凡そ六仙迷上方にあり若し胎盤の
 幾部分たりとも此部より下方に附着すれば即ち前置胎盤
 と稱するものとす

區別 前置胎盤を區別して三種とす即ち

一 全前置胎盤 一名中央前置胎盤

二 側在性前置胎盤

三 邊緣性前置胎盤

之なり

全前置胎盤とは胎盤の中央部が子宮下部の中央に位
 して全く子宮内口を被ふものを云ひ側在性前置胎盤とは
 子宮下部の側に位して胎盤の縁が子宮内口を被ふか
 或は其近くに達せるものを稱し邊緣性前置胎盤とは胎盤
 の大部分は子宮上部に附着するも其邊緣の一部が子宮下
 部即ち收縮輪より以下に存するものを云ふ

原因 經産婦或は子宮内膜炎を有する婦人等に來る然れども前置胎盤は甚だ稀なるものにして千五百回の分娩中僅かに一回あるの割合なりと云ふ

症状 前置胎盤の主要なる症状は出血なり此子宮出血は既に妊娠の末期一二箇月の頃より起るものにして著るしき原因なく不意に發し多量なることあり或は少量なることあり暫時にして一旦止血し數日若くは數週の後ち再び之を來す此の如く數回反覆しつゝ分娩期に達し茲に於て危険なる大出血を發し遂に産婦をして不幸に陥らしむるに至る時としては妊娠中より多少の出血絶えず持續するところあり斯る場合には早産を來すものとす前置胎盤の出血は胎盤の附着部低ければ低き程益々早く出血し初め且つ多量なるものなり故に最も全前置胎盤は出血少量に側在性前置胎盤之に次ぎ邊縁性前置胎盤は出血少量に

して比較的危険少く胎胞の破裂するに至れば兒體の壓迫によりて止血することあり又全前置胎盤或は側在性前置胎盤は分娩時に於て胎兒の産出に先ち其一部子宮内を出血で若くは全部脱出すること屢く之あり全前置胎盤の出血は分娩全く終るにあらざれば閉止せざるものとす

前置胎盤にして出血するの理由 子宮の下部は分娩の際上部の收縮により延長せられて産道を形づくるものなり今妊娠末期に於て子宮の刺衝機亢進し屢く收縮する時は其際共に下部も亦延長せらるべし而して胎盤なるものは縮張するの性を有せざるが故に若し此胎盤が子宮の下部に附着する時は子宮の收縮する毎に延長する子宮下部と共に伸ぶること能はず之を以て其一部分は遂に子宮壁より剝離し出血を呈するものなり

診断 他に原因なくして妊娠末期に反覆する子宮の出血

血及び開口期に於ける出血は前置胎盤か胎盤の早期剝離に基くものなり而して内診上特異なるは子宮腔部の柔軟にして肥厚せるにあり子宮口未だ開大せざる時は間接に柔軟なる胎盤を觸知し得べく且つ胎兒の先進部は甚だ不明なり子宮口充分開大の後ち手指を此内に挿入すれば直接に柔軟なる胎盤の不平面を觸るべし時としては之を子宮口に存する胎盤の不平面を觸るべし然れども凝血は尙ほ軟かにして且つ容易く破碎し得るを以て區別し得可し

處置 妊娠末期に於て不明の原因により出血する時は其前置胎盤ならざるやを疑ひ直ちに醫の診を受くべし其際に於ける助産婦の處置は妊婦を安静に臥せしむるにあり止血後と雖も此症を有する者は分娩時に至る迄成るべく安臥を命じ事物の感動を避け便通時の奴責を禁じ刺戟

性及び亢奮性の飲食物を取らしむべからず

分娩時の出血 を來す時は速に醫治を乞ふべきは勿論にして其間産婦に絶對的に安静を命じ便通時と雖も決して起立せしむべからず若し出血劇しければ二%の冷石炭酸水を取りて腔内に灌注し且つ腔内栓塞法を施すべし

腔内栓塞法 を行ふには産婦を仰臥せしめて豫め腔内及び外陰部の洗滌を行ひ次で法の如く手を消毒し而して消毒せる脱脂綿花を以て桃實大の球數個を造り之に強くして長き糸を伴し純粹の酢に浸し或は五布仙のリゾール水に浸して搾り上げ清潔なる器中に入れ置き之を常用し一手を以て陰唇を開き他手にて器中の綿球を取り之を腔内に送り強く出血部に壓抵し第二の綿球は後腔内に充填し得べき丈け幾個にても入れ以て全腔腔を充つべ

此際單に腔腔のみを栓塞し腔穹窿部を充填せざれば血液此部に貯留して遂に綿球を壓出するとあり又綿球に加ふるに幅二寸許りの長き消毒ガーゼを應用するも可なり然る時は先づ其一端を取り之を腔内に入れ漸次一小部分づゝ送入し以て固く子宮口を壓迫し全腔腔を充たすに至りて止むガ一モ片餘らば之を切り去るべし此の如く栓塞法を行ふの後は産婦の兩脚を固く閉合せしむを要す此法は子宮口未だ開大せざるの際賞用すべきものにして即ち壓迫に依りて出血を止め且つ子宮體の收縮を促して子宮口の開大を助くるものなり腔内栓塞法の爲めに排尿を妨ぐるものは嚴重に消毒せるカテーテルを用ふべし

上の法は如く腔内の栓塞を施すと雖も止血せず且つ尙醫士の來診せざる時は注意して内診を施し若し子宮口充分に開大して此部に卵膜を觸れ其側在性前置胎盤なること

を知らば卵膜穿孔法を行ふべし然れども子宮口の直徑尙ほ八仙迷以下なるか陣痛弱きか又は臍帶の先進ある時は此法を施すこと勿れ

卵膜を穿孔するには示指を卵膜部に貼し其指尖の爪を以て陣痛發作時に乘じ之を薦骨岬に向て壓すべし多くは之によりて其目的を達し得れども若し能はざる時はピンセット若くはカテーテルの鐵線を消毒し之を手指に沿ふて腔内に送入り以て卵膜を穿孔すべし此の如く卵膜を破る時は幾分加胎盤の剝離を妨げ且つ此胎兒の體部は下降して出血部を壓するが故に止血せしむ此際胎兒が臀位若くは足位を取れるものによりては其一足を握り外陰部に至るまで牽出すべし之によりて兒の臀部は子宮口部に來り強く出血部を壓して確實に止血するを常とす然れども決して妄りに卵膜穿孔法を行ふべからず何となれば羊水

を漏出せしめ却て分娩を困難ならしむるの恐れあればな
 り
 卵膜穿孔法を施して効なきか全前置胎盤にして膣内
 栓塞法を施すも止血せず産婦危険に頻するに至り尙醫士
 の來診なき時は嚴重なる消毒法を施して手指を以て胎盤
 或は卵膜を穿通し内回転術に依りて胎盤の一端を握り之を牽
 引して其大腿部或は臀部により胎盤の剝離部を壓迫せし
 め以て止血を營ましむべし胎兒が骨盤端位を取れる時は
 回転術を要せず直ちに一足を握りて牽下すれば良し内回
 轉術の方法は横位に於ける處置の際述べたるものと異な
 ることなく内方に送り入すべき手は兒の腹側に面せる方を
 撰ぶべく即ち第一頭蓋位にありては左手第二頭蓋位にあ
 りては右手を用ふべし外手は始め子宮底部より兒の臀部
 を壓下して内手兒足に達することを容易ならしめ回転術を

始むれば兒頭に貼して之を子宮底部に押し上げて内手の
 働きを助くべし此の如く回転術を施して其足を牽引し之
 によりて止血するを得れば爾後自然の娩出に任すを要す
 然れども尙ほ容易に止血せず産婦益々危険に迫れば宜し
 く回転術に續て娩出術を行ふべし其方法は骨盤端位の條
 下に詳なり
 胎盤は既に其一部分剝離せるによりて直ちに産出す
 べし然れども此際陣痛微弱により甚だしき出血を呈する
 とあり是れ胎盤の存在せる子宮の下部は上部に比すれば
 筋の収縮大に微弱なるによる若し胎盤産出前に多量の出
 血ありて醫士の來診なき時は手及び陰部の消毒法を行ひ
 手を膣内に送り入して胎盤を剝離し之を娩出せしめ子宮膣
 内に攝氏五十度の温を有せる二%のリゾール水を灌注し
 子宮摩擦法を行ひ以て其収縮を促し出血を止めしむべし

其他前置胎盤に於ては數回多量の出血を現すを以て産婦は甚だしき貧血に陥るが故に充奮劑を與へ前章に述べ方法によりて之を處置せざるべからず

四 胎盤の早期剝離

胎盤の早期剝離とは分娩の初期或は尙ほ妊娠中に於て胎盤が子宮壁より剝離するものを云ふ若し妊娠中に早期剝離を來す時は早産を誘起するを常とす
原因 子宮内膜炎妊娠性腎炎身體の劇動腹部の打撲其他分娩の際卵膜強硬にして胎胞の破裂し難きもの或は破水に依て突然多量の羊水を一頓に漏せしもの又は雙胎の第一兒娩出後等の諸原因に由て胎盤の早期剝離を來すは剝離部の早期剝離の主要なる症候は出血なりとす此出血は剝離部の母體血管より起るものにして内出血及び外出

血の二種あり

内出血

とは子宮壁と剝離せる胎盤及び卵膜との間に

出でたる血液滲留して外部に顯れざるものを云ふ然れども通常は幾分か外部に出血するものなり内出血の症候は下腹部に突然劇しき疼痛を發し子宮は増大若くは變形を來し且つ此部に張り緊るが如き感覺あり陣痛は止む而して母體は脈搏頻數細小となり呼吸困難を起し四肢厥冷し人事不省となり遂に虚脱に陥りて死す即ち急性貧血の徴を呈せるものなり此の如き内出血の症候は恰も子宮破裂に類すれども後者は子宮増大することなきを以て之を區別し得べし
外出血 とは即ち血液が外部に漏れ出づるものを云ひ子宮壁と卵膜との間に道を開いて流出するものなり此出血に於ても亦急性貧血の徴を呈す